
そして彼は月夜に笑う

塔城 虚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして彼は月夜に笑う

【Nコード】

N2678G

【作者名】

塔城 虚

【あらすじ】

魔術、それは世界を捻じ曲げる力。魔法、それは世界に干渉する力。根源を同じくしながら、決して交わるはずのない力が重なる時、世界はどうなるのだろうか？

プロローグ

プロローグ

薄暗い部屋の中、蠟燭の明かりの中に三つの人影があつた。

「お父様、準備が整いました。」

そう言ったのは十代前半と思われる少女。

その表情は感情を感じさせない無表情であるものの、よく見れば悔しげに唇を噛み締めているのが見て取れる。

「そうか……」

お父様、と呼ばれた四十代半ばの男はもう一つの影へと視線を転じた。

そこに立っていたのは、漆黒の長髪を頭の後ろで縛り、黒曜石のような瞳を持った青年。

その足元には複雑な紋様の魔法陣が描かれており、青白い燐光を放っている。

「準備はいいか？」

青年は軽く頷くと男に頭を下げる。

「何から何までありますがとうございます」

「気にすることはない、君は私の弟子だ。それに、私には君に礼を言われる資格などない。私にもっと力があれば、君を教会から守る

ことも出来たのだから。私が不甲斐無いばかりに……」

悔しげに拳を握りしめる男に、青年は首を横に振って答えた。

「俺は、貴方の弟子であつたことを誇りに思っています。貴方に出会わなければ、俺はとうの昔に死んでいたでしょうから。」

青年はそう言つて視線を少女へと転じた。

「アリア、師匠を頼んだぞ。この人は誰かが見張つてないとすぐに無茶するんだから」

アリアと呼ばれた少女は小さく頷き、兄弟子の姿を目に焼き付けようとしっかりと青年と視線を合わせた。

魔法陣から放たれる燐光は輝きを増し、蠟燭の頼りない明かりに照らされた室内は今や青白い光に満たされている。

その神秘的な光景は別れの時を嫌というほど感じさせた。

「そろそろ時間だ」

男の言葉に青年は頷き、じっと自分を見つめる少女を安心させるように、笑顔を浮かべた。

「それじゃ、そろそろ行きます。アリア、俺が無事に転移出来るように祈つてくれよな？」

「それは私の術式が信用出来ないということかな？」

「い、いやだなあ、そんなわけないじゃないですか」

二人の間の抜けたやり取りに、深刻な顔をしていた少女は薄く微笑んだ。

それを見た二人は、少女からは見えない位置で親指を立ててニヤリと笑う。

室内に満ちる燐光は、目を開いているのが困難なほどに輝く。

その中にあっても、三人は目を閉じることはない。

旅立つ者は、自らの生きた世界を、それを知るものを記憶に焼き付けるために。

残る者は、共に過ごしてきた家族の旅立ちを見送るために。

「師匠、アリア、行ってきます」

青年の言葉が引き金となったのか、舞い踊る燐光が渦を巻き、すべてを呑み込みまんとする濁流のように猛り狂う。

光の奔流が青年の姿を覆い隠し、世界が白銀に塗り替えられた。

さよならは言わない

音のなくなった世界で、少女は確かに聞いた。

兄弟子であり、淡い初恋の相手であった、誰よりも臆病で、そのくせ困っている人を放っておけないお人好しの青年の口癖。

青年の過去がどんなものだったのか、少女には分からない。

それでも、彼が『さよなら』というたった四文字の言葉を何より嫌っていることは知っている。

だから、さよならは言わない。

世界に音が戻り、光が収まったとき、そこに青年の姿はなかった。

青年がどんな世界に転移したのかは分からない。

もう二度と、彼に触れることも、声を聞くことも叶わない。

少女に出来るのはただ祈ることだけ。

故に、少女は祈る。

彼の生きる新たな世界が、彼にとって、優しい世界であるように。

第一話

「う……」

後頭部に感じる鈍痛で目が覚めた。

体を起こして触れてみると、指先に感じる腫れ。

振り返ってみると、ちょうど頭の位置に大きめの石があった。

どうやら、こいつが原因らしい。痛みの理由が分かったところで立ち上がって、周囲を観察する。

「どこだ？ここ」

周りに見えるのは雪の降り積もった大地と無数の木々。

枝の隙間から光が射していることからまだ昼間だと思われるが、頭上を覆う密集した枝のせいで大半が遮られており、辺りは薄暗い。

森の中であることはわかるが、こんなところに来た覚えはない。

何があったのか思い出そうとして、近付いてくる人の気配に気が付いた。

「ちょうどいい、ここがどこなのか聞いてみるか。」

そうと決まれば善は急げ、だ。

気配の方へと近付いて行くと、突然、空気が変わった。

この空気は知っている。

敵意。

それもそうか、と嘆息する。

誰だって、森の中で近付いて来る気配があれば警戒するだろう。

どうしたものかと考えていたところで、先ほどから感じているものとは比較にならない、明確な殺気を感じ、慌てて後ろへ飛ぶ。

見れば先程まで立っていた場所に巨大な氷柱が突き刺さっている。
明らかに自然のものではない。となれば、考えられる可能性はただ一つ。

「魔術師か……」

魔術師。

魔力を用いて神秘を成すもの。

科学の発展した現代においては、空想上の存在である。

しかし、確かに魔術師は存在するのだ。

今し方攻撃を仕掛けてきた人物然り、そして、自身もまた、魔術師と呼ばれる者の一人。

「ちつ、めんどくせえ……」

とにかく、今は身の安全を確保することが最優先。
躊躇っている暇などない。

「リリース・アクセル・イグズイウス」

身体強化と同時に牽制の魔弾と共に走り出す。
相手の位置は分かっている。

一気に距離を詰めて無力化するのが最善。

木の幹を蹴りつけながら相手の背後に回り、魔力を乗せた右拳を叩き込むべく、振り被る。

相手もこちらに気付いて振り向くが、もう遅い。

「なっ」

とてつもない衝撃を感じ、木の葉のごとく吹き飛ばされながら必死

に体を捻り、なんとか足から着地する。

今のは、一体……？

相手の攻撃ではないだろう。完全に不意を突いていたのだから、そんな余裕はなかったはずだ。

対してこちらの拳は確かに相手をとらえたように見えた。

視線を巡らせると相手は十メートルほど離れたところに倒れていた。警戒しながら近付いて驚いた。そこに倒れていたのは十四歳程の少女。どうやら気絶しているらしい。

ポケットから取り出した煙草に火をつけながら先ほどの戦いを反芻する。

それにしても驚いた。おそらく先ほどの衝撃は対物理障壁を殴ったためだろうが、この若さであればどの結界が張れる魔術師がいたとは。

同じ魔術師として気になるところではあるが、今はそれどころではない。とりあえず近くの町へ行かなければ何も出来ないのだから。そのためには彼女を起こして尋ねるのが手っ取り早い。

そう考え声をかけようとしたところで、少女が目を覚ました。

「おーい、大丈夫か？」

そう声をかけると、少女は思わず拍手をしてしまいそんな身のこなしで距離をとった。

絹糸のように艶やかな金髪が風になびく。

どうやらかなり警戒されているらしい。深く澄んだ碧眼は油断なくこちらを睨みつけている。

「……貴様、一体何者だ？」

「人に名前を聞くときは、自分から名乗るのが礼儀じゃないのか？」

「うるさい！貴様黙って答えればいいんだ！」

うん、あれだ、黙っていたら答えられないよな。

しかし、いちいち突っ込んでいては話が進まない。ここは素直に答えた方がよさそうだ。

「俺は鷹司統也、魔術師だ」

「貴様の目的は何だ？」

「目的？何のことだ？」

「とぼけるな！この時期に結界を破って侵入したんだ、何をすりゃもりだ！」

結界？この時期？何のことだろうか。

「あー、ちよつといいか？話が全く見えないんだが……」

「……貴様、本当に何も知らんのか？ならば質問を変えよう。貴様はどこから来た？」

「どこからって……。ちよつと待ってくれ、今思い出す。」

そう言えば、なんであんなところにいたんだ？その前に何をしていた……？

「……あああつ！」

「きゃっ」

可愛い悲鳴に少女の方を見ると、尻餅をついて呆然とこちらを見ていた。どうやらあの悲鳴は彼女のものらしい。

しばらく呆然としていた少女だがその顔が羞恥に赤く染まっていく。

「と、突然大声を出すな！」

誤魔化すように大声で叫んでも、過去は消せない。からかってやろうかとも思ったが、流石に大人気無いのでやめておく。

「ああ、すまん。それより、思い出したぞ」

いつの間にか燃え尽きていた煙草の吸殻を携帯灰皿にしまいながら何事もなかったように受け流すと、少女は先程までと同じ高圧的な態度を装い、続きを促してきた。まだ赤みを帯びている顔でそんな態度をとられても、少しも怖くないのだが。

「あー、そのー」

「いいからさっさと話せ」

絶対信じないよなあ、と思いながらも出来る限り真剣な表情を作って口を開く。

「……俺は、この世界の住人じゃない。」

「……」

「……」

「……ふざけているのか？」

ほらね、やっぱり信じてない。

「ふざけてなんかいない。事実だ。俺はこの世界とは違う世界から来た。」

「ふ、ふざけるな！世界の枠を飛び越えただと？そんなことが出来る訳が無いだろう！」

「だから事実なんだって。俺だってこんなこと言っただけで信じてもらえるとは思ってねえよ。」

俺の言葉に、少女は何かを考えるようなそぶりを見せ、探るような視線を向ける。

「ふん、ならば証拠を見せてみる」

「証拠？」

「貴様が異世界から来たという証拠を見せろと言っているんだ」

「そんな都合の良い物がある訳ないだろ？」

「……貴様、先ほど魔術師だと言ったな？」

「ああ、それがどうかしたのか？」

少女は、うむ、と頷いた。

「この世界では私たちのような存在は『魔法師』と呼ばれる。そして、魔法師の扱う術を魔法と呼ぶ。貴様の言うことが正しければ、魔法と魔術の間には体系的に差異が生じるはず。それを見せろと言っているのだ」

「つまり、俺が魔術を使えばいいのか？」

「そう言っているだろうが」

確かに可能性はあるかもしれない。魔術と魔法が別物だとするなら、違いがあつて当然。ルーツが同じだったとしても、世界が違う以上全く同一であるはずがない。立ち上がり、少女に背を向ける。

「リリース・アクセル・イグズイウス」

幻想を結び、神秘を成す。それが魔術。つまり、魔術の本質は自己暗示。すべての答えは己が内にある。

「焼き尽くせ」

頭上にかざした手の先に直径二十センチほどの火球が出現し、振り下ろされた腕に従い飛翔する。着弾。

轟音とともに爆風が吹き荒れ木々がざわめく。大量の雪が蒸発したことにより生じた水蒸気が晴れると、着弾した地点には直径二メートルほどの穴が開いていた。

振り返ると、少女が目を丸くして呆然としている。ギギギッ、と音のしそうなぎこちない動作でこちらを見た。

「なっ……」

「な？」

「な、なんだあれは！」

「うおっ」

ようやく喋ったと思ったたら胸倉を掴まれた。そのうえ容赦なくがくがくと揺さぶってくる。

「これが貴様の言う魔術か！ふざけるのもいい加減にしろ！たったあれだけの詠唱であの威力だと？私をバカにしているのか！」

「ちょ、おい、落ち着けっ……！」

流石に苦しくなってきたので頭を叩いてやめさせる。強く叩き過ぎたのか頭を押さえて蹲ってしまった。

「く、くう……。な、何をするっ……」

目に涙を浮かべて上目遣いで睨みつけるその姿に、途轍もない罪悪感到に苛まれ、とりあえず頭を撫でてみた。

大人しく撫でられていた少女だったが、しばらくすると手を払って立ち上がった。

「子供扱いするんじゃない！」

「へいへい、そりゃ悪かったな」

腕を組みジロリと見ら見つけてくる少女。その様子に知らず笑みがこぼれる。

「ふん、まあいい。とりあえず貴様の言う魔術というものが魔法とは別のものだということは分かった。それで、貴様は何のためにこの世界へ来たんだ？」

この世界に來た理由、か……。

新しい煙草に火をつけ、その先端から立ち上る紫煙を眺める。

「話したくないなら別にいいがな」

黙り込んだ俺に氣を使つたわけではないだろうが、どうでもいいといわんばかりの口調で言つた。

「でも、いいのか？自分で言うのもなんだが、俺は不審人物だぞ？」

「私をバカにするな。貴様がその気なら、私はすでに五回は死んでいるはずだろう？演技でない確証はないが、何かするつもりならそんなにリスクの高い真似はせん。違うか？」

「確かにそうかもしれないが……」

「それでも人を見る目には自信があつてな。それとも何か？貴様は私に疑われないのか？」

にやりと笑いながら、ん？、と詰め寄ってくる少女には敵わない。

「分かった、降参だ」

その言葉に勝ち誇ったような笑みを浮かべ、満足そうに頷いた。

「うむ。しかし、この世界の住人でないとなると、住む場所もないのだろう？どうするつもりだ？」

「まあ、適当に仕事を探して何とかするさ」

「……」

黙り込んだ少女を不審に思い様子を窺うと、何やらぶつぶつと呟いている。そして大きく頷いたかと思えば物凄い速さで顔を上げた。嫌な予感がした。

こちらを見たその目が、獲物を見つけた狼のような、何かを企んでいるときの妹弟子のような光を湛えていたのだから。

「よし、私が仕事を紹介してやろう！」

「い、いや、そこまで迷惑をかけるわけには……」

身の安全を確保しようとしたものの、

「遠慮するな、私に任せておけ」

などとこれ以上無い位の嬉しそうな笑顔で言われては断れるはずもなく。

「私はディアナ・K・ブリュンヒルデ。偉大なる吸血鬼の真祖だ。ついて来い、鷹司統也」

上機嫌で歩きだすディアナについて行くことしか出来なかった。

第二話

ディアナに連れられてたどり着いた場所は、レンガ造りの建物だった。

道すがら聞いた話によると、ここは日本の関東地方にある国内最大級の学園都市であり、『霧生市』というらしい。幼等部から大学院まであり、生徒の総数は八千人を超える。さらに、国内最大の霊脈が流れ、日本魔法協会の本部も置かれているという。

この建物は中等部の校舎らしいが、とんでもなく広い。普通の学校の三倍はありそうだ。

そんなことを考えていると、目の前を歩いていたディアナが突然立ち止った。

目の前には大きな扉。

その上にあるプレートには『学園長室』の文字。

ディアナは僅かの躊躇もなくその扉を開き、中へと入っていく。

「爺、面白い奴を連れて来たぞ」

おい、学園長を爺呼ばわりかよ……。いや、ディアナは四百年以上生きているって言うし、いいのか？

ディアナに続いて扉をくぐると、かすかな違和感を覚えた。

それを無視して視線を巡らすと、重厚なデスクの向こうに目が細く、豊かな白髭を蓄えた、禿頭の小柄な老人の姿があった。穏やかな微笑を湛え、好々爺然とした雰囲気漂わせながらも、その根底には確固たる強い意志の光が見える。

ディアナの説明を聞くその様子にかつての師匠の姿が重なった。

「おいつ、聞いているのか！」

ディアナの大声で我に返ると、二人の視線が俺に集中していた。デ

イアナの不機嫌そうな様子から察するに、何度も俺を呼んでいたらしい。

「ああ、悪い悪い。」

目の前にあつたディアナの頭を撫でる。

「っ、子供扱いするなと言っているだろうが！」

「あ、悪い、つい癖だな」

「どんな癖だ！」

「ほっほっほっ、お主が鷹司統也か。ディアナにそんなことをするなど命知らずじゃな。恐ろしくてわしにはとても出来んわい。わしは月森孝造じゃ、この学園の学園長をしておる。」

穏やかに笑いながら言う老人に氣勢を削がれたのか、ディアナはそっぽを向いて黙り込んでしまった。

「お主もわかっておると思うが、今のお主の存在は非常に怪しいものじゃ。ディアナは心配はいらんと言っておるし、それを疑うわけでもないんじゃが、万が一ということもあるからのう。いくつか質問させてもらうぞ?」

当然の処置だろう。

学園長ということは、この学園都市の最高責任者だということ。突然現れた素性のわからない男を放置しておくわけにもいかないだろう。

「構いませんよ。自分が不審人物だということは理解してますから」

「うむ。では最初に聞くが、お主が異世界の人間であるという証拠は？」

「そんなものある訳がないでしょう。この世界のことも知らないのに、どうやって証明しろというんですか？」

「では、君の世界について、話してはくれんか？」

探るような視線に晒されながら、俺の世界の歴史や、魔術の位置付け、その体系などを話す。

しばらく黙っていた学園長だったが、姿勢をただすと深々と頭を下げた。

「疑うような真似をしてすまなかったのう。お主の言葉に嘘はないようじゃ」

そこで最初に感じた違和感の正体に気付いた。

「虚言探知、か……」

「その通りじゃ。それにしても、よく分かったのう。いつから気付いておった？」

「初めから違和感がありましたけど、気付いたのは今ですよ」

そういうと、学園長は流石じゃのう、と呟いてディアナを見る。

「して、ディアナよ、わしにどうしろというのじゃ？」

「ふざけた奴だが、実力は確かだ。広域監査員としてでも雇ってやれ」

「確かに実力はあるようじゃし……よかつ、手続きはこちらでしておくが、構わんかの？」

何やら俺の知らないところで話が進んでしまっているようだ。とはいえ、内容もわからないような仕事するのは流石に遠慮したい。

「広域監査員？」

「分かりやすく言えば警備員のようなものじゃ。生徒同士の喧嘩の仲裁が主な仕事じゃが、それはあくまで表向きのものでな。お主も知つての通り、此処の地下には大規模な霊脈がある。」

それを狙って現れる魔物の類を迎撃することが本来の目的じゃな。」

まあ、向こうでも似たようなことをやっていたわけだし、別にいいか。

「分かりました。そちらがよろしければお願いします」

「では、明日もう一度来なさい。その時に正式に契約するからの。それから、念のためにしばらく監視をつけることになると思うが、構わんじゃろ？」

「妥当な判断ですね」

「では、ディアナ、頼んだぞ。統也君、しばらくはディアナの家に住むといい」

学園長が言うが早いのか、ディアナは踵を返して理事長室を後にする。色々言いたいことはあったが、仕方なくディアナの後を追おうと振り返ったところで、理事長に呼び止められた。

「ディアナはああ見えて寂しがり屋じゃ。なにせ、人生の殆どを一人で生きてきたからのう。良ければ、話し相手になつてやってくれるか？」

その言葉に頷くことで答え、ディアナの後を追った。

ディアナと合流し、ディアナの家へと向かう。時刻は午後四時を回っており、辺りは徐々に暗くなつてきているが、広々とした道の両側には沢山の店が並び、人通りも多い。俺の暮らしてきた街は、どこもこの時間には閑散としていたから、この雰囲気は新鮮だ。あたりを見回しながら歩いていると、不意にディアナと目が合った。

「そんなに珍しいのか？」

ディアナにとってはこの風景が日常の一部なのだろう、不思議そうに聞いて来る。

取り出した煙草に火をつけてから答える。

「ああ。俺は向こうじゃいろいろと訳ありでな、こんな賑やかな街に居た記憶がほとんど無いんだ。」

ディアナは、そうか、と呟いて黙り込む。

悲しげに揺れる碧眼は何を見ているのだろうか。もしかしたら、ディアナにも似たようなことがあったのかもしれない

い。

向こうの世界でも、吸血鬼は存在そのものが認められていない。教会に見つかれば問答無用で殲滅されるのだ。

こちらの世界でも似たようなものだろう。

見つかったら最後、生き残るためには戦わなければならない。

そんな生活を続けてきたのだとしたら……。

「考えるだけ無駄か……」

「ん？何か言ったか？」

「いや、なんでもない」

いくら考えても答えが出ることのない問題を思考の外に追いやる。

考えるのをやめると空腹を感じた。

目覚めたのがこちらへ来てすぐだとしてもほぼ丸一日何も食べていない。

「なあ、ディアナ」

「なんだ？」

「お前、飯とかどうしてるんだ？」

「食べるに決まっているだろう」

お前はバカか、と言わんばかりにため息をつくディアナに、バカはお前だ、と言いたくなるのを堪える。

「いや、そうじゃなくてな、自分で作ったりするのか？」

自分の勘違いに気付いたディアナの顔が羞恥に赤く染まる。

「そ、そんな訳ないだろう。なぜ私がそんなことをせねばならんだ！」

あまりの豹変ぶりに思わず苦笑すると、睨まれた。

ディアナの頭をわしゃわしゃと撫でながら考える。ディアナが妹弟子と同じくらいの見た目だからだろうか、なんとなく放っておけない。

まあ、そんなことはどうでもいい。

「よし、じゃあ、今日は俺が作ろう」

俺の手を払いのけようと唸っていたディアナを見ると、呆気にとられたような顔をして固まっている。

周りを見回すと、ちょうどいいところにスーパーを見つけた。

俺の腕を掴んだままになっていたディアナの手を掴んでスーパーへと向かう。

落ち着かない様子のディアナを引き連れて買い物を済ませた後たどり着いたのは、意外なことにどこにでもあるようなごく普通の一家だった。

第三話

鷹司統也。

黒の長髪に黒の瞳、黒い長袖のシャツに黒のパンツ、黒い外套を纏った黒一色の男。

年の頃は二十前後だろうか、見ようによつては高校生くらいにも見える。

長身痩躯、眉目秀麗、男にしては珍しい長髪と、一度見れば記憶に強く残るだろう。

魔術師を自称し、両手首にかなり高度なアーティファクトと思われる革のリストバンドをつけている。

異世界の住人であると主張し、今現在私の目の前に緊張の面持ちで座る不審人物。

更に付け加えるなら、やけに料理が上手い。

「どうした？ひょっとして口に合わなかったか？」

黙り込んだ私に不安を感じたのか、オロオロし始めた。

それは私に対するあてつけか？

とてもではないが、私にはこんなに美味しい料理は作れん。

「まあまあだな」

そう答えてやると、心底安心したような笑みを見せる。
わからない。

この男は相当過酷な生活を送ってきたのだろう。森での一件がそれを証明している。

あの時私が叩きつけた殺気は、そこらの奴ならまともに動くことも出来なくなるレベルのものだ。

にもかかわらず、この男は咄嗟に飛び退ってこちらの攻撃をかわし、あまつさえ逆に奇襲を仕掛けてきた。

その上、最後の一撃の時、攻撃を受ける直前まで全く気付かなかった。

殺気すらも、だ。

それに、過去に触れるような話題が出た時の反応も気になる。

懐かしむような遠い目をするのだ。寂しそうな、自嘲するような微笑を浮かべて。

これだけの情報があつて気付かない方がおかしい。

まあ、気にする必要はないのかもしれない。こいつは異世界の住人だ。この世界へ来た以上過去のしがらみなどどうでもいいことだろう。

そこまで考えて気が付いた。私はなぜこんなことを考えていたのだろうか？

「ディアナ？どうかしたのか？」

どうやら考え込んでしまっていたらしい。

「いや、なんでもない。それより、お前の使う魔術とはどういうものなんだ？」

そう尋ねると、腕を組み、天井を見上げた。

「うーん、そうだなあ。簡単にいえば自己暗示だな」

「ほう」

「自分の持つ魔力を練り上げて、指向性を持たせて打ち出す。その時に属性が生じる。上級魔術師になると相反する概念を無理やりね

じ込むなんてことが出来る奴もいる」

ふむ、なるほどな。道理で魔法に比べて詠唱が短いわけだ。魔術における詠唱は、自己改変の為のトリガー、といったところか。

「そう言えば、さっき詠唱がどのとか言ってたよな？」

「うむ。こちらの魔法はそちらの魔術とは根本的に違う。魔法は詠唱によって世界に呼び掛け、精霊の類の力を借りることによって神秘を成す。答えを自らの内に求めるか、世界に求めるか、という違いだな」

「なるほど、そうなると戦闘時には魔術の方が使い勝手は良さそうだな……」

「それだ！」

あの程度の詠唱であれだけの威力があるのなら、戦闘時、特に近接戦闘においては大きなアドバンテージになるではないか。

「統也っ、私に魔術を教えろ！」

テーブルに身を乗り出し詰め寄ると、統也は気まずそうに視線をそらした。

「あー、悪いんだが、それは無理だ」

「なぜだっ？」

「俺は、ほとんど魔術が使えない……」

は？

今こいつは何と言った？

魔術が使えない？

魔術師ではなかったのか？

「どういうことだ？」

低い声で脅すように言うと、統也は冷や汗をかきながらのけぞった。

「ど、どうやら、俺には魔術の素質が無いみたいでさ。使えるのは身体強化といくつかの攻勢魔術だけなんだ。は、はははは……」

顔を引き攣らせながら乾いた笑い声を上げる統也に、がつくりと肩を落とす。

「その、すまん……」

申し訳なさそうに謝られて、柄にもなく罪悪感に駆られた。
一息をついて心を落ち着かせる。

統也の方を見ると、私が呆れているとでも思っているのか、情けない顔で視線を床に落としていた。

「まあ、初めからあまりあてにしない。第一体系から違うのだ。
魔法に慣れている私に魔術が使えるとも思えん」

それに今のままでも私は強いからな。と付け加えると、統也は苦笑した。

「しかし、勿体無いな」

そう呟くと、統也は「何がだ？」と言わんばかりに首をかしげた。

「お前のその魔力だ。見たところ、並みの魔法師よりも遥かに強い魔力を持つているようだが、魔術が使えんとなると宝の持ち腐れもいいところだな」

そこでいいことを思いついた。

おそらく今の私は獲物を見つけた狼のような笑みを浮かべているに違いない。

統也のひきつった顔を見れば一目瞭然だ。

「よし、統也、お前に魔法を教えてやろう」

嫌がる統也を戒めの魔法で拘束し、地下室へと向かう。

誰かに魔法を教えるの初めてのことだ。

さて、まずは何かからいこうか……。

「さっき俺の魔力がどうかたってたけど、俺の魔力ってそんなに強いのか？」

ディアナに無理やり連れてこられた地下室。

何か準備するものでもあるのか、魔具やら魔術書らしき物が雑多に詰め込まれた棚を引っ掻き回しているディアナの背中に問いかける。

「うむ。そうだな、お前の世界ではどうだったか知らんが、こちらでは魔力の保有量でランクが付けられている」

ランクはSからEまでの六段階で表される。

「細かい説明は省くが、Aランク以上、つまり、魔力総量五千以上の者を上級魔法師と呼ぶ。その数は全魔法師の一割程度、この学園では私と健吾、それに爺くらいのものだな。それに対してお前の魔力は……」

棚から魔具らしき物を取り出したディアナは、振り返ってそれを俺に向けた。

しばらくしてピツと音がすると、ディアナはそれを覗き込む。

「……八千弱、といったところか。魔力保有量に限って言えば、お前は这个世界ではなかなかの力を持っているといえるな」

「ディアナの魔力はどれくらいなんだ？」

「私か？ 私は、そうだな……四万弱、位だろう。」

「よ、四万……」

「ふん、私は吸血鬼の真祖だぞ？ 人間と一緒にするな」

ディアナは用済みだと言わんばかりに魔具を放り捨て、別の物を引っ張り出した。

見ると、その中には中央に周囲を海に囲まれた宮殿のような物の模型が入っており、その上を半透明のドーム状の物が覆っている。ディアナそれを部屋の隅に置かれていたテーブルの上に置くと、手招きをした。

「こいつに手を置いて目を閉じる」

言われた通りにすると、ドームの上に置いた右手が引つ張られるような感覚を覚えた。

「力に逆らうな、身を委ねろ」

その言葉を信じて体から力を抜く。
すると、地下の停滞していたはずの空気が流れるのを感じた。

「もう眼を開けてもいいぞ」

どこか楽しげな、悪戯の成功を目前にして喜びを隠しきれない子供のような声に、何があっても驚かないと子供じみた決意をして目を開く。

「なっ」

抜けるような青い空、時代錯誤な巨大な宮殿、振り返れば広大な石畳の広場、その向こうには彼方まで続く海。

「どうだ？」

その声に隣を見ると、腕を組み、どうだとはかりに胸を張るディアナがいた。

「お、おい、ディアナ？ここは、どこだ？」

「一種の結界だ。あのアーティファクトを見ただろう？あの中だ」
なんて出鱈目。

「この中での一日が外の一時間に相当する。長い間使っていなかったから、若干不安はあったが、大丈夫そうだな」

ここにきて改めて魔術と魔法の違いを思い知った。魔術でこんな理不尽なことはできない。

「おい、いつまでそんな所にいるつもりだ？」

呆然と辺りを見回していると、ディアナの呆れたような声が聞こえた。

すでに宮殿の入り口付近にいるディアナに慌てて近づくと、ディアナはそう言えば、と口を開いた。

「統也、お前の戦闘スタイルはどんなものだ？」

「そうだな……さっきも言ったように使える魔術が少ないから、森でディアナと戦ったときみたいな形だな」

「つまり、魔法剣士タイプ、ということか……」

「魔法剣士タイプ？」

「ああ。魔法師は大きく二つのタイプに分類できる。それが魔法使いタイプと魔法剣士タイプだ。前者は従者に前衛を任せ、自身は後方で詠唱に専念する。それに対して、後者は自身も前線で戦いながら詠唱を行う」

「ああ、そういうことか」

確かに向こうでもそう言うのはあったな。

向こうじゃ、単純に前衛、後衛としか言わなかったけど。

「魔法剣士タイプということは、何か得物があるのか？それともあの時のように徒手空拳か？」

「向こうではずっと日本刀を使ってたな」

「日本刀、か……用意しておかなければならないか……」

「いや、たぶん必要ないと思うぞ？」

「どういうことだ？」

不思議そうに首をひねるディアナから少し距離をとる。

右手を左手首に添え、意識を集中する。

目を閉じてイメージするのは鰐のない、抜き身の刀。

「玉兎」

左手首にほのかな熱を感じ目を開く。

右手を握り込むと確かな感触。

そのまま右へ振りぬくと、鰐のない、白木造りの日本刀が握られていた。

「ほう」

感心したようなディアナの声を聞きながら軽く数回振ってみる。
違和感はない。

「かなり高度なアーティファクトだと思っていたが、そういうこと

か。ということは、右手首のものも同じか？」

ディアナの問いに首を横に振って答える。

「これはちよつと違うんだ」

右手首のリストバンドを左手で軽く握りながら空を見上げる。

「これは、俺の父さんの形見なんだ。顔も覚えてないけど、初めてこれをつけてくれたときのことは覚えてる」

視線を下してディアナを見ると、難しい顔をしてこちらを見ていた。どことなく気まずそうに佇むその姿に苦笑する。

「そんな顔するなつて。案外まだどつかで生きてるかもしれないし。それに……」

「それに？」

「……俺があの人の子供だってことは変わらないしさ」

じつと俺の顔を見ていたディアナは、ふんとばかりに顔をそらした。

「楽天的だな」

ちらちらとこちらを窺いながら憎まれ口を叩いても、こちらとしては苦笑するしかない。

「ああ、俺は楽天的なんだよ」

ディアナは付き合いきれん、と呟いて肩を落とした。

「まあいい。さっさと始めるぞ」

そう言い残して宮殿の中へと消えていくディアナの後を追う。
右手に提げた玉兎が幻想の陽光を浴びて輝いていた。

本当にこの男は出鱈目だ。

目の前で中級魔法、『魔弾の射手』を繰り返し撃ち出す統也を見ながら嘆息する。

攻性魔法としては初歩的なものだが、それでもわずか数分で使えるようになるとは思わなかった。

統也の魔法師としての素質は、一流の魔法師のそれを凌駕している。
ある程度予想していたとはいえ、とんでもない男を弟子にしたものだ。

「ケケケ、楽シソウジャネエカ、ゴ主人」

傍らに置かれた人形の言葉にはっとする。

どうやら、知らず笑みが浮かんでいたらしい。

「うるさいぞヴァル。……お前から見て、あいつはどうだ？」

「ナンダ御主人、珍シイジャネエカ。俺ノ意見ヲ訊クナンテヨ。デモマア、ソコヲノ雑魚トハ違ウンジャネエカ？」

ケケケ、と耳障りな笑い声を上げるヴァルを無視して改めて統也を見る。

「確かにな」

こうしている間にも統也の放つ魔弾の威力は上がってきているし、発動までのタイムラグもほぼ無くなっている。

このままの調子でいけば、防衛戦までにはそれなりの形になるだろう。

もともと、戦闘能力は高いのだ。今のままでも中の上程度の力はある。

『常闇の吸血姫』ダーク・ブリュンヒルドの名に懸けて、一流の魔法師にしてやろう。

「統也、その辺にしておけ。そろそろ休んだ方がいい」

「いや、まだいける」

「バカ者、それ以上やってもたいした意味など無い。時間の無駄だ」
それを聞いて不服そうな顔で戻ってくる。

こいつはこちらが黙っていれば、一日中もやっていたのだろう。
熱心なのはいいことだが、こいつの場合は行き過ぎているような気がする。

「ケケケ、ヤケニ熱心ジャネエカ、侍」

ヴァルが喋るのを聞いても別段驚いた様子はない。それどころか、興味深そうに観察している。

「ディアナ、お前、人形遣いだっただのか？」

「驚かんのだな」

「まあな、こんな出鱈目な空間があるくらいだ、もうちょっとやさつとのことじゃ驚かないさ」

「出鱈目ッテイウナラ、侍ノ方ダト思ウガナ」

「そうか？」

「ソウダゼ。マア、ヨロシクナ、侍」

「ああ、よろしくな。ところでディアナ、こいつの名前は？」

「ヴァルだ。それにしてもお前ら、軽すぎるだろう」

そうか？と首をひねる統也とヴァルにがつくりと肩を下す。

「もついい、好きにしろ」

顔を見合わせる一人と一体を置いて歩き出す。

後ろから聞こえる話し声に無性に腹が立って魔弾を打ち込んでやった。

突然の一撃に慌てるバカ者たちに、口元がほころぶ。

なぜだか知らないが気分がいい。それを、突然目の前に現れた不思議な異邦人のせいにして、歩を進めた。

第四話

こちらの世界へやってきた翌日（体感的には3日目だが）、学園長に会うために学園長室へとやってきた。

隣にはディアナ、そして頭上にはなぜかヴァルがいる。

ディアナの結界空間『楽園』^{アフアロン}内で会ったばかりだが、どうやら俺はヴァルに気に入られてしまったらしい。

ディアナ曰く「こいつが人間を気に入るのは初めて」らしい。素直に喜べないのが正直なところなのだ。

「爺、入るぞ」

昨日と同様、尊大な態度で扉を押しあけたディアナに続いて扉をくぐる。

「おお、待っておったぞ。では早速始めようかの」

学園長は俺たちに気がつくと数枚の書類を持って応接用のテーブルへと移動する。

その途中、俺の頭上にいるヴァルに気付き声をかけた。

「おや、珍しい物がついてきたのう。元気にしておったか？」

「ウルセーゾ、爺。サツサトシヤガレ」

「残念じゃのう、久しぶりに一献どうかと思っただんじゃが」

「日本酒力？」

「もちろんじゃとも。わしの秘蔵の酒じゃ」

「ケケケ、話ガ分カルジャネエカ」

その会話にディアナは「だから連れてきたくなかったんだ」と肩を落とす。

「おい、爺。さっさとしろ」

ディアナの言葉に学園長は、仕方がないのう、と呟いてソファに腰を下ろす。

その正面に座ると、書類が差し込まれた。

必要事項は記入済みとなっていてあとは署名するだけの状態だったが、一応すべての書類に目を通す。問題がないことを確認してから署名すると、学園長は満足げに頷き、数枚のカードを取り出した。

「これは？」

「身分証明書とクレジットカード、その他もろもろ必要になるものじゃ。とりあえず口座には百万ほど入れてある。必要なものはそれでそろえて置いとくれ」

「ずいぶん羽振りがいいじゃないか」

「何、統也君に逃げられるのは敵わんしのう。そうならんためにも誠意を見せておくべきじゃろうて」

ほっほっほっ、と笑う学園長に苦笑する。

「では、ありがたく頂いておきます」

「よろしい。しかし、君は不思議じゃな」

「なにがです？」

「まだ若いというのに、四百年以上を生きる大吸血鬼『常闇の吸血姫』に対して動じることなく、動きの一つ一つに隙がない。差し支えなければ話を聞かせてくれんかのう？」

「爺っ、何を言っつて、……と、統也？」

学園長に食って掛かるディアナを押しとどめ、困惑気味に俺を見るディアナの目を見つめる。

「いいんだ。流石に何も話さないわけにはいかないからな」

それに、と続けると、ディアナは不思議そうに首をかしげた。

「ディアナには知っておいてもらいたい」

そう言って笑うと、ディアナは頬を染めてそっぽを向いた。
ディアナの反応に首をひねっていると頭上にいたヴァルが騒ぎ始めた。

「ケケケケケ。オイ、御主人、ナニ照レテイヤガランダ」

「う、うるさいっ」

ディアナはヴァルを掴むと一切の容赦なく、その小さな体を床に叩き付けた。

「イテ ジャネエカ」

「おい統也っ、こんな奴は放っておいて、さっさと始めるぞっ」

抗議の声を上げるヴアルを無視して詰め寄るディアナに「分かった、分かった」と言つて、目を閉じる。

俺の中にある最古の記憶を引っ張り出す。

一度は記憶の奥底に封じ込めた、忌まわしき日々。そのすべてを一切合財、嘘偽りなく曝け出すために。

最初の記憶は、とても温かなものだった。

母さんはいなかったし、父さんの顔を思い出すことも出来ないけれど、それでも『家族』の温かみを感じることができた。

俺にとって父さんは英雄^{ヒーロー}だった。

強くて、優しく、たまに怒るととても怖かったけど、それでも俺を叱る言葉の端々に愛情を感じることができた。

そんな平穏な生活の終わりは唐突にやってきた。

俺が四歳になったばかりの冬の夜、俺たちの住んでいた家に、漆黒のローブをまとった男たちが突入してきたのだ。

父さんは呆然とする俺を抱えて家を飛び出した。

走って、走って、走り続けて、追っ手を振り切った時には父さんはボロボロになっていた。

森の中に逃げ込み追手がいないかあたりを見回した後、父さんとはころどころ破れたコートのポケットから革製の腕輪を取り出すと、それを俺の右手首にあてがい何かを呟いた。

すると腕輪は俺の手首に巻きつき、外れなくなった。

「統也、これを外してはいけないよ？これが君を守ってくれる。も

う少ししたら父さんの友達が来るから、それまでここでじっとしていなさい」

父さんはそう言い残して、来た道を引き返して行った。

俺は父さんの言いつけを守ってその場でずっと隠れていた。

暗くて、寒くて、すごく怖かった。たまに風が吹いて周りに生えていた木の葉っぱがざわめくと、悲鳴を上げてしまいそうになるのを必死に押し殺して。

どのくらいそうしていたのか分からないけど、不意に見上げた空に、いつも父さんのそばにいた使い魔の鳥が飛ぶのが見えた。

そのすぐ後に一人の男の人が来て、「もう大丈夫」と言ってくれた。俺は声を上げて泣いた。

なぜか分からないけど、もう父さんに逢えない気がした。

その人は父さんの友達で、父さんの使い魔に導かれて来てくれたらしい。

それが俺と師匠の出会いだった。

それから俺は師匠の下で魔術を学ぶようになった。

師匠は最初、それに反対した。理由は俺には素質が全くと言っていいほどなかったから。

それでも俺は師匠に頼み込んで、ようやく師匠も納得してくれた。

幸い魔力は十分にあったから、身体強化の魔術さえ覚えてしまえば何とかなった。

自分の体を強化し、接近戦で戦う今のスタイルはこのころには確立していた。

師匠のついで、格闘技や剣術を習い、初めて魔術師としての仕事に出たのは一四の時。すべての始まりから十年の月日が経っていた。

初仕事は師匠についての吸血鬼退治。ある山間の寒村が一体の吸血鬼によって死都になった、ということだった。

俺はこの日のために師匠からもらった日本刀を携え、師匠の後を追

って目的の村へとたどり着いた。

そこにいたのは、もとは村人だったであろう大勢の亡者。師匠と二人でそれらを薙ぎ払いながら進んで行った先で、まだ血を吸われていない双子の少女を見つけた。

師匠の制止を振り切って彼女たちを救おうとした俺は、多数の亡者に囲まれ孤立してしまった。俺は二人を背後にかばい、剣を振るった。

必死だった。生きるために、何より背後で震えている二人を守るために。ただがむしゃらに迫りくる亡者の群れを斬り伏せた。

何度も亡者の攻撃を食らい、それでも戦い続けていた俺は体力も集中力も限界だった。

気付いた時には双子の片方の首に、討ち漏らした亡者が噛み付いていた。

首に噛み付いた亡者を斬り伏せた時には、すでに手遅れだった。

理性の光の殆ど消えた少女は、ふらふらと立ちあがって俺に近付いてきた。

「コロシ…テ……。ハヤ…ク。この子を…殺して…しま…う前に…」

わずかに残った理性でそういう彼女を、俺は斬った。俺はその時初めて、人を、殺した。

俺の意識はそこで途切れた。

次に目を覚ましたのは翌日の夜。傍らには一人の少女がいた。

俺の眠っていたベッド傍に椅子を置き、そこに座ってベッドの上に突っ伏して眠っている少女は、あの村で出会った少女だった。

彼女が生きていたことに安堵して、すぐに自分が彼女の姉か妹を斬ったことを思い出した。

彼女は何のためにここにいるのだろうか。俺を責めるため？それと

も姉妹の仇を討つため？そんなことを考えていると少女が目覚ました。

俺の顔をボーッと見る彼女の澄んだ紺碧の瞳を見返すことができず、俺は目を逸らした。

直後、胸に軽い衝撃を感じた。見ると柔らかな金髪。

「ミリアはっ、笑って、いましたっ。とてもっ、穏やかにつ。……つく。だ、だからっ、貴方もっ、笑ってっ、笑ってくださいっ。あなたが、苦しんでいたらっ、ミリアは、悲しみますっ。……つく。だからっ」

俺の胸に顔を押し付けて、声を押し殺して泣く少女に救われた。

「君、名前は？」

「……アリア」

顔を上げて答えた少女は目を赤く腫らしながらも、しっかりと口調だった。

「アリア、君は、俺が守る。」

その日から、俺と師匠の二人きりの生活に、アリアという新たな家族が加わった。

俺はより一層魔術、体術の訓練に力を注いだ。守ると決めた命が二度と、この手から零れ落ちることが無いように。

それからは多くの仕事をこなし、大きな仕事も単独でいくつかこなした。

かなり無茶もしたし、死にかけたことは一度や二度じゃない。それでも、わずかでも救える命がある限り、俺は戦い続けた。

救った命に感謝されることは稀だった。多くの場合、化け物と罵られ迫害された。

ともに戦った魔術師に裏切られて死にかけたことも、数えきれない程あった。

それでもよかった。それは、守れた命があったということだから。笑っていたから。家族や友人、恋人の生存を喜ぶ人たちがいたから。

魔術師鷹司統也の名もそれなりに有名になり、同業者から『銀閃』の二つ名で呼ばれるようになったころ、俺の下にある依頼が舞い込んできた。俺が十九の頃だ。

内容はある魔術師の捕縛。数名の魔術師を制圧し、^{ターゲット}標的を確保する。難易度としてはそれほど高くはないものだった。

^{ターゲット}標的が拠点としている一軒家に侵入し、邪魔者を死なない程度に痛めつけ、最深部へと向かう。そしてそこにいたのは、漆黒のローブをまとった男。その手に握られていたのは、父さんがいつも持ち歩いていた白木造りの一振りの日本刀。

ああ、そうか……。こいつが、父さんを……。したのか。

気付くとすべてが終わっていた。

足元には虫の息の^{ターゲット}標的。

依頼主に連絡を入れ、落ちていた抜き身の刀を拾ってその場を後にした。

家に着くと、俺の姿を見たアリアが師匠を呼び、師匠は俺の持っていた日本刀を見て息をのんだ。

そのあと師匠から、父さんを襲った連中のことを聞かされた。

父さんが教会に狙われていたこと。あの日俺たちを襲ったのは、教会の実働部隊だったこと。父さんの子供である俺も同様に狙われていたこと。

そして、今回の一件で、連中に俺の正体がばれたかもしれないということ。

その日からの師匠の行動は早かった。

父さんと共同で行っていたという研究の成果を組み合わせ、ある術式を作り出した。
それが世界の枠を越えるという、前代未聞の大魔術だった。

第五話

「そして俺は、この世界にやってきた」

そう言って目を開き、懐かしむような笑みを浮かべる統也に声をかけることが出来なかった。

こう言っただが、この世界にかかわる以上、そういうことがあっても何ら不思議はない。

それでもこの男は異質だった。それほどの経験をしていながら、後悔することも、自責の念に囚われることもなく、笑ってなんでもないことのように言う。

「なるほどの、そういうことじゃったのか」

爺の言葉に、意識を思考の海から引き揚げると、統也が照れくさそうに頬を掻いていた。

「まあ、それほど珍しい話じゃありませんけどね」

「そういうでない、確かによくある話じゃが、かといって皆が皆そんな経験をしているわけでもあるまいて」

爺と話す統也の顔を見ると、それに気付いた統也が声をかけてきた。

「ディアナ、どうかしたのか？」

「ふん、なんでもない。ほら、さっさと行くぞ。昨日の続きだ」

「あ、おい、待てよ」

立ち上がり歩きだした私に慌ててついて来る統也を見ながら嘆息する。

どうやら、この男は相当歪んでいるらしい。それとも、ただの変人か。

隣を歩く統也を見上げる。

銜え煙草でヴァルとじゃれているその姿からは、なにも窺い知ることとはできない。

視線を前に戻すと、見慣れた一軒家が見えてきた。どうやら、いつの間にか家のすぐ近くまで来ていたらしい。

玄関を開け中に入り、リビングのソファの上に身を投げ出す。

ヴァルを頭の上から降ろし、てきぱきと紅茶の準備をする統也を眺める。

「オイ、御主人。コノ後ハドウスルツモリダ？」

「適当に魔法書でも与えてやれば、あとは自分で何とかするんじゃないか？」

「ナンダ、エラク投ゲ遣リジャネエカ」

怪訝そうに聞いて来るヴァルを無視して、統也を呼ぶ。

「どうした？」

「私はやることがある。修業は自分でやれ、地下室にある魔法書を好きに使っていいぞ」

「そうか、分かった」

ありがとな、と言って地下へ降りていく統也を見送って、統也の入れた紅茶を口に含む。
美味い。

こんなに美味しい紅茶を飲んだのは何年振りだろうか。

思い返してみれば、最後に誰かと一緒に暮らしたのはもう二十年近くも前のことになる。

そう言えば、あの男はどうしているだろうか。

どこからともなくふらりと現れ、この私を完膚無きまでに叩きのめした若輩者の吸血鬼。

たかだか百年ほどしか生きていないにもかかわらず、私のことをガキと呼んだ銀髪灼眼の無礼者。

そう言えば、あの男はどこか統也に似ているような気がする。

髪の色も目の色も、世界さえも違うというのに、愚かなまでに楽天的で、そのくせ瞳に強い意志の光を宿しているところなどそっくりではないか。

「何ニヤニヤシテンダ、御主人。氣持ちワリイゾ」

無意識に口元が綻んでいたらしい。統也が来てからこういうことが多すぎる。

時計を見ると、統也が地下へ行ってからすでに一時間近くが経過していた。

「ヴァル、統也はどうした？」

「知ラネエゾ？マダ戻ツテネエミテエダナ。張り切り過ぎテ、ブツ倒レテンジャネエカ？」

「なんだと？」

ケケケ、と笑うヴァルを無視してソファから立ち上がり、地下室へと走る。

『楽園』内に入ると、広場の中心付近で倒れている統也を見つけた。駆け寄って様子を見ると、苦悶の表情で荒い息をついている。明らかに魔力の使い過ぎだ。

統也の魔力はおよそ八千。中級魔法程度ならば、よほど乱発しない限りそう簡単に尽きるものではない。

いったいどれほど無茶をしたというのか。

「バカ者がっ」

魔力で体を強化して統也の体を担ぎあげると、体温が尋常ではなかった。

熱すぎる。

ゲートを通って『楽園』から出る。そのままリビングまで駆け上がり統也の体をソファへと横たえた。

「オイ御主人、ドウシタンダ？」

「うるさいっ」

魔力は魔法師にとって生命力と同義であり、魔力が尽きた者に魔力を供給してやらなければ死ぬことになる。

魔力を供給するには、魔力を多く含む血液を飲ませるか、ラインを繋ぐしかない。

後者を行うには圧倒的に時間が足りない。かといって、吸血鬼である自分の血を飲ませれば、統也が吸血鬼化してしまう。どうすればいい。

何が四百年を生きる大吸血鬼だ、何が『ダイク・ブリュンヒルド常闇の吸血姫』だ。弟子の

一人も救えずに、何を自惚れていたんだ私はっ。

「御主人。オイ、御主人、聞イテンノカ？」

「黙れヴァルっ。うるさいと言っているだろう！」

「落ちツケヨ御主人。ラシクネエゾ」

「っ……。そうだな……」

確かに少々取り乱し過ぎたか。

統也を見ると、幾分落ち着きを取り戻していた。魔力の回復が早すぎる気はしたが、とりあえず危険は去ったようだ。まだ息は荒いものの、表情が和らいでいるから心配はいらないだろう。

とはいえ、このままにしておくわけにもいかない。大量の発汗に、シャツが濡れて肌に張り付いている。このままでは風邪をひくことになるだろう。

体をふいて服を着替えさせようとシャツのボタンをはずして絶句した。

はだけたシャツの下から覗く引き締まった身体。

そこに残る無数の傷。

縦横に走る刀疵。いたるところに見える銃創。引き攣れている火傷の痕。何かに貫かれたような刺傷。

傷のないところを探す方が難しい位に刻まれ、一つの傷の上にも一つ一つの別の傷が重なっているようなところがいくつもある。

袖を捲くしてみると、手首より上は上半身と同じようになっている。足の方も同様だろう。

背後から攻撃されたのか、完全に貫通している傷跡もあった。

顔や手首から下には傷が見当たらないことから、傷を消す術はあっ

たのだろう。特に顔の傷は人込みの中でも目立つ。それはつまり、敵対する者に素性を知られる恐れがあるということだ。ということは、服の下に隠された傷跡は、統也があえて消さなかったものなのだろう。

「そういつ、ことが……」

同時に頭に直接流れ込んでくる映像。

目の前で失われる命。すべてが終わった後、自らの無力を嘆き絶叫する統也。

裏切り、背後から凶刃を振り下ろす背中を預けた仲間。自嘲の笑みでそれを受け入れる統也。

理解出来ない力を恐れ、化け物と罵倒する者たち。それを甘んじて受け入れる統也。

そのたびに体に、心に傷を負いながら、笑ってそれを受け入れて。弱音を吐くことも、誰かを恨むことさえなく。ただ、誰かのためにこれは刻印なのだ。統也が傷つけ奪った命を、統也が守り切れなかった命を背負い、自身を戒めるための。

同時に、守ると決めた命を、全てを賭けて守り抜くという誓いでもあるのだろう。

だからあの時、過去を語った統也は笑みを浮かべたのだ。

世界を越えてなお、統也はすべてを背負って生きることをやめない。すべてを背負って、その上でさらに戦い続けるつもりなのだ。

だからこそ、魔力が尽きるほど修行に明け暮れたのだろう。

「まったく、お前は太バカ者だ」

本当に救いようがない。

誰かを守るために戦い、そのために全身に数えきれない傷を負い。助けた相手に迫害され、背中を預けた仲間に貫かれ。

それでも誰かのために、決して砕けることなく。
自分のことなど顧みず。

まるで子供がそのまま大きくなったかのように、どこまでも純粹で。
これ以上無く歪んでいながら、誰よりも真っ直ぐで。
そんな矛盾を抱えながら、ただ前だけを見据えて戦い続ける。

「本当に、大バカだ」

呼吸も落ち着き、穏やかな寝息を立てる統也の髪を梳く。

時間を確認しようとして視線を巡らすと、無言のままこちらを見つめる
ヴァルと目が合った。

「ヴァル？」

「御主人、ソナ顔モ出来タンダナ……」

「なんのことだ？」

「イヤ、ナンテーカ、ガキヲ寝カシツケル母親ミテーナ」

「なっ」

ヴァルの言葉に顔が熱くなるのを感じる。

「バ、バカ者！」

「ケケケケケ、イイモノ見セテモラッタゼ。侍二八感謝シネエトナ」

「だまれっ」

愉快そうに笑うヴァルに制裁を加えようと、その小さな体軀を掴みあげ振り被る。

そのまま床に叩き付けようとしたところで、小さなうめき声が聞こえた。

「ん、んん？……何やってんだ、お前ら」

「気が付いたか？」

手の中でもがくヴァルを放り投げ、ソファから身を起こした統也に近づく。

「ああ。……あれ、俺、なんでここに？」

「魔力切れでぶっ倒れたんだ。覚えてないのか？」

腕を組み、記憶を辿っているのだろう、ぶつぶつと呟いていたが、あ、と声を上げた。

「そうか、気絶したのか。ディアナが運んでくれたのか？」

「ああ、いつまでたっても戻ってこないから様子を見に行ってみれば、広場のど真ん中で伸びているじゃないか。分かっているのか？かなり危険な状態だったんだぞ？」

「あ、ああ、悪い、無茶しすぎたかもしれない。……ん？」

そう言って頭を下げたところで、着ている服が変わっているのに気付いたのか、視線で説明を求めてくる。

「かなり汗もかいていたし、そのままにしておくわけにはいかないだろう?」

「見たのか?」

あの傷跡のことか。

軽く頷くと、そうか、と呟いて黙り込む。

「まったく、お前は大バカ者だな。他人のためにあれほどの傷を負って、いつまでもそれを刻みつけたままにして。それでお前が死んだらどうするつもりだ? 本当にバカだ、大バカだ」

「そうかもしれないな」

その顔に浮かぶのは笑み。しかし、すぐにそれは穏やかなものへと変わった。

「それでも、笑ってた人が、喜んでた人が居たんだ。だから、きつと間違いじゃなかったんだって、そう信じてる。確かに納得できないこともあったけど、過去を否定することは俺に託された想いも、今の自分も否定することになるからさ。今を精一杯生きることが、死んでいった人の供養になるのなら、俺は笑って生きるだけだ」

だからそう簡単に死ぬ気もないさ、と笑うその姿に、頬が熱くなるのを感じた。

この顔は反則だ。そんな顔をされては、その歪な生き方を否定することなどできないではないか。

どうも統也が来てからペースを乱されっぱなしだ。

「それにしても……、そうか、知られちゃったか……。このことを

知ってたのは師匠とアリアだけだったんだけどな。ん？………ということとは、つまり………」

何を考えているのか、難しい顔で黙り込んだ統也は、しばらくして顔を上げると、こちらの予想の斜め上を行く言葉を口にした。

「うん、そうだな。ディアナ、お前は今日から俺の家族だ」

こいつは今何と言った？
家族、家族と言ったのか？

「ヴァルも見てたのか？」

「アア、ソウダゼ」

「じゃあ、お前も家族だな。改めてよろしくな、ディアナ、ヴァル」

勝手に話を進めていく一人と一体に何か言ってやろうと思うのだが、思考が混乱して言葉が出ない。

家族だとなぜそういう話になるもちろん嬉しくないわけではないが違うそうじゃない私は何を言っているんだ家族か楽しそうだなだからそうではないしっかりしろ私。

何か言おうと焦れば焦るほど思考が混乱し、それによってさらに焦ることになる。

何一つ言葉を発することも出来ず、顔に血が集まってくるのを感じていると、ヴァルと話していた統也がこちらを向いた。

「そついえばまだ言っていなかったな。………ありがとう。」

だからそれは反則だと言っているだろう。

微笑みながらそう言われて、私の思考は完全に停止した。

「あ、おい、ディアナ」

ふらふらと倒れこんできたディアナを支えながら問いかけるが反応はない。

顔が赤いが、風邪でもひいたのだろうか？

いや、吸血鬼が風邪をひくなどということがあるのだろうか。少なくとも俺は、そんな話を聞いたことがない。

「なあ、ヴァル。こっちの吸血鬼って風邪とかひくのか？」

ヴァルに説明を求めるが、ヴァルはやれやれとばかりに首を振っている。

「ソナワケネエダロ。侍、お前鈍イッテ言ワレタコトネエカ？」

む、なぜこいつがそんなことを知っているんだ？

「御主人モ苦勞スナ」

何のことは分からないが、とりあえずディアナは風邪ではないようだ。しばらく休めば起きるだろう。

時計を見ると、すでに午後6時を回っていた。今から準備すればちよつといい頃だろう。

ディアナにはいろいろ迷惑かけたみたいだから、今日はディアナの好きなものでも作るとするか。

「ヴァル、ディアナの好きな物って何だ？」

ヴァルは呆気にとられたように口をあけたまま静止していたが、やがて。いつも通りケケケ、と笑った。

「御主人ノ好きナモノカ？ ソンナモン、血ニ決マツテンダロ」

「いや、そうじゃなくて……」

「分カッテルツテノ。御主人ノ好きナモノハ美味イモノダ。アトハ自分デ考エナ」

ヴァルから聞き出すのはあきらめ、一番自信のある『ビーフストロガノフ』を作ることにする。
指定席だといわんばかりに俺の頭に乗ったヴァルとともにキッチンへ移動し、下ごしらえを始める。

「オイ、侍」

いつもとは違い、真剣なヴァルの言葉に手を止める。

「才前ニトツテ『家族』ツテノハ、ナンダ？」

「俺の居場所であり、何に代えても守り切るものだ」

「ソノ結果、才前ガ死ヌコトニナツテモカ？」

「……家族と自分、そのどちらかしか生きられないというのなら」

ヴァルが何を思っこの問いを投げかけたのか。それはわからない。それでも、ヴァルが俺に何を望んでいるのかはわかる。
それは俺と同じ想いだから。

「もちろん、そんな状況は作らせないし、仮にそうなくても簡単に諦めるつもりはない。みつともなく這いつくばってでも、みんなで生き延びる道を探さ。残される怖さ、一人の寂しさはよく分かっているから……。だから、ディアナが望む限りそばにいる。あいつを一人にはしないさ。」

頭上からさかさまに俺の顔を覗き込んでいたヴァルは、ケケケ、といつもの愉快そうな笑い声をあげて、俺の頭をぽかぽかと叩いた。

「カッコイイコト言ウジャネエカ、トーヤ。ソノ台詞、御主人ノ前デ言ッテヤレヨ」

「なんだよそれ」

言って、気付いた。

知り合って初めて、ヴァルが俺の名前を呼んだことに。

「ようやく認めてもらえたってことかな……」

「ナニカ言ツタカ、侍？」

どうやら、まだまだ認めてはもらえないらしい。

ヴァルがどれほどの間ディアナと共にいたのか、それを知るすべはない。本人に聞けばわかるのだろうが、おそらく教えてはもらえないだろう。今までにディアナの過去の話はほとんど聞いていないのだから。

どちらにせよ、俺などより遙かに長い年月を共にしているはずだ。当然、ディアナの過去もそれなりによく知っている、もしくは関わっているだろう。

今日の昼間ディアナたちに話した俺の過去もかなり省略しているが、すべてを話したところでディアナのそれには遠く及ばないだろう。もちろんディアナに同情するつもりなど無い。ディアナ本人もそんなことは望まないだろう。

いずれ話す時が来るのかもしれないが、少なくともその時が来るまでは話すつもりはないし、ディアナもそう考えているはずだ。

少し寂しい気もするが、話したくないことを無理やり聞き出すなどという無粋な真似はしたくない。ディアナは家族なのだ。

故に俺のすることはただ一つ。

ディアナを守り、何があっても共に生きる。いずれ時が来たときにディアナのすべてを受け入れる。

それが、多くの人を傷つけ、その血に塗れた俺に出来る唯一のことだから。

第六話

食欲をそそる香りに目が覚めた。

上体を起こし辺りを見回すと、見慣れたリビングの風景が広がっていた。自分はソファで眠っていたらしい。

何があつたのか思い出そうとして赤面した。

『楽園』で倒れていた統也をここまで連れてきて、その汗にまみれた身体を拭いてやろうとしてその身に刻まれた痛々しい傷跡を目の当たりにした。

そして統也の信念を、戦う理由を聞き、不覚にもその穏やかな笑顔に見惚れてしまった。

これだけでも相当恥ずかしいというのに、問題はその後だ。

こともあるうちに、統也は傷跡を見た私たちを『家族』だと言ったのだ。

その一言にパニックを起こし、続くありがとうという言葉に完全にやられた。KOだ。ノックアウトだ。あの笑顔を思い出すだけで、どんどん顔が熱くなっていく。出来ることなら今すぐに大声を上げてのたうち回りたい衝動に駆られる。

吸血鬼の真祖ともあろう自分が、なんという体たらくだ。

自己嫌悪に打ちひしがれていると、その原因である居候がキッチンから顔を覗かせた。

「あ、起きたか？」

自分のしでかしたことの重大さを全く認識していないその態度に、ふつつつと怒りがこみ上げてくる。

「そろそろ夕飯が出来るから、もうちょっと待っててくれ」

そう言つてその姿をキッチンへと消した統也が去り際に浮かべた微笑に、鼓動が速くなるのを感じた。

まずい。これはまずい。非常にまずい。

この感情の名は知っている。それに浮かれる者たちを嘲笑つたものだ。

しかし、まさか自分が経験することになるとは思つてもみなかった。共に感じる、正体の分からない漠然とした不安。

吸血鬼として覚醒して以来多くの時間を一人で過ごしていた。

むろん、しばらく行動を共にした者もいたが、その誰もが自分を置いて去つて行つた。

初めのころは寂しいと感じたこともあったが、いつしかそんな感情は消え去り、一人でいることが普通なのだと、自分はそういう存在なのだと思うようになった。

この学園で広域監査員として働くようになり、今までとは比べ物にならないほどの繋がりを得ても、一人で生きていくのだという考えが変わることはなかった。

それがどうだ。たった一人の『異邦人』^{イレギュラー}の出現で、今まで信じて疑わなかった物がいとも容易く打ち砕かれてしまった。

鷹司統也という男は、まるでずっと昔からそうであったように、自分の生活の一部となつてしまったのだ。

自分で自分が分からない。

もしも統也が目の前から消えてしまったら、私を置いて行つてしまつたら、自分はどうなるのだろうか。

ああ、そうだったのか。

そこまで考えて、ようやく自分が感じている漠然とした不安の正体が掴めた。

恐怖。今の自分は、統也が消えてしまうことを恐れているのだ。

私が吸血鬼だと知つても態度を変えることなく、むしろ、より馴れ馴れしく接してきたあの男が、いつか私を置いて行ってしまうのではないか、と。それどころか、今さっき自分が見たのはただの幻覚

で、そんな男は初めから居なかったのではないか、ただの夢だったのではないかと。

気付けば震えていた。ただただ、統也がいなくなってしまうのが怖かった。一人になるのが恐かった。

いくら自分に言い聞かせても震えは一向に収まらない。

いつそ自分の物にしてしまえ

もう一人の自分の囁きを全力で否定する。

それだけは出来ない。吸血鬼の真祖『ダーク・ブリュンヒルド常闇の吸血鬼』として、何より統也が家族だと言ってくれたのだ。それを裏切るような真似は出来ない。

どうせあいつもお前を捨てるのだ

そんなことはない。あいつは私を捨てたりしない。

なぜそう言い切れる？あいつはお前とは違う。あいつもいつかお前を恐れ、蔑み、去っていくに決まっている

もうやめろっ、やめてくれっ。

お前が受け入れられることなどあり得ない。お前は吸血鬼、化け物なのだから

脳裏に浮かぶ光景。

家族が、友人が、旅の途中で出会った者たちが叫ぶ。

「ば、化け物っ」

一人にはしない。絶対にだ」

その言葉を聞いた途端、どれだけ抑えようとしても決して収まらなかった体の震えが、嘘のように収まった。

泣いた子供をあやすように背中を撫でる統也の手の暖かさにひどく安心する。

先程まで頭の中に響いていたもう一人の自分の声も、今はもう聞こえない。

そして確信した。私はヴァルを従えて、一人で生きていくことなど出来ない。そんな必要はないのだと。

未来は誰にも分からない。それでも、統也の言ったことなら信じられる、そう思えた。

「落ち着いたか？」

統也の声に、その胸に顔を埋めたまま頷く。

それを聞いても、統也は私を引き剥がすことはなかった。私の気が済むまでこうしていてくれるのだろう。

このままずっとこうしていて困らせてやろうか、とも思ったが流石にそれはやめておく。

体を離すと、視界に広がったのは統也の優しい笑み。

「もうすぐ準備できるから。顔、洗つとけよ？」

いたずらっぽく笑いながら軽い調子で言う統也を睨みつけると、朗らかに笑いながら立ち上がる。

「お前のことを受け入れないような奴は放つときや良いんだよ。そんな奴らは相手にするだけ無駄だ。少なくとも、俺やヴァル、学園長はお前の味方だ」

去り際、私の頭を乱暴に撫でながらもないように言うと、キツチンへ消えていった。

照れ隠しか、足早に去る統也を可笑しく思ったが、それ以上にありがたかった。

統也に出会ってからたった二日。

それでも、統也は私にとってとても大きな存在になっていた。だから。

たとえ何があるうと傍にいてやろう。見ず知らずの誰かの為に戦い、そして傷ついた統也が幸せになれないなど、そんなことはあつてはならないのだから。

もっとも、統也は自分を不幸だなんて思っていないのだろうが。

夕食を済ませた俺たちは『楽園』内に来ていた。

ことの発端は、夕食の席でディアナの発した言葉だった。曰く、「お前に一人でやらせていてはどんな無茶をするか分かったものじゃない。これからは私の監視の下で鍛錬をしる。もし一人でやつたりしたら……分かっていだろうな？」ということだ。

無茶をして心配をかけた、という自覚がある以上逆らうことなど出来るはずもなく、ディアナの提案を素直に受け入れた。決して、そういったディアナの浮かべた笑みに恐怖を感じたからではない。あくまで自分の意志だ、……そのはずだ。

今、俺の目の前にはディアナとヴァルがいる。魔法使用なしの模擬戦らしい。

俺は大丈夫だと言ったのだが、つい数時間前に魔力切れになった奴の言うことなど信用出来ないとぼさり切り捨てられ、魔法の講義は無しになったのだ。

ディアナは魔法使いタイプらしいのだが、こうやって向かい合ってみると魔法など無くてモかなりの実力の持ち主だということが分か

る。

ヴァルもかなり手強そうだ。ディアナの従者である以上、魔法なしの近接戦闘ではディアナ以上かもしれない。

どちらにせよ、気を抜けば一瞬で終わってしまうだろう。もちろん負けるのは俺だ。

それでも簡単に負けてやるつもりなど無い。やりようによっては十分勝機もあるのだから。

「統也、準備はいいか？」

不敵に笑うディアナに軽く頷くことで答え、全身から不要な力を抜き自然体で構える。

ディアナが上空に発生させた氷の塊が、重力に引かれて自由落下を開始する。それが地面に到達した刹那、ヴァルが突っ込んできた。

自身の身の丈をはるかに上回る大型のナイフを左右に一本ずつ持ち、軽々と振り回す姿はまさに暴風。下手に近付けばたちどころに切り刻まれ、物言わぬ肉塊と化すだろう。

予想より数段速いその動きに虚を衝かれるが、それも一瞬。あちらが速いのなら、それ以上の速さで迎え撃てばいい。

息つく暇もない連撃を捌きながらディアナの位置を確認すると、初めの位置から一步も動いていない。手を出すつもりはないのだろう、実質的な一対一だ。これでヴァルに専念できる。

左からの袈裟切りを左前方に踏み込むことでやり過ぎし、裏拳の要領で繰り出される横薙ぎを身を沈めることでかわす。再び右手のナイフが迫るより早く、左の掌底がヴァルを弾き飛ばしていた。

器用に空中で回転して足から着地したヴァルが楽しそうにケケケ、と笑う。

「ナカナカヤルジャネエカ」

「褒めたって何も出ないぞ？」

再び突っ込んで来るヴァルの上段からの一線を半身になってかわし、続く刺突を仰け反ってやり過ごす。伸びきった腕を掴み、そのまま地面に引き倒す。呼び出した玉兎の切っ先を突き付けたところで、ヴァルが口を開いた。

「ドウヤラ、俺ノ負ケミテエダナ」

「そうだな。……ところで統也、なぜ獲物を最後まで使わなかった？」

玉兎を消し、ヴァルを頭の上に乗せた俺にディアナが言う。

「なぜ、って言われてもなあ……。単にやりづらかったただけだ。玉兎を持ったまま、ヴァルの攻撃を防ぎきる自信はないからな」

「なるほどな。しかし、それだけでもないだろう？」

正直に話せとばかりに半眼で睨むディアナに、肩をすくめて答える。

「別に嘘を吐いてるわけじゃない。ヴァルの間合いじゃ、長刀なんてまともに使えないからな。まあ、もう一つ理由を挙げるとすれば、下手に玉兎を使うと、ヴァルをぶった斬っちまうかもしれないからさ」

模造刀でもあればいいんだけど、と言って苦笑する。

玉兎を持って対峙した相手は、一切の容赦なく切り捨てる。俺にとつての玉兎はそういうものだ。故に玉兎を修練に使う気にはなれない。

「つまり、模造刀を用意しろ、というわけか」

「いや、別にそこまでしてもらわなくても……」

「今日はこれで終わりだ。統也、近いうちに模造刀を手配しておく。それまでは組み手はなしだ。……分かったな？」

「……分かりました」

決してディアナに気圧されたわけではないが、素直に従っておく。本当だぞ？ 師匠の言うことは素直に聞くべきだからだぞ？

第七話

「来たれ雷の精。神速の矢となりて敵を討て。魔弾の射手、散弾、雷の二十三柱」

放たれた二十三条の雷が同数の異形を貫き、眩い閃光と共に無に帰す。

巻き上がる粉塵を目くらましにして、いまだ残る数体の異形に接近。最も近くにいた一体を袈裟に斬り伏せ、別の一体が振り下ろした剛腕を身を捻ってかわす。

手当たり次第に異形を斬り裂く。袈裟掛けに叩き斬り、横に薙ぎ、上段から打ち下ろす。背後の異形を振り向きざまに両断し、左から迫る一体に掌底を叩きこむ。

「火龍掌」

発勁の要領で吹き飛ばしつつ、至近距離で炎弾を撃ち込む。

燃え上がる異形を尻目にその場で跳躍。袈裟に振り下ろされた拳をかわし、最後の一体を脳天から股下まで一直線に切り裂いた。

「ふう、これでラスト、かな？」

玉兎を消しながら呟く。

あたりを見回しても、さっきまで闘っていた異形の姿はどこにもない。

「それにしても、鬼つてのは面倒だねえ。概念武装さえあれば消滅させることも出来るんだろうけど、そんなもん持ってないしなあ…

…」

また近いうちに現れるであろう鬼たちに肩を落とす。

この世界に来てから一週間、学園の防衛に参加し始めてから三日が経った。

その間もディアナの監視の下で修練を積み、魔法を併用しつつの戦闘にもようやく慣れてきた。先ほどの火龍掌もその成果の一つだ。玉兎の使い難い至近距離での戦闘のためにディアナが考案したもので、魔弾の射手を掌底に乗せて発勁による打撃と共に叩きこむ、というものだ。無詠唱となるため多少威力は落ちるが、殴り合いではかなり使い勝手がいい。

しばらく周囲の気配を探ってみたが、これ以上魔物はいないようだった。

一仕事終えて帰ろうと踵を返す。煙草を取り出し火をつけてから、歩き出す前に背後に潜むそれに声をかけた。

「で、いつまで隠れてるつもりだ、お二人さん？」

「おや、ばれていたのか」

「流石ですね」

振り向くと、そこに居たのは両手に大口径の銃を携えた長身の少女と野太刀を携えた小柄な少年。ともに敵意はないようだが、値踏みするような無遠慮な視線を向けてくる。

「あなたが鷹司統也ですか」

「そういつお前らは誰だ？見たところこちら側の人間のようにだが…」

…」

言葉遣いこそ丁寧だが、疑念を隠そうともしない少年の言葉にそう返すと、銃をホルスターにしまった少女が口を挟んだ。

「涼、そんなにあからさまに疑うのは感心しないよ。……すまないね鷹司さん。私は菊川氷雨、こっちのちっこいのは弟の涼。二人ともここの生徒だよ」

氷雨と名乗った少女はもともと細い眼を更に細め、にこにこ笑いながら涼と呼ばれた少年の腕を捻り上げていた。

「それで、俺に何の用だ？」

どう反応すればいいのか分からなかった俺は冷や汗をかきながら、顔が引き攣らないように気を付けつつ無難な質問を選んだ。

「いやね、彼の大吸血鬼『常闇の吸血姫』ダーク・ブリュンヒルドが弟子をとったと聞いたものでね。気になって見に来たというわけさ」

「なるほどね……。そっちの少年はそれだけじゃなさそうだけど？」

いまだに親の仇でも見るような目つきでこちらを睨む菊川弟を視線で示しながら言うと、肩を竦めて弟の頭を小突いた。

「私たちは退魔の家系の出身でね、私はそれほどでもないんだが、こいつはどうもそういうのに敏感なんだ。鷹司さんから人外の臭いがするって聞かなくてね」

「ああ、そういうこと。……まあ、いろいろと事情があつてさ。涼君、だっけ？俺はこの学園に害になるようなことはしないつもりだから、大目に見てくれないか？」

「気安く呼ばないでください」

どうやら徹底的に嫌われたらしい。にべもなく言われ、肩を落とす。

「それにしても、いつ気付いたんだい？仕事から気配を消すのは得意なつもりだったんだけどね」

「最初から見られてる気はしてたさ。特に弟君の方は、あからさまだったし」

そう言つて菊川弟に目をやると、うつ、とばつが悪そうな顔で俯いてしまった。その様子に苦笑していると、突然顔を上げて先程までよりもなお強い視線で、挑むように叫んだ。

「あんた、何しに来たんだよ！何が目的なんだよ！あんた達は、また僕から大切なものを奪っていくのか！」

「涼っ……」

暴れる弟を押さえ付ける菊川に、身振りでそれをやめさせる。

銜えていた煙草を捨てその火をもみ消してから、憎悪に顔をゆがませながら俺を睨みつける菊川弟を見据え、静かに口を開く。

「君に何があつたのかは知らないし、知るつもりもない。仮に俺が普通の人間じゃないとして、君はどうするんだ？俺を殺すかい？」

「……」

「殺したいのならかかってこいよ。もっとも、簡単には殺されてや

らないけどな」

薄く笑いながらそう告げると、菊川弟は一步後ずさり、なぜ後ずさったのか自分でも分からないような顔をした。その後ろで菊川も顔を凍りつかせている。

俺は歩み寄りながら続ける。

「言って置くけどな、復讐なんて楽しいもんじゃないぞ。そんなことしたって、得られるものなんかありやしない。時間の無駄だよ」

腰を抜かしてへたり込んだ菊川弟に視線を合わせるようにしゃがみ込む。

「まあ、口を挟む権利なんて、俺にはないんだけどな。結局のところ、決めるのは他の誰でもない、君自身だ」

頭をぼんぼんと叩きながらいう俺を不思議そうに見つめる二人を残し、立ち上がって踵を返す。

「もう夜も遅いから、早く家に帰れよー」

振り向かず手をひらひら振って歩き続ける。

二人の姿が完全に見えなくなったころ、頭上から聞きなれた声があった。

「ずいぶんな御高説だったな、統也」

見上げると、すぐそばの木の二階太い枝の上にヴァルを従えたディアナの姿があった。

「なんだ、いたのか」

皮肉のこもった台詞を受け流すと、少し不満げな表情を見せ、すぐ目の前に音もなく着地した。当然というかなんとというか、ヴァルは俺の頭の上に乗っている。

「いつから聞いてたんだ？」

「いつまで隠れてるつもりだ……、のあたりからだな」

「最初からじゃねえか……」

俺の呟きなどどこ吹く風とばかりににやにやと笑うディアナに嘆息する。頭上からはケケケ、という心底愉快そうな声も聞こえる。

「あれもお前の経験からくる忠告か？」

「そんなんじゃないよ。ただ、あんな子供がそんな下らないものに身をやつすのを見てられなかっただけだ」

「ふん、相変わらずお人好しだな」

「ほつとけ」

一週間ほど前の家族宣言以降、俺たちの間にあった無用な遠慮はほとんどなくなってきた。俺の口調が変わったのがその証だろう。俺としても変に遠慮されるよりはこの方が気が楽でいい。ディアナたちに言わせれば「変な奴」らしいのだが、そもそも堅苦しいのは好きじゃない。記憶の片隅に僅かに残る父さんの影響もあるのだから……。

「ところで、こんなところにいていいのか？学園長と話があるって
言ってただろ？」

「ああ、それならもう済んだ。統也、明日はお前も爺のところに行
くぞ」

「まじかよ……」

行きたくねえ……。

あの爺、もとい学園長の性格はこの一週間で嫌というほど思い知ら
された。

三日前に引き合わされた広域監査部長の森崎さんの「子供みたいな
人だから」という言葉の意味がよくわかる。あの時の森崎さんの哀
愁に満ちた表情を忘れることはないだろう。

「まじだ。詳しい話は爺に聞けばいい」

「はあ、分かったよ……」

「ケケケ、マア頑張レヤ」

ヴァルのどう考えても楽しんでいるとしか思えない励ましに、気分
が沈んでいくのが分かる。
拭いきれない不安を抱えたまま、前を歩くディアナを追って帰途に
就いた。

第八話

「爺、入るぞ」

いつものように学園長室の扉を開けて中に入っていくディアナに続いて足を踏み入れる。初めのころはこの言葉遣いに苦笑していたものの、学園長の人となりを知った今では、別にいいじゃん、といった感じだ。俺も敬語使うのやめようかな……。

部屋の中にいたのは、いつものように重厚なデスクの向こうに悠然と座る学園長、月森孝造。その斜め前に立つ温和な顔立ちをした三十代半ばの長身の男、広域監査長を務める森崎健吾の姿があった。

「おお、待っておったぞ」

「やあ、ディアナ、統也君。こんにちは」

「森崎さん、こんにちは。学園長、俺に話って何です？」

「わしには挨拶はないのかのう？」

「そういうことは自分の行動を鑑みてから言ってください」

俺の言葉にディアナと森崎さんが頷く。それを見て落ち込む学園長に仕方なく声をかける。

「分かりましたよ……。こんにちは、学園長」

「さて、揃ったところで本題に入ろっかのう」

打って変わって機嫌よく切り出す学園長の切り替えの早さに呆れながら、学園長室の空気の変化に合わせて意識を魔術師、いや魔法師としてのそれへとシフトさせる。

「今日集まってもらったのは他でもない、十日後に迫った学園防衛戦について話すためじゃ」

そこに先ほどまでのふざけた様子はなく、圧倒的な存在感を放つ大魔法師の姿があった。

初めて目の当たりにする日本魔法協会の重鎮としての姿に魂が震える。

「統也君は知らんじやろうが、此处学園都市霧生の周囲を囲む結界は、一年に一度、人々の煩惱が最も高まる大晦日の晩に極端に弱体化してしまうのじゃ。もちろん一般人を守るための最低限の結界は維持するが、霊脈の起点となる『大樹』を守り切ることは出来ん」

そう言って学園長は視線を窓の外へと向ける。その先にそびえるものこそ、霧生のシンボルであり、日本最大の霊脈の起点である巨木『大樹』。

その大きさは、霧生市のどこに居ても望むことができるという事実からも窺い知ることが出来る。霧生市民にとってなくてはならないものだ。

「わしらは全戦力を以て『大樹』を守らねばならん。統也君にも防衛線の一角を受け持ってもらいたいのだが、どうじやろうか」

学園長の言葉と共に、三人の視線が俺に集中する。森崎さんとディアナの様子から察するに、二人にはあらかじめ伝えられていたのだろつ。すべては俺の返答次第、というわけだ。

三人の顔を見回した後口を開く。

「防衛戦に参加することについては異存はありません。それが俺の仕事ですし、今の俺は霧生の住人ですから。……ですが、一つ聞いてもいいですか？」

学園長が頷くのを確認して続ける。

「俺は今回が初めてですからよくわかりませんが、何かいつもと違うことでもあるんじゃないですか？」

「どうということじゃ？」

「だってそうでしょう。さっきも言ったように、霧生を守ることは俺の仕事の内です。本来なら有無を言わず参加させるんじゃないですか？ 実際、四日前はそうだったじゃないですか。にもかかわらず、わざわざ呼び出して俺の意思を確認している。それを疑うなんて方が無理な話ですよ」

肩をすくめて見せると、静かに聞いていた学園長が諦めたように息を吐いた。

「その通りじゃ。どうも今回は例年とは様子が違う」

「どう違うんです？」

「それが、わしらにもよく分からんのじゃ」

「どうということですか？」

「結界の揺らぎが例年以上に大きくなつとるのは確かなんじやが、その原因も、それによって何が起こるのかもさっぱりなんじや」

そついうことか。確かに気にはなるが……。

「ふん、何があるうがやることは変わらん」

「ディアナの言う通りだ。僕たちにできることは警戒を怠らないことと、万が一の時は全力を尽くすことだけさ」

二人の言葉に頷き合い、異変を察知した場合は直ちに連絡するように徹底することで落ち着いた。

対策というのもおこがましい常識レベルのものだが、何が起こるか予想できない以上、後手に回らざるを得ない。もどかしさを感じながら、それは皆同じなのだと無理やり納得させる。

やり切れない思いのまま防衛戦時の各関係者の配置についての話を聞く。ふとテーブルの上に広げられた見取り図の中に気になる名前を見つけた。どうやらあの二人も参加するようだ。

結局、俺は他のメンバーとの連携が難しいだろう、ということとで遊軍的な位置付けになることが決まった。ほかのメンバーには申し訳ない気もするが、異変が起きた時点ですぐさま行動に移れるというのは精神衛生上非常にありがたい。

「ディアナ、健吾は言うに及ばず、統也君もこの学園内ではトップレベルの魔力の持ち主じや。お主ら三人が実質的なこちらの主力である以上、負担も大きくなるじやろう。勿論最優先でフォローはさせるが、万が一の時はお主らが矢面に立つことになるはずじや。気を引き締めてかかってくれい」

神妙な面持ちで告げる学園長に、俺たちは図らずも不敵な笑みを浮

かべた。

それを見た学園長もまた相好を崩し、その威厳を霧散させた。

学園長室からディアナの家へ向かう途中、人だかりができていたのを不審に思つて近付いてみると、どうやら喧嘩のようだった。

普通街中で喧嘩が起きていれば見て見ぬふりをするものではないのかと思ひながら、広域監査員としての職務を果たすためにディアナの先に帰つておくように言つて輪の中へと入っていく。

密集する人込みを苦勞してかき分けながら中心近くにたどり着いた時には、すでに一触即発。

何やらやけに熱くなっている十人余りの男子高校生と、その正面に立ち不敵な笑みを浮かべる女子中学生。明らかにおかしい。つか止めるよ、野次馬ども……。

「はいはい、そこまで。何があつたか知れないけど、天下の往来でこんなことしてんじゃねえよ。俺の仕事が増えるだろうが」

ぱんぱんと手を叩きながら、めんどくさそうに言つ俺に周囲の視線が集まる。

「あ？てめえ誰だ？邪魔すんじゃないやねえよっ」

そう言つて問答無用で殴りかかつて来た一人の顎にカウンターの掌底を打ち込んで黙らせる。舌嚙んでなきや良いけど。

「うるせえつての。先生の言うことは素直に聞いた方がいいんじゃないの？」

ため息をつきながらやれやれと肩をすくめると、完全に標的をこち

らに切り替えたのが取り囲み始めた。全部で十一人。

怪我させるのはまずいよなあ、と考えていると一斉に殴りかかってきた。これなら何もしなくてもいいかも、と四方八方から迫る拳を上体の動きだけでかわす。痛そうな音とともに数人が倒れる。カウンター気味に味方の拳を受けた五人が脱落。あと六人。

同士討ちに啞然としている連中の顎を掌底で打ち抜く。

後に残ったのは折り重なるように伸びている十二人の少年とその中心に立つ俺、少し離れたところで呆然としている少女と何が起こったのか分からずキョトンとする野次馬連中。

ぼーっとしたままの少女に近付き声をかけると、びくつと身をすくませた後こちらを見た。

「で、なんでこうなったのか聞かせてもらえるか？」

「え、えーつと、あ、あはははは、なんでかなー？」

冷や汗を流しながら、ぎこちなく笑って首をかしげる少女に笑いかける。

「聞かせてもらえるか？」

「はっ、はいっ、一から十まで包み隠さず話させてもらいますです
！」

顔を引きつらせながら、やけに早口で言う少女を不思議に思いながら話を聞く。心なしか顔色が悪い気がするが、気のせいだろうか？少女の話を要約するところだ。

彼女の名前は水瀬夕夏。女子空手部部長を務めており、先ほどの連中は男子空手部の部員。男子空手部と女子空手部は仲が悪く、その上水瀬が男子空手部員を軽くのしたことから、事あることにリベン

ジマツチを申し込まれている。それは一種の名物と化しており、それ故に先ほどの騒ぎでも誰も止めに入らなかったのだという。

「なるほど、喧嘩じゃなく試合ね……」。

「そう、そうなのっ、あの人たちに吹っかけられて仕方なく」

「それにしても楽しそーに笑ってた気がするけどな」

「うっ……」

「それにあんなところでやるな、やるなら道場でやれ。俺の仕事が増える」

「はい、と元気に返事をする水瀬に、本当に分かっているのか不安になる。それにしても、この学園は異常だ。魔法関係者が互いに協力し合っていることもさることながら、それに関係のない生徒も戦闘力が高すぎる。どうなってるんだこの学園は。」

「ところで、先生？は名前なんてゆーの？」

「ああ、俺は鷹司統也。一応指導教員ってことになってる。もっともまだ一週間くらいしか経ってないけど」

指導教員とは、広域監査員の表向きの名称だ。そんな物が必要なのか、とも思ったが、あくまでここは学園都市。広域監査員も書類の上では学園の教員の一人になっているのだから、物騒な名称は流石にまずいらしい。

「へー、そうなんだ？ってゆーか、先生いくつ？」

「ん？十九だけど？」

「ええっ？うそっ」

「嘘なんて言つてどうすんだ。正真正銘十九歳だぞ、俺は」

「そんなに若かったんだ……」

そんな反応されると流石に凹むぞ。俺ってそんなに老けて見えるのか？自分では結構な童顔だと思つてたんだが……。

「……まあ、いい。とにかく、街中で騒ぎは起こすなよ？」

そう言つて、煙草を取り出しながら水瀬に背を向ける。野次馬たちはいつの間にかいなくなつており、代わりに不機嫌そうなディアナの姿があつた。律儀に待つていてくれたらしい。

職務を果たしただけなのになぜ半目で睨まれなければならないのか、とも思つたが、せつかく待つていてくれたディアナにそれを言う気にはなれず、とりあえず礼を言つておく。

「待つてくれたのか？ありがとな」

「う、うるさいっ。手をどけろ！」

くしゃくしゃと頭を撫でたのが悪かつたのか、顔を真つ赤にしたディアナに怒られた。素直にディアナの頭から手をどけると、恨めしそくに睨みつけてくるディアナを促してディアナ宅に向かう。周囲の喧騒を横目に見ながら、最後にこんな平和な日常を過ごしたのはいつだったかと思考を巡らす。断片的にしか思い出せない自分に自

嘲の笑みが浮かんだ。

銜えたまま火をつけていなかった煙草に火をつけ、紫煙を深く吸い込む。もし平和な世界で生きていたら、煙草も吸っていなかったのだろうか。

「くくつ、ばかばかしい……」

くだらないことを考えた自分の愚かしさに嫌気がさす。

過去は変えられない。

それはよく分かっているはずなのに。過去を否定することは今まで関わってきた多くの人をも否定することになると、嫌になるくらい分かっているはずなのに。まったくらしくない。

視線を落とすと、顔をしかめてこちらを見るディアナと目が合った。

「また下らんことを考えているのか？」

「まあ、そんなとこだ」

「余計なお世話かも知れんが、後悔しても何も得るものはないぞ？
もつとも、そんなことはお前が一番分かっていると思うがな」

「別に後悔してるわけじゃないさ。ちょっと感傷的になってたのは
否定しないけどな」

そう言つて肩をすくめると、ディアナは面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「ふん、まあいい。さっさと帰るぞ。今日からは今まで以上に厳しくいくからな」

「げつ、まじかよ……」

「ああ、まじだ。確かにお前の魔法の成長には目を見張るものがある。それでも私や健吾に比べればまだまだだ。小物を相手にする限りでは問題ないが、高位の悪魔や鬼神クラスが出てくれば苦戦することになるだろう。そうならないためにも今日からは上級魔法の修行も入れていく。気を抜けば、死ぬぞ」

「最後のは聞かなかったことにしたいが……、まあ、よろしく頼む」

満面の笑みで告げるディアナに、とてつもなく嫌な予感がするがそれを気にしたら負けだ。いくらディアナでも、命にかかわるような無茶な修業はさせないだろう……多分。そう信じたい。

とたんに上機嫌になったディアナの後を追いながら、内心の不安を隠すように新たな煙草に火を付けた。

第九話

「はあ……。相変わらず数だけはいんだよなあ」

後ろで拳を振り上げる鬼を振り向きざまに斬り捨て、周囲を見回すながら肩を落とす。ざっと数えただけでも、まだ二十体近く居る。一体一体は大したことはないが、数が集まれば厄介になる。実際今までに何度かひやりとさせられる場面があった。

「つたく、三十体以上倒したつてのに、まだあんなにいやがる。これも結界の揺らぎのせいだろうつて話だったけど、今でこれつてことは、当日はどれだけ出るんだよ」

今までに戦ったことのない数の集団にうんざりする。

まだまだ余裕はあるが、それでも疲れることに変わりはない。

「あー、もう、めんどくせえ。まとめて吹っ飛ばすか。魔弾の射手、散弾、雷の十三柱」

最も密集している地点に、無詠唱で打ち出せる最大数の魔弾を叩きこみ、自身は逆方向へと走り出す。接近する俺に群がる六体の鬼の内、突出してきた二体を一刀で斬り伏せ、その後ろから続く三体をまとめて薙ぎ払う。そのまま反転し背後から迫る最後の一体に渾身の掌底を叩き込む。

「こいつでラスト、雷神掌」

掌底と共に打ち出された雷にその身を苛まれ、消えていく鬼を見つめながら煙草を取り出そうとして煙草が無いことに気付いた。

「あれ、どこかで落としたかな？」

「探し物はこれかな？」

ふいにかけられた声に振り向くと、そこには煙草の箱を持った菊川姉の姿があった。相変わらず笑顔を浮かべている。あれが地なのだろうか？

「ああ、やっぱり落としてたか」

「む、驚かないのかい？」

「お前が見てるのは知ってたからな。そいつを渡してくれないか？一仕事終えた後の一服が楽しみなんだ」

肩をすくめて言うと、クスツと笑った後、唐突にその姿が掻き消えた。

「おいこら、いきなり何するんだ。驚くだろうが」

下ろした視線の先で驚きの表情を見せる菊川を半目で睨む。いきなり至近距離で銃口を突き付けるとは、なんてことをするんだ。

「まさか、見えていたのかい？」

「まあ、こつちもいろいろあったんでな。それにしても瞬動術なんて使えたのか。……ほんとに中学生かよ」

昼間の水瀬といい、どうなってるんだ。

「ん？夕夏を知ってるのかい？」

ため息交じりに漏れた呟きに、菊川は首をかしげる。

「昼間ちよつとあつてな。知ってるのか？」

「知ってるも何も、私の数少ない友人だよ」

「……ひよつとして他にも……、いや、なんでもない。ところで、何しに来たんだ？落とし物を届けに来たくれたわけでもないんだろ？」

ほかにも常人離れた奴がいるのか気になったが、それを聞くと俺の中にある常識が打ち砕かれそうな気がして話題を変える。銃を突き付けているのとは逆の手に持っていた煙草を奪い取り、一本取り出して火をつけると、なんだか虚しくなった。

銃をしまい俺から離れた菊川は、わずかに躊躇った後口を開いた。

「昨日はうちの弟が迷惑をかけたね。あいつは良くも悪くも真っ直ぐなんだ。許してやってくれないか？」

「なんだ、そんなことか。別に気にしてないさ。何か事情があるんだろ？自分で言うのもなんだけど、そんなことをいつまでも根に持つほど性格は悪くないつもりだ」

そう言つて笑いかけてやると、菊川は安堵の息を吐いた。

「それを聞いて安心したよ。学園長の言っていた通りの人物のようだね」

「学園長がなんて言ってたのかは非常に気になるが……、安心してもらえたならいいや」

菊川は珍しいものを見るような視線を向けた後、愉快そうに笑いだした。

「いったいあの爺は何て言ったんだ？」

時折聞こえてくる単語から推測すると、かなり心外な内容だったのではないだろうか。

ほんとにあんな人が学園長をやっていて大丈夫なのかと不安に思ったが、魔法師としての実力は俺なんかより遙かに優れているのだから大丈夫だろう、と無理やり納得させる。

「本当に鷹司さんは変わってるね」

ひとしきり笑ってそういう菊川に視線を戻すと、目の端に涙を浮かべていた。

「……褒められてる気がしないのは俺の気のせいだろうか？」

「気のせいだよ。少なくとも私はそう思ってるよ。もし鷹司さんみたいな人が近くにいたら、涼はあんな風にならなかったかもしれない。私には無理だったみたいけどね」

そう言って寂しげに笑う菊川の姿を悲しく思った。如何に常人離れた実力を持っていても、菊川はまだ中学生だ。普通ならこんなに苦しむ必要など無いはずなのに。

「昔はあんな風じゃなかったんだよ。人懐っこい子でね、一族のみんなにも好かれてた。私は落ちこぼれただけだ、あの子は才能も

あつたしね。……二年前のことだよ。私が里から離れているときに私たちの里は、ある人外の集団に襲われてね。私が里にたどり着いた時には、里は燃え、蹂躪されていた。涼はその光景を、みんなが死んでいくのを目の前で見ていたんだ」

自分の無力さを嘆くように唇をかみしめて続ける。

「私は涼を連れて逃げたよ。どうあがいても時間の問題だったからね。そして霧生にやってきた。そのころからだよ。涼の人外に対する反応が過敏になったのは。私はそれを見ていることしかできなかった」

駄目な姉だろ？と、力ない笑みを浮かべる菊川に、首を振って笑いかける。

「そんなことないだろう。俺にも似たような経験があるけど、結局乗り越えるのは本人の意思なんだ。周りの人間がどんなに頑張っても、本人が過去にとらわれ続ける限り解決にはならない。……俺もそうだったからさ」

空を見上げる。空には蒼く輝く上弦の月。

「それでも、その痛みを理解して見守ってくれる人がいればそれは大きな支えになる。大丈夫だよ、彼は。こんなに彼を大事にしてる姉がいるんだ、必ず乗り越えられるさ。彼の眼は、まだ死んじやいないんだから」

「そうだね。いい人だね、鷹司さんは」

「よせやい」

無性に照れくさくなって菊川の頭を乱暴に撫でると、くすぐったそうに目を細める。

すっかりしろよ、菊川弟。お前にはこんないい姉がいるんだから。

「鷹司さん、あまりそういうことはしない方がいいよ。勘違いしてしまうかもしれないからね」

「ん？なにが？」

「はあ、無自覚みたいだね……」

「だからなにが？」

「なんでもないよ……。それより、私のことは氷雨でいいよ、菊川が二人じゃ混乱するだろうからね」

「そりゃありがたい。実際混乱しかけてた。俺のことも統也でいい。そっちの方が気が楽だ」

「それじゃあ、そうさせてもらうよ。……おや、もうこんな時間か。私はそろそろ失礼するよ。じゃあね、統也さん」

「ああ、おやすみ、氷雨」

時計を確認して、あわただしく去っていく氷雨を見送って煙草に火をつける。

見上げた空には、相変わらずの蒼い月。

「彼の眼は、まだ濁りきつちゃいない。だから大丈夫さ。あの頃の

俺とは、違っただから」

呟いたその言葉は、誰に聞かれることもなく夜の森に消えていった。

第十話

「来たれ氷の精。神速の矢となりて敵を討て。魔弾の射手、集束、氷の一九九柱」

ディアナの手から放たれた一九九の鋭い氷柱が、獲物を打ち抜かんと殺到する。単発で巨岩を粉碎する氷の弾丸が着弾するたびに、前方に突き出した右腕に重い衝撃を感じる。

「っ、なんて威力だよ、まったくっ」

全力で障壁を展開することおよそ十二秒。ようやくおさまった氷弾の雨にほっと一息つく。

間違いなく、今までの人生で最も長い十二秒だっただろう。もし途中で障壁を破られれば、それは命に関わるのだから。

「ほう、これも受け切れるか」

「おいこら、何意外そうな声出してんだよ……。止め切れなかったら死んじまうじゃねえかつ」

驚いたように言うディアナに、流石に腹が立った。

確かに、気を抜けば死ぬぞとは言われたが、止められるかもわからないようなものを食らうなんて聞いてない。ぎりぎり止められたからよかったものの、駄目だったらどうするつもりだったんだ。

「今のは結構本気だったんだがな……」

「……もういいや」

「マア、頑張レヨ」

悔しそうに呟くディアナに肩を落とし、半ば投げやりに言った俺をヴァルが励ましてくれる。

ヴァルは口は悪いが良い奴なんだと気付いたのは、ディアナとの修行が激化してからすぐのことだった。こうして励まされたのは、もはや数えるのも面倒な回数に上っている。

「ソレニシテモ、アンナニ楽シソウナ御主人ヲ見タノハ久シブリダゼ」

「あれが楽しそう、なのか？こつちとしてはかなりきついんだが……」

「御主人ハ気ニ入ッタ相手ニシカ感情ヲ見セネエカラナ」

そう言つてディアナを見るヴァルの顔は、人形である以上表情こそ変わらないが、とてもうれしそうに見えた。

「おい、統也。誰が休んでいいと言つた」

「ああ、わりい」

ヴァルを頭の上に乗せ、ディアナに近付く。

「まったく、出鱈目だなお前は。時間の流れの遅い『楽園』内で修行しているとはいえ、まだ一週間だぞ。そんな短期間で私の本気の魔弾の射手を受け切るとは」

「お前ね、かなりぎりぎりだったんだぞ。お前は俺を殺す気か？」

「うつ……。お、お前が悪いんだ！」

「ケケケケケ、嫉妬力ヨ御主人。ミットモネエゾ」

「うるさいっ、このボケ人形が！」

からかうように笑うヴァルに制裁を加えようとディアナは俺の頭上に手を伸ばすが、いかんせん身長差があるせいで手が届かない。それを見てヴァルが笑い、ディアナの怒りをさらに煽る。

「お前ら、いい加減にしろって」

ぴよんぴよん跳びはねるディアナの頭を撫でながらヴァルの頭を小突く。抗議の声を上げる一人と一体を無視して、脱線しかけた話を元に戻す。

「いくら頑丈だっていつても、全魔力注ぎこんでこれだぞ？あんなに意味ないんじゃないのか？もし破られたらすっからかんだもんよ」

「まあ、それはそうだな。だが、障壁の展開に慣れてくればより少ない魔力で効率的な形成が可能になる。魔力量を増やすのは簡単なことではないが、経験さえ積みめば効率的に使えるようになる。今の段階でこの強度ならかなりのものだ」

「そんなもんか」

「……さて、そろそろ次の段階へ進むぞ。防御面は上々、魔力量も少しづつ増えてきている。あとは攻性魔法のバリエーションが増え

れば、晴れて一人前だな」

「攻性魔法、ねえ。あんまり柄じゃないんだよなあ、ああいう放出系のつて」

「バカ者、確かにこれから教える上級以上の魔法は魔力の消費量こそ多いが、使いどころを誤らなければ、下手に中級以下の魔法や体術で戦うよりも遙かに消耗の度合いが小さくなるんだぞ？」

「それは分かってるんだけどなあ……。まあ、仕方ないか、使えないよりは使えた方がいざって時に役に立つだろうし」

「そういうことだ」

ディアナは呆れたように言って、足元に置いてあった分厚い魔法書を手に取った。

「お前の使える属性は、火、雷、闇、と言ったところか。攻性魔法に関してはどの属性もそれなりに使えるようだが、威力、効率の点ではこの三つが抜きんでている。逆に、補助系統の呪文は属性に関わらずほとんど使えんようだがな」

こんな所も出鱈目だな、と呟くディアナに苦笑するしかない。

ディアナの言うとり、俺の特性は攻性魔法に偏っているらしい。初日に魔弾の射手が使えるようになったのも、これが関係しているのだろう。もっとも、補助系統の魔法がほとんど使えない以上、誰かのサポートがなければ長時間戦うことは出来ないのだが。

「とりあえず、この三つの属性に絞っていくぞ。といっても、防衛戦までに修得できるのは一つか二つだけだろうがな。統也、希望の

属性はあるか？」

「そうだなあ、ディアナから見て一番短期間で行けそうなのはどれだ？」

「適正から判断するなら、火、だろうな」

「だったら、火でいくか。中途半端になるよりは、少しでも完成度を上げた方がいいだろうし」

「ほう、珍しく真つ当な意見だな」

「変ナモンデモ食ツタンジャネエノカ？」

「どいつもこいつも好き勝手言いやがって。俺だってそれくらいのことは考えてるっての。」

「オイ、それじゃあ俺がいつもバカげたことばかり言ってるみたいじゃねえか」

「ふん、私が気付いていないとも思っているのか？ここでの修行以外に一人で隠れてやっているような奴が言っても、説得力の欠片もないぞ」

「うつ……」

半眼で睨まれ、思わず言葉に詰まる。

「気付いてたのか……」

「当たり前だ。まったく、お前は修行と苦行を勘違いしてるんじゃないのか？この間のように魔力切れで倒れても知らんぞ？」

追い打ちをかけられ、両手を地面に突いてうなだれる。

「まあ、今更何を言ったところで聞かんのは分かっているが、そんなことを続けていたら近いうちに死ぬぞ？」

「ついさっき殺しかねない攻撃を仕掛けた奴のセリフとは思えんね」

「うるさい」

せめて一矢報いようと放った一言も、ディアナの一睨みであっさり斬って捨てられた。

師匠、アリア、俺はこの吸血鬼な金髪少女には勝てないようです。

「ほら、いつまでそんなことをしている。さっさと始めるぞ。……まずはこのあたりから行ってみるか」

そう言っただけ魔法書を開いて見せるディアナに、気を取り直して立ち上がり、ディアナの示すページに視線を落とす。何やら小難しそうな事が書かれているが、全部読むのはめんどくさいので重要そうなところだけに目を通す。

「えーと、なになに。燃え盛る浄化の炎」

「なっ、おい、よせっ……」

「我が手に宿りて其を食らい尽くせ。紅焰っ」

ディアナが何か言っていたようだが、無視して詠唱を完了させる。頭上に掲げた右手を振り下ろすと、かなりの魔力が吸い出されていくのを感じた。しかし何も起こらない。首をかしげていると、ぽかんとしていたディアナとヴァルが噴き出した。

「く、くくくくつ、あつはつはつは。な、何をしているんだ？くくく……」

「ケケケケケケケ、面白スギルゼ侍ッ」

笑い続ける一人と一体にムツとして、先ほどよりも生きよいよく右腕を振り下ろした。すると肘のあたりを起点として、右手が紅蓮の炎に包まれる。そのまま地面に叩き付けるように振り抜くと、炎が爆発的に肥大化し巨大な火柱を形成した。

「なっ」

ディアナの驚愕の声を無視して、しなりながら振り下ろされた火柱が大地に叩きつけられた瞬間、轟音とともに土煙が舞い上がった。

「ごほつ、ごほつ。な、なんだこれ……」

「ば、バカ者つつつ！殺す気かつつ！」

呆然と呟いた俺に物凄い勢いで掴みかかってきたディアナが、目に涙を浮かべながら今にも泣き出しそうな声で叫ぶ。

「そ、そんなこと言われたって、俺だってこんなことになるなんて……」

目の前の大地に穿たれた巨大なクレーターに開いた口がふさがらない。上級魔法の桁違いの破壊力に言葉が出ない。この世界の魔法師と呼ばれる連中は、こんな恐ろしいものを使っているのか……。

「……お前、本当に人間か？」

ディアナがこぼした呟きに、一瞬体が強張る。

「本当に、どこまで出鱈目なんだ……。初めて使った魔法でここまでの破壊力を叩き出すなど。信じられん……」

単純に驚いているだけのような様子に、思わず安堵の息を吐く。そんな俺の様子を不審に思ったのか、ディアナが不思議そうに見てくるのに気付かないふりをして、何事もなかったように口を開く。

「一体何だったんだ？一回目は何も起こらなかったのに……」

ディアナはそれ以上追及することもなく、思案顔で顎に手を当てた。

「ふむ、一回目の段階で発動したのは確かだろう。問題は、なぜその時すぐに放出されなかったのか、ということか……。統也、何か気付いたことはないのか？」

「気付いたことっていうか、二回目は一回目よりも強く腕を振り下ろしただけなんだよ……。そこに何かあるんじゃないか？」

一回目と二回目の違いといえば、それくらいしか思い当たらない。

「分からん以上は仕方がないな。こいつを使うときは可能な限り強く腕を振る、か。こんなケースは初めてだぞ。本来魔法の発動に外

的要因は関係ないはずなんだが……。まあ、そもそも出鱈目なんだ、この程度の例外は気にするだけ時間の無駄だな」

「人のこと出鱈目出鱈目言うなよ」

「実際お前は出鱈目なんだ、事実を言っただけが悪い」

ディアナの呆れたような物言いに反論できない。認めたくはないが、ディアナの反応を見る限り俺は本当に出鱈目なのだろう。ヴァルも最初に会った時に同じようなことを言っていたわけだし。どうやら、俺はどこまでも異端らしい。

「消費した魔力量と威力から見れば、まずまずと言ったところだな。もつとも、威力を調節できないようでは実戦では使えんが。とりあえず、こいつをある程度コントロール出来るようになるまで次はお預けだな」

そう言っただけで今日の修行の終わりを告げたディアナを追ってゲートへ向かう。

その途中、先程自分で作ったクレーターを見て、背筋が寒くなった。上級魔法であれだけの威力を生み出すのだ。もし純粋な魔力が暴走したらどれほどの破壊をもたらすのか、考えただけでもぞっとする。無意識に右手首のリストバンドを握りしめていた自分に苦笑する。何を恐れているんだ。これを使わなければならないような事態になれば、それ以外に選択肢はないということ。そんなことになる前にけりをつければいい。そのための修行なのだから。

胸にわだかまる不安を押し殺し歩き出す。今は自分に出来ることをするしかない。それが、俺を送り出してくれた師匠やアリア、この世界で俺を受け入れてくれたディアナたちに報いることになるはずだから。

第十一話

防衛戦が一週間後に迫った朝、いつものように体術のトレーニングをしていると、背後に誰かの気配を感じた。すぐそばの木の枝にかけたタオルを手に取り汗を拭いながら、上着のポケットから煙草を取り出し火をつける。その気配はある程度まで近づくと足をとめた。こちらに気付いたらしい。敵意を含んだ鋭い視線が背中突き刺さる。しばらくこちらを窺った後、再び動き出した気配に向き直りながら声をかける。

「つれないなあ、挨拶くらいしてくれてもいいじゃないか」

突然かけられた声に驚いたのか、びくりと動きを止めた人物に苦笑する。

「早朝練習か？ 精が出るな」

「……僕より早い時間からやっている人に言われたくありません」

相変わらずの口調とそこに込められた敵意にため息を一つ。嫌われているとは分かっていても、ここまで露骨に嫌そうな顔をされると流石に凹む。気を取り直して出来るだけ何でもない風を装う。

「あんまり無理するなよ？ 姉さんが心配するぞ」

「あなたには関係ありません」

「そりゃそうだ。……ただな、あんなにいい姉さんを悲しませてみる、俺がお前をぶつとばしてやる。てめえだけが不幸見てえな面し

てんじゃねえぞ、ガキ」

思わず口調が乱暴になってしまったことを反省しながら、怒りに震える菊川弟の様子に、結果オーライだったということにしておく。

「……っ。あんたに、あんたに何がわかる！」

あの時と同じように突然口調が変わり、憎しみが渦巻く相貌に眉をひそめる。

「何も知らないくせに！俺たちがどんな目に遭ったか、何も知らないくせに！偉そうなことを言うな！」

「ああ、お前らに何があつたかなんてしらねえよ。けどな、お前の姉さんは別だろ。お前、あいつがどんな思いでお前を連れて逃げたのか分からねえのか？お前はいいよな、里を襲った人外を恨んでりゃいいんだから。あいつが誰を恨んでるか知ってるか？」

「え……？」

「あいつ自身だよ。逃げることしか出来なかった自分を、復讐に走るお前を止められない無力を。憎んでると言ってもいい。お前はそれでいいのか？」

呆然と立ち尽くす菊川弟の姿に胸が痛む。

自分の言った言葉が、どれほどこいつを苦しめているか、それは分かっている。それでも言わなければならない。復讐を果たすかどうかに関わらず、このままではこいつにとっても氷雨にとっても良い事など何もないのだから。たとえ俺が恨まれることになっても、放っておくことなどできはしない。

「よく考える。自分がどうしたいのか、何をすべきなのか。俺が言えるのはそれだけだ」

そう言い残し踵を返す。どんな答えを出すのか、それはすべて菊川弟次第だ。どんな答えを出したとしても、俺に口を挟む権利はない。そこから先はあの二人の問題なのだから。

「どの口がそんなことを言うんだか。人のこと言えた義理じゃないつてのに」

らしくないことをした自分に苦笑する。自分のしたことを棚に上げて何を偉そうに。

「はあ、とんだ道化だよ、俺は」

「まったくその通りだな」

予期せぬ返答に驚いてあたりを見回すと、五メートルほど離れた所に生えた木の枝に腰かけるディアナの姿を見つけた。向こうも俺と同様に驚いたような顔をしている。

「なんだ、気付いていなかったのか」

「ああ、全然気付かなかった。……もしかして、聞いてたのか？」

「何のことだ？」

にやにや笑いながらからかうような声音でそういうディアナを見て確信する。

絶対聞いてやがった。

次に飛んでくるであろうからかいに肩を落としていると、いつの間にか目の前まで来ていたディアナが口を開いた。

「相当なお人好しだな、お前は」

皮肉るわけでもなく、しょうがないといわんばかりに苦笑を浮かべて言うディアナに思わずその柔らかそうな頬をつねる。

「こ、こら、にやにをする！」

暴れるディアナの頬から手を離すと、赤くなった頬を抑えながら涙目で睨みつけてくる。

「痛いだろうがっ、一体何のつもりだ！」

「わ、悪い。ディアナが珍しいこと言うもんだから、これは夢なんじゃないかと……」

「くっ、お前が私をどういう目で見ていたのかよく分かった」

どうやら怒らせてしまったようだ。もともと、涙目で上目遣いに睨みつけられても全く怖くないのだが。とはいえ、怒らせたままでは後が怖いので、妙に微笑ましい光景に後ろ髪引かれながらも機嫌を直す努力をすることにした。

「まあ、余計な御世話だつてことはよく分かってるんだけどな。あいつらはまだ子供なんだ。復讐なんてものに囚われるなんて可哀相だろ。子供が子供らしく暮らしていけるようにするのが大人の仕事だ。もつとも、俺なんかじゃ力不足もいいところだろうけど」

何やらとても恥ずかしい事を言った気がして照れくさくなった。
正直、子供らしい暮らしかんなくて言っても、それがどんなものなのか
分からない。それでも、少なくとも、そこに復讐なんてものは必要
ないはずだ。

「やはりお前はお人好しだ。それもとびきりのな」

呆れたように言ってディアナは歩き出した。

「ほら、早く来い。腹が減った、朝飯にするぞ」

振り返りもせずに言うディアナの後を追って歩き出す。

さてさて、あの無愛想な少年は一体どんな答えを出すのだろうか。

「すっかり悩めよ、少年」

呟いた俺に向けられた不思議そうな視線に気付かない振りをして歩
く。

「何をニヤニヤしている」

じと目で見えてくるディアナに笑ってみせる。

「別に何でもないさ。それよりディアナ、朝飯は何かいい？」

「ほう、珍しいな、お前が私の希望を聞くなど」

口調はいつも通りだが嬉しそうに目を輝かせている。これが犬なら
千切れんばかりに尻尾を振っていることだろう。

「なんとなく気分がいいからな」

こうしている姿だけを見れば、とてもではないが数百年の時を生き
た大吸血鬼には思えない。

ディアナもまた、理不尽な世界に翻弄された被害者の一人なのだ。
こいつらが笑って生きて行ける世界の為なら、降りかかる火の粉の
盾になろう。

手を汚すのは大人の仕事だ。傷つくのは俺だけでいい。
こいつらが笑っていてくれれば、それだけで俺は笑って生きていけ
るのだから。

楽しそうにはしゃぐディアナを見ながらそう思った。

昼過ぎ、ディアナに押しつけられた見回りの為に、ヴァルを頭に乗
せたまま街へ出た。

相変わらずの賑わいを見せる街中を適当に練り歩く。頭上に居座る
ヴァルのせい、やけに視線が集中している。確かに、二十歳前の
男が頭の上に人形を乗せているというのはかなりシニールな光景だ
ろう。かなり居心地は悪いが、これも仕事のうちだ。

「あれー？鷹司先生じゃん。こんなところで何してるの？」

背後からかけられた声に振り向くと、数日前にひと騒動起こした少
女、水瀬夕夏が居た。その隣には氷雨の姿もある。なるほど、二人
が友達だというのは事実だったらしい。

「仕事だ仕事。どこかの誰かさんが問題を起こさないようにな」

どこかの誰か、という言葉に冷や汗を流す水瀬を無視して氷雨に声

をかける。

「よう、氷雨。弟君の様子はどうだ？」

「どこかのお人好しのおかげで大いに悩んでいるみたいだよ。一体どこの誰に何を言われたのやら」

いつも通りの笑顔で肩をすくめる氷雨の様子から察するに、俺のお節介は無駄にはならなかったようだ。

「え、あれ？お二人さんってばひよとしてお知り合い？どういう関係？」

せわしなく俺と氷雨を交互に見る水瀬に苦笑する。氷雨を見るとじよように苦笑しながらこちらを見ていた。どうやら俺に説明しろと言いたらしい。面倒事を押し付けられた気がしないでもないが、初めて笑顔以外の表情が見られたということで良しとする。

「ここに共通の知り合いがいてな。その関係で俺がここに来てすぐに会うことがあったんだよ。言っておくが、お前が期待しているような関係じゃないぞ」

思った通り無粋な推測をしていたのだろう、水瀬の目が泳ぐ。まあ、こいつら位の年頃なら、色恋に並々ならぬ興味があってもおかしいことではない。むしろ、全く無関心な方がおかしいくらいだ。

「そ、それにしても背高いよね。いくつ？」

あからさまにわざとらしい誤魔化し方だが、わざわざ指摘するまでもないだろう。

「んー、一八〇ちょい、つてとこじゃないか？測ってないからよく分らんけど」

「それくらいだろうね、私が確か一七六だから」

「いいな、私なんか一五六だよ？」

自分で振っておいて勝手に沈んでいく水瀬。

「いやいや、普通そんなもんだと思うぞ？氷雨がおかしいんだ」

「統也さん、流石にそれは酷くないかい？でもまあ、その通りだろうね。夕夏の場合はこれからまだまだ伸びると思うよ」

「そうかなあ……」

不安そうに言う水瀬に、顔を見合わせて苦笑する。

中学生らしい事柄に頭を悩ませる水瀬を尻目に、中学生らしからぬ長身を誇る氷雨が口を開いた。

「ところで統也さん、その頭の上の人形はなんだい？」

氷雨よ、そういう話は一般人のいないところでしてくれ。下手に『こちら側』のことを口にするわけにはいかないのだから。もっとも、その手の質問に対する答えは用意してあるが。

「こいつか？こいつはただの人形じゃないぞ？ここの大学院で作られた人工知能を搭載したロボットだ。ヴァル、自己紹介」

「オイ侍、ドウシテ俺ガソナコトシナクチャナラナインダ」

「うわ、しゃべった……」

いつの間に復活したのか、目を丸くしてヴァルを眺める水瀬とは対照的に、氷雨はなるほど、と呟いている。どうやらヴァルの正体が分かったようだ。まあ、こいつの御主人たる金髪少女の正体と性格を知っていれば、すぐにでもわかることだろう。

ちなみに、先ほどの説明は決して嘘ではない。ヴァル自体は遙か昔から存在していたが、ディアナがこちらへ来てから、大学院で開発されていたロボットの素体にその魂を移し替えたのだという。もともと搭載されているのは人工知能などではなくディアナが作り出した人工の魂だし、動力もディアナの魔力なのだが。

「オイ小娘、ジロジロ見テンジャネエゾ」

「こ、小娘っ？」

ヴァルに小娘呼ばわりされた水瀬は、どんよりとした影を背負っていじけてしまった。お気の毒に。ヴァルの毒舌は慣れていない者には少しばかりきついだろう。

「ああ、水瀬？ 気にするな。こいつ照れてるだけだから」

「オイ侍、勝手ナコト言ッテンジャネエ。バラスゾ」

「うるさい。今のはお前が悪い。そもそもお前にそんなことできるのか？」

一度も俺に勝ったことのないヴァルは悔しげに沈黙した。
ヴァルが言葉に詰まるのは珍しいが、分が悪いことを悟ったのだらう。

視線を向けると水瀬が再び沈みかけている。憐れだ。

「と、統也さん、仕事の方はいいのかい？」

氷雨の言葉に時計を見ると、担当時間は五分ほど前に過ぎていた。それにしても、氷雨がもったのは初めてではなかるうか。妙に感慨深かった。

「いや、もう終わりだな」

「そうなのかい？　そういえば、少し喉が渴いたね」

そう言って俺を見る。俺に奢れと言いたいのだろうか、このとんでも中学生は。

見れば、先ほどまで沈んでいたはずの水瀬も目を輝かせて頷いている。立ち直りの早い娘っこだ。つーか早過ぎだ。

どうやらこの二人の中では、俺に奢らせることがすでに確定しているらしい。

「はあ、分かった、奢ってやるよ」

なんだかんだ言ってもやはり中学生。言い終わるか終わらないかのうちに相談を始めている。

年相応の様子に笑みが浮かぶ。

不思議なものだ、楽しそうにしているのを見るとこちらまで楽しくなってくるのだから。

急かすように手招きする二人を追って歩き出す。

改めて再確認。これがあるから生きていける。

何故こんなことになったのだろうか。

霧生の商業区にあるとある服屋。目の前には楽しそうにあれこれ物色する水瀬と氷雨。

事の発端は二人に連れられて入った喫茶店での会話だった。回想開始。

『統也君って、こっちに来てそんなに経ってないんだよね?』

『そうだな、まだ一週間ちよつとか』

『でも珍しいね、こんなところで働くんなんて』

『こんなところって……、自分で言うか? まあ、確かに自分で選んだわけじゃいけど成り行きでな。着のみ着のままって奴だ』

『え、そうなの? ってことは私服とかもなかったりするの?』

『ああ、そう言えば買ってないな。仕事用に多少は買ったけど、私服なんて買ってる暇なかったからなあ』今思えば、この一言が余計だったのだろう。

『へえ、そうなのかい?』

『此処に来てからこっちかなり忙しかったからな』

『なるほど……。氷雨』

『そうだね、夕夏』

『というわけで、これから統也君の私服を買いにいこー！』

『さ、統也さん、行くよ』

以上、回想終了。

何が、というわけでなのかは分からないが、突然テンションの上がつた二人に連れられこの店に入ったのが二十分前のこと。それからというもの、二人は俺そっちのけで服選びに興じているというわけである。

「なんだかなあ……」

その呟きが聞こえたわけでもないだろうが、二人はくるりと振り返った。

その手には数ある商品の中から選び抜いたであろう数点の服。

「とりあえずこれ、行ってみよー」

とりあえず？

水瀬のセリフにうすら寒いものを感じたが、普段の五割増しで笑う氷雨に試着室へと追いやられる。

仕方なく着替えて外に出てみれば、揃って頷く二人の姿。周囲の視線も心なしに集まっているような気がする。

「なあ、つかぬことを聞くが、まだやるつもりか？」

二人の様子を見る限りでは無駄な問いかけだろう。それでも一縷の望みを託して口にした問いに対して、二人はとてもいい笑顔で頷い

た。

その後も着せ替え人形のごとく何着もの服を着せられ、結局解放されたのはそれから二時間後。途中、とてもではないが着る気にはなれないような派手なものまで引つ張り出てきたときは、全力でお断りした。その時不満そうにしていた二人が恐ろしい。

二人の気が済み、店を出た時には俺の財布は悲しいくらいに軽くなっていた。原因は会計の時に二人が当然のように上乘せした数点の服。多分間違いない。

二人の惜しめない協力は今までの人生で一日に使った最高金額を大幅に更新してくれた。

疲れた体を引きずってたどり着いたディアナ宅で待ち構えていたのは、非常に不機嫌な吸血鬼な少女だった。その日の修行は想像を絶するものだったことを追記しておく。

第十二話

いつも通りの時間に目を覚まし、すぐ日付を確認する。

十二月三十日。

防衛戦を翌日に控えた今日の午後、学園全体を覆う結界を居住区、商業区などの一般人の生活区域まで縮小することになっている。つまり、それから年が明け結界が元の強度を取り戻すまでの間、学園に住む魔法関係者は『大樹』を指す魔物の大軍を相手に戦い続けなければならない。

ディアナを起こし、朝食を済ませてから儀式の行われる学園区の中央広場へ向かう。ヴァルは留守番だ。

俺たちが到着した時には、すでに防衛戦に参加する人達の大半が集結していた。

今回参加するのは総勢二二一名。ほとんどが指導教員だが、中には氷雨のような学生もいる。

たったこれだけの人手で丸一日以上戦い続けなければならないのだから、まともな休憩時間など得られないだろう。

その上俺は遊撃隊。此处にいる参加者の中でもかなり負担は大きくなるはずだ。消耗を抑えるような戦い方をしなければならぬだろう。

防衛戦の過酷さを想像して肩を落としていると、森崎さんがやってきた。

「やあ、調子はどうだい？」

「悪くはないと思いますよ？」

「当たり前だ、誰が鍛えたと思っている」

腕を組んでふんぞり返るディアナにそろって苦笑する。

「見ての通り人手が少なくてね。期待しているよ」

「まあ、出来る限りのことはしますよ。変に気負って下手を打つのは嫌ですから」

あたりを見回しながら言う森崎さんにそう答え、ほかの参加者の様子を窺う。

どの参加者も一様に落ち着かない様子で、視線を彷徨わせている。彼らも結界の揺らぎについては聞かされているのだろう。少し離れたところにいる氷雨の表情からもわずかに硬さが見て取れる。

広場の中央には巨大な魔法陣が描かれており、その中に学園長以下数名の魔法師が円を描くように佇んでいる。足元の魔法陣から立ち上る燐光に照らされたその姿は、古の神話のワンシーンを連想させる。

ふいに元の世界での最後の光景が目に見え、目を逸らした。

見上げた空は鈍色の雲に覆われている。夜になって気温が下がれば雪が降るかもしれない。

「どうやらそろそろのようだ」

森崎さんの気負いの感じられない言葉に視線を戻すと、魔法陣から燐光が溢れ出し広場一面に広がっていた。

学園長らによる詠唱が始まり、一層輝きを増す。

目も眩むような閃光に手をかざす。

それが収まった時、『大樹』へと向かう膨大な数の微細な魔力をとらえた。

広場に集まっていた参加者たちが次々に担当地域へ向かう中、それに続こうと走り出し、言い知れぬ圧力を感じ足を止めた。

見れば森崎さんやディアナ、高位の魔法師と思われる数名も同様に立ち止まっている。

相変わらず感じ取れる魔力は小物ばかり。それでもこの圧力には心当たりがあつた。

恐怖。

生物のとしての本能に刻み込まれた、抗い難い感情。

視線を向けるディアナに頷き返し気を引き締める。

どうやら一筋縄ではいかないらしい。

心を落ちつけるべく息を一つつき、人気のなくなった学園区を駆け出した。

「はっ！」

裂帛の気合とともに、眼前に迫った鬼を袈裟に斬り、そのまま反転、勢いを殺すことなく背後の鳥族を横薙ぎに両断する。

魔物たちの第一波を退け、ようやく周囲から気配が消えた。

結界の縮小からおよそ四時間。周囲は薄闇に覆われている。

これまでに斬り伏せた魔物の数は百以上。

今のところはほぼ例年通り。大したダメージもなく、体力的にも何ら問題はない。

しかし、結界が縮小された瞬間から感じる得体の知れない圧力が気にかかる。

今迄に感じたことのあるものとは違う。茫洋としてあやふやでありながら、一切の偽りなくそこにいる。いることは分かっているのにその姿を見ることは叶わない。そんな存在感。

堂々巡りを繰り返す思考にため息をつく。

そこでふと思った。あの男はどうしているのだろうか。

鷹司統也。突如霧生に現れた素性不明の魔法師。『ダイク・ブリュンヒルド常闇の吸血鬼』の弟子。

そして何より、人でありながら人外の臭いを放つ男。初めて会ったあの日、対峙した際に見せた薄い笑み。

思い出すだけで体が震えだしてしまう。

しかし、そこには一切の敵意も殺意も含まれてはいなかった。否。なにもなかった、と言うべきか。

殺意、敵意は言うに及ばず、人間らしい感情の一切が削ぎ落とされたような、そんな笑み。

かと思えば、人の生き方に口を挟み、よく考えろと言い残して去っていく。

あの時の彼の眼には、間違いなく感情が宿っていた。

人として無くてはならない物が決定的に欠けているにも拘らず、どこまでも人間らしく振舞おうとする。

分らない。故に恐ろしい。

それでも、信じてもいいのかもしれない。根拠もなくそう思う。

あの男は言った。自分には関係ない、だが姉さんは違うだろうと。

あの日以来よく考えた。経験したことがないくらい悩んだ。そして気付いた。

あの男の言葉に嘘はなかったのだと。

姉に連れられて逃げた夜、自分は何を考えていた？ただ震えるだけで、何も考えられなかった。焼けた里を目の当たりにして、姉が何を思ったのかも。

その時のことを今でも悔いていることにも気付けなかった。

いつも変らぬ笑顔の裏で自分を責め続けていることも、その笑顔が時々自嘲するそれに変わることを知ったのもあのあとだ。

知らず知らずのうちに姉を苦しめていたことに愕然とした。

それを教えてくれたのはあの男なのだ。自分のためではなく、姉の為に。

その上で言ったのだ、考えろ、と。

穏やかな微笑を浮かべ、弟子の成長を見守る師のような眼差しで。深い悲しみを押し殺して。

そこで気付く。あの男の態度は父のそれに酷似していたことに。父も僕に何かを強制することはなかった。僕に才能があっても、修行をするかどうか、父の後を継ぐかどうか、最後まで僕に考えさせた。

自然と笑みが浮かぶ。なるほど、それなら納得がいく。

「涼、大丈夫かい？」

背後から聞こえた声に答えながら振り返る。

「うん、大丈夫だよ姉さん。そっちは？」

姉さんは一瞬驚いたような顔を見せてから、いつものように笑った。

「こっちも問題ないよ」

いまさらになって思う。姉さんは口調と表情が一致していない気がする。どうでもいいのだけれど。

そう言えば、姉さんはあの男を好いていたっけ。そう考えるとなんだか面白くない。

だから笑ってみた。あの男のように。

もう二度と姉さんを悲しませないように。

「ふむ、今のところは問題なし、かな」

「そうみたいです。どこも順調そうですから」

各所に設置されたモニターの映像と定時連絡の内容に目を通しながらの言葉に、対面に座る統也君が答える。

ここは学園区の中心部に置かれた、日本魔法協会本部内の一室。遊撃隊の本部として割り当てられた部屋だ。

今この部屋にいるのは、僕ら二人を除いて十三人。全員が僕ら同様、報告の内容に目を通し、些細な異常も見逃すまいと目を光らせている。もつとも、時々統也君を窺うような素振りを見せているのだが、当の本人はそんなものはどこ吹く風、といった様子で次々に報告書の束を捌いている。

その仕事ぶりは流石としか言いようがない。何しろ、敵の第一陣をほぼ損害無しで撃退できたのは彼の働きによるところが大きいのだから。

敵のわずかな動きを見逃さず、防衛員の配置を変更することで、孤立を防ぎつつ効率よく撃退していく。時に繊細に、時に大胆に。それも、単純に命令するわけではないのだ。あくまで判断は防衛員に任せ、必要な情報と助言によって自身の求める回答を導かせる。こうすることで反発を防ぎつつ、相手に自分の存在を認めさせる。実に上手い。

もちろん僕にも同じようなことは出来る。しかし、それは『こちら側』で二十年近く生きてきた経験によるものだ。

聞けば、統也君が『こちら側』で活動を開始したのは十四の時。今の年齢が十九だから、まだ五年ほどしか経っていないことになる。無論、彼の話が事実だという前提に基づいての話ではあるが、外見から察するに今現在十九歳であることは事実だろう。つまり、どれほど長く見積もっても『こちら側』で生きて来た年月は十年余り。僕の半分程度だ。

真剣な眼差しで報告書を読む統也君を見る。

実力、経験ともに僕に匹敵するであろう青年は、どれほどの修羅場を潜り抜けてきたのだろうか。その横顔から窺い知ることは出来ない。

「ん？これは……」

眉をひそめて呟く統也君のただならぬ様子に思考を断ち切る。

「どうかしたのかい？」

統也君は顔を上げると、険しい表情のまま報告書を差し出す。

「何の根拠もないんですけど、何か引つかかるんですよ……。嫌な予感っていうか、胸騒ぎっていうか」

受け取った報告書に目を通す。しかし、これと言って不審な点はないように思えた。

「考えすぎじゃないのかい？」

「そうだといいいんですけど……」

答える声も歯切れが悪い。おそらく、今もめまぐるしく思考を巡らせているのだろう。

残念ながら僕には感じられないが、彼はある程度確信しているのだろう。これから何かが起こるだろうということ。

何ら根拠はないが、報告書と映像というごく限られた情報から敵の動きを的確に把握した彼の勘ならば、信じてみる価値はあるかも知れない。

「じゃあこうしよう。行動中の遊撃隊に警戒を促す、これならば僕らの権限だけで事足りる。それに防衛員の不安を煽ることもないだろうからね」

その提案に不承不承ながら頷く統也君に苦笑する。内心では居ても

立つても居られないのだろう。先ほどの落ち着きが嘘のようにそわそわしている。

「そう言うわけだから、統也君、ディアナに伝えに行ってくれないか？下手に携帯を使うと、ディアナの周りに誰かいたときに不安がらせてしまうかもしれないからね」

そう言うて笑いかけやると、あからさまにその表情が明るくなった。しかし、すぐに陰しい表情に戻る。

「でもそれじゃあ……」

「この中で一番機動力があるのは君だ。もし何かあったらすぐに駆け付けられるだろう？」

しばらく悩んでいた統也君だったが、こちらの意図を読み取ったのかしつかりと頷いた。

「分かりました、ここはお願いします」

頭を下げてから部屋を飛び出していく後姿を見送る。

実際のところ、先程の理由は後付けのものだ。ディアナの性格上、誰かと行動を共にすることは考えにくい。では本当の理由とは何か、簡単なことだ。

統也君は自分と関わりのある者が傷つくことを酷く恐れている。本人から直接聞いたわけではないが、先程の様子を見ていればすぐに分かる。もちろん、それを気にするあまり仕事が疎かになるようなことはないだろうが、精神状態が効率に及ぼす影響は決して小さくない。

残念ながら、今の霧生に彼ほどの実力者は数えるほどしかない。

いまだに不審な点の残る統也君がここにすることがそれを証明している。ここで彼が潰れてしまえば、不測の事態が起こった時にかなりの犠牲が出てしまうだろう。そのための休息であるという面が大きい。

実力、経験ともかなりの物ではあるが、彼はまだ若い。考えうるリスクは可能な限り取り除くべきだろう。

「余計なお節介なのかもしれないね……」

眩き、苦笑する。先程から様子を窺っていた数人に、何でもないと手を振って報告書に視線を戻す。

ちらりと目をやったモニターに映った漆黒の青年を見ながら思う。そう言えば、彼の戦闘を見たことはなかった。

統也君の実力を見る機会に恵まれたことに年甲斐もなく心を躍らせながら、目の前に積まれた書類の山から新たな報告書を手に取った。

最初にそれに気付いたのは涼だった。

「姉さん、来るよ。かなり多い」

珍しく焦燥を隠そうともせず告げられたその言葉に、拳銃を握る両手に力が入る。

「どのくらいだい？」

「分からない。ただ、こっちに向かつてる奴だけでも百や二百じゃきかないと思う」

涼の魔力探知能力は私などより遙かに高い。おそらく学園内でも制

度、範囲ともに最高水準だろう。

その涼を以てしても捉えきれない数の魔物が向かっている。それも、涼の口ぶりから察するにここだけではないのだろう。

はつきり言って百や二百なら私たち二人だけでどうにでもなる。涼もそれは分かっているはずだ。にもかかわらず、涼は明らかに動揺している。そこから導かれる結論は一つ。

かなりまずい。

どれほど力があっても、猟の得物は一振りの野太刀のみ。私も両手に構えた拳銃だけだ。数で押されれば、いずれ各個撃破の憂き目に遭うだろう。

「考えても仕方ないか。涼、行けるね？」

「もちろん」

前方を見据えながらのたつた一言の肯定。

目を凝らせば木々の向こうに蠢く影が見える。確かに多い。私が探知できるだけでも百を越えている。その先にはより多くの異形がいるのだろう。

神経が研ぎ澄まされる。

邪魔なノイズが消え去り、視界が薄い蒼に染まる。

風の動きさえも手に取るように見通せる世界に、一発の銃声が響いた。

それを合図に涼が駆ける。

瞬く間に距離を詰め、上段から一閃。崩れ落ちる鬼には目もくれず、さらに奥深くへと切り込んでいく。

涼の死角から迫る異形を両の拳銃で片っ端から薙ぎ払う。

風の流れの変化に振りかえり、眼前に迫った鳥族に至近距離から銃弾を叩き込む。

唸りを上げる剛腕を左の銃把で受け流し、上段の回し蹴りを叩き付

ける。

「撃つだけが能だと思わないでくれるかい？」

銃弾を撃ち込み、回し蹴りで薙ぎ倒し、銃把で殴りつける。際限なく現れる異形に容赦なく銃弾の雨を降らせていく。

「ちっ、弾切れかつ」

舌打ちと共に駆けだす。銃が使えない以上、涼との距離を詰めなければならぬ。

立ちふさがる鬼に焦燥が募る。

涼を見れば、眼前の鬼を袈裟に斬り伏せたところだった。背後には別の一体。涼は気付いていない。涼の胴よりもなお太い剛腕が掲げられ、唸りを上げて涼に迫る。そこでようやく自身の窮地に気付き飛び退こうとするものの、背丈よりも長い野太刀を振り切った態勢である涼にそれが出来るわけもない。

涼との距離はおよそ十メートル。とても間に合う距離ではない。

私は涼まで失ってしまうのか？あの日以来修行を欠かしたことは無かった。必死に鍛えたところで、才能のない私に涼を守ることなど出来ないのか？

絶望が心を支配する。

そして、剛腕が振り下ろされた。

第十三話

「本当に出鱈目な奴だな、あいつは」

眼前で蠢く無数の異形を薙ぎ払いながら嘆息する。

統也が警戒を強化するように言ってきたのはほんの十分程前。

その必要はないと思っていたが、従って正解だったようだ。

各方面に総勢千を超える大群が現れ、どこもかなりの乱戦になっているらしい。

大半は下級の鬼や鳥族のようだが、数体の中級妖魔も確認されたという。

どちらも近年、少なくとも、私がここに来てからは無かったことだ。

「それにしても嫌な予感、か……」

嫌な予感。統也が警戒の強化を命じた理由がそれだ。

確かに、長年『こちら側』で生きてきた者は、少なからずそういった不穏な空気を感じ取ることが出来る。いや、それが感じ取れない者は早々に散っていく、と言った方が正確かもしれない。

しかし、これは些か行き過ぎではないだろうか。

数百年の長きにわたり『こちら側』に携わってきた私にも、統也の言う嫌な予感は感じられなかった。それはこの霧生にいる魔法師や傭兵も同じだろう。

統也の持つ、いわゆる第六感というものがずば抜けている、と言ってしまえばそれまでかもしれないが、仮にそうだとしてもここまで都合良く行くものだろうか。

「まあいい、私には関係のないことだ」

鷹司統也という人物が一体何者なのか、ということに疑問を感じないと言えば嘘になる。あの男には謎が多すぎるのだから。

それでも、それは今考えることではないだろう。

あいつは、私が信じるに足ると認めた数少ない人物の一人なのだから。

それに、私は……。

自分の考えに顔が熱くなるのを感じた。

二度三度と頭を振り、思考を切り替えようと試みるが、一度頭に浮かんだ考えは簡単には消えてくれない。むしろ、一層思考が加速する。

周りに鬼どもがうじゃうじゃいるという状況で何をしているのか……

…ん？鬼ども……うじゃうじゃ……？

「なんだ、簡単なことじゃないか」

思わず笑みが浮かぶ。

視線の先には何も知らぬ哀れな亡者ども。

「

貴様らに踊ってもらおうか。くくっ、せいぜい楽しませてくれよ？」

背後に迫る剛腕に気付いたあの時、死を覚悟した。

野太刀を振り切り、完全に動きの止まった僕にそれをかわす術はない。

絶望に塗り潰された思考の中で、姉に謝った。ごめん、と。しかし実際はどうだ。

無様にも尻餅をついた僕の視線の先、そこにあるのは漆黒の背中。なぜ彼がここに？

「生きてるか？菊川弟」

僕をこんなふうと呼ぶのは一人しかない。しかし、彼は今本部にいるはずだ。

「どうして、あなたが？」

何とか絞り出せたのはそれだけ。それでも闇色を纏った彼、鷹司統也は笑って答えた。

「どうも嫌な予感がしたんでな。無理言って出てきたらこれだろ？流石に焦った」

その間も休むことなく群がる異形を屠っていく。一切の無駄なく、この場に存在するすべてを見通しているかのごとく縦横無尽に刀を振るう。

その動きは止まることを知らぬ流水の如し。銀の剣閃が煌くたびに、数体の異形が断末魔の叫びを上げて崩れ落ちた。

「あー、とりあえず手伝ってくれねえか？流石に二人を守りながらじゃきつい」

そう言われて初めて気が付いた。呆然とする僕の周囲にいた異形は駆逐され、姉さんを取り囲んでいたモノたちも消え去っている。

「そ、そうだね。でも、残念ながら弾切れなんだよ」

「そうなのか？」

まいったな、と頭を搔きながらさらに一体斬り捨てた。そのちぐはぐな姿に笑ってしまう。

「じゃあ、こいつ使えるか？」

差し出されたのは今まさに異形を斬り捨てた日本刀。
かなりの業物なのだろう、美しい刀身がわずかな光を受けて輝いて
いる。

かすかだが魔力も感じられる。アーティファクトだろうか？

「あ、ああ、一応使えるよ……？」

だったら使うといい、と日本刀を地面に突き立て背を向ける。

「それは俺の父さんの形見だ、切れ味は保証する」

「統也さんはどうするんだい？」

刀を引き抜きながら尋ねる姉さんに、握った拳を掲げて笑う。

「心配しなさんな、俺にはこれがある」

右足をわずかに下げた半身の態勢で、両腕はだらりと下げたまま。
構えらしい構えをとることもなく、一見すると隙だらけだ。

しかし、細められた漆黒の瞳は前方に蠢く異形を射殺すかのように
鋭い。

「お二人さん、準備はいいか？」

剣呑な眼差しとは違い、何ら気負いのない声音。

「いつでもいいよ」「いつでもどうぞ」

ほぼ同時に発せられた僕と姉さんの声に「それじゃあ、行きますか」と言っただけで腰を落とす。

「無理はするなよ」

その言葉を残して鷹司統也の姿が消える。

直後、大地を揺るがすような踏み込みと共に一体の鬼が爆散した。刀を振るっていた時とは違い、立ち塞がるものを悉く叩き潰すかのような拳打の嵐。

そこに巻き込まれた鬼達は、見る間にその数を減らしていく。

「圧倒的だ……」

大半が鷹司統也に群がり、僕たちの方へ向かってきたのは三割にも満たない。

数十の異形に囲まれてなお、その顔から余裕が失われることはなかった。

掌底が、拳打が、蹴撃が叩き込まれるたびに、炎に焼かれ、雷撃に苛まれ消え去っていく。

わずかな停滞もなく、暴風のごとく異形の群れを薙ぎ払う。

その動きが止まった時、この場に居たのは僕たち三人だけだった。

「ふう、これで一段落かな」

百近い数の異形を殲滅した直後とは思えない軽い口調に気が抜ける。

「そうみたいだね」

姉さんも口調こそ普段通りだが、その口元がわずかに引き攣ったのを僕は見逃さなかった。

鷹司統也は背を向けたままポケットから携帯を取り出し、どこかに連絡を取っている。おそらく遊撃隊の本部だろう。他地区の状況を尋ねているようだ。

やがて安堵の息とともに携帯をしまい、振り返った。

「ここは俺が受け持つから、お前らは今のうちに休んどけ。特に氷雨、弾切れじゃまずいだろ」

正直に言って疲労はかなりのものだ。時間を確認すると午後六時過ぎ。配置に着いてからすでに六時間が経過していることになる。深夜から明け方にかけて最も忙しくなることを考えると、そろそろ休息を入れた方がいいかもしれない。視線を向けてきた姉さんに頷きを返す。

「そうだね、そうさせてもらうよ」

「ゆっくり休めよ。まだ長いんだからな」

「あなたに言われるまでもありません」

やっぱり姉さんと鷹司統也が話していると面白くない。苦笑する鷹司統也に背を向けて歩き出す。

途中で一度だけ立ち止まり、振り返ることなく言う。

「……あ、ありがとう、ごさいました」

口に出してから後悔した。

ただでさえ恥ずかしいというのに、そのあとの沈黙がさらに羞恥を煽る。

ちらりと背後を窺うと、呆氣にとられたような二人。

沈黙に耐えきれなくなつて足早に立ち去ろうとしたとき、鷹司統也が口を開いた。

「そんなこと気にしてたのか？」

思わず振り返ると、困つたような苦笑いを浮かべながら続ける。

「別にいいさ、そんなこと気にしなくても。俺達は仲間だろ？ 仲間を助けるのに理由なんかいらぬ。しいて言うなら、俺がお前らを死なせたくなかつたからだ。まあ、それで弟君の気が済むなら、礼は礼として受け取っておくけど」

そう言つて笑う姿に、姉さんが惹かれた理由が分かつた気がした。鷹司統也という人物は今まで出会つたどんな大人よりも純粹なのだ。子供がそのまま大きくなつたように純粹で、自分のことなど顧みず、おそらく、誰かを守ること自分が傷つき倒れても、笑つてそれを受け入れるのだらう。

「……涼」

気付けばそう言つていた。

「ん？」

聞き取れなかつたのか首をかしげる鷹司統也に、もう一度はつきりと言う。

「涼でいいです」

呆氣にとられる鷹司統也。視界の端で苦笑を浮かべる姉さんに気恥

ずかしさを感じる。

視線を逸らしてしまってから、これではまるで照れ隠しではないか、と気付く。余計に恥ずかしくなった。

「さ、先に戻ります」

逃げるように歩きだしたところで呼び止められ、仕方なく足を止めた。

「あ、おい、待てよ。俺のこと統也でいい……といっても、呼びたくなければ別にいいけど」

そんなことでいちいち呼び止めるなよ、僕は早くここから立ち去りたいのに。

こちらの内心のことなど露知らず、と言った様子で嬉しそうに微笑む姿にため息一つ。

恥ずかしがっている自分が馬鹿みたいだ。

「分かりました、では、統也さんと」

もういい、開き直った。

「ああ、分かった。しっかり休めよ？頼りにしてるからな、涼」

そう言って笑う鷹……統也さんに僕も笑って返す。

「ええ。それでは、先に休ませてもらいます。統也さんもお気を付けて」

驚きを隠せないのか、姉さんが目を瞬かせているが、気にしない。

手を振る統也さんに軽く頭を下げて本部の仮眠室へ向かう。
妙に心が軽かった。

第十四話

これは認めてもらえたと考えていいのだろうか？

初めて年相応の笑顔を見せて立ち去る涼の背中を見送りながら思う。

「お、驚きだ……」

「何が？」

呆然と呟いた氷雨に尋ねると、半ば予想通りの答えが返ってきた。

「涼が自分から名前で呼ばせるなんて、あの日以来なかったんだよ。しかも、他人を名前で呼ぶなんて……」

あの日。それは二人の生まれ育った里が燃えた日のことだろう。なるほど、と嘆息する。

今の涼の年齢が十二歳。つまり、ただ一人の姉を除く全てを奪われた時、涼はまだ十歳だった。俺の初仕事が十四の時だったことを考えると、彼の心の傷の深さは計り知れない。

俺のように、頼ることのできる大人がいれば良かったのだろうが、当時彼の傍に居たのは姉である氷雨だけ。故に涼はその傷を抱え込まざるを得ず、他者に対して心を開くことが出来なかった。

無論、氷雨にその責を押し付けるのは酷な話だ。彼女もまた被害者であり、何より子供なのだから。気を揉むのは大人だけでいい。と言っても俺自身まだまだ若造だが。

「へえ、快拳じゃないか。だったら、次は親しみを込めて『兄さん』とでも呼ばせてみるか」

重くなりかけた空気を払拭すべく、殊更に明るく言うと、氷雨は驚いたように目を見開いた後、顔を赤くして俯いてしまった。

熱でもあるのだろうか？

見えているのか疑問に思えるほどの線目を見開く氷雨を微笑ましく思いつつそんなことを考えていると、これまた珍しくぼそぼそと呟く。

「……これも無自覚なんだろうね。はあ、もう少し自分のことを理解してほしいものだ」

何かまずいことを言ったのだろうか？

ちらちらと俺を見ながら顎に手を当てて呟く氷雨の様子に首を捻る。次に氷雨が顔を上げた時、その顔にはいつも通りの笑みが浮かんでいたものの、どこか惘然としているようにも見えた。

「それじゃ、私もそろそろ行くよ」

「おう、しっかり休んどけよ」

「……」

去り際、何かを呟いた氷雨だったが、それを尋ねる前に逃げるように瞬動を使つて立ち去ってしまった。

「ありゃ、嫌われちゃったかな？」

戦闘時でもないのに瞬動術を使ったことから考えても、そう考えるのが妥当だろう。

思わずため息が出る。

今までに拒絶されたことも忌み嫌われたことも数えるほどある。

それでも、やっぱり人に嫌われるのは辛いものだ。

「まあ、仕方ないのかもしれないな」

呟き、自嘲する。

仕方ない？何を馬鹿な。そうなるべくしてそうだったのだ、これは当然のこと。

そう、当然なのだ。光の中で生きる資格など俺にはないのだから。だからこそ、思う。

嫌われるのならそれでいい。いくらでも嫌われてやろう。

この手はすでに血に汚れているのだ。妖魔と呼ばれる存在のそれではなく、紛れもなく人間のそれで。

そんな俺が今更何を躊躇う？

血に塗れた手に刃を握り、返り血にどす黒く染まった外套を纏い戦場を駆ける。

俺に出来るのはそれだけ。

ならばそれを全うしよう。光の中で生きるべき、彼女等の為になるのなら。

知らず、拳を握りしめていたことに気付き、苦笑する。

目を閉じ、深呼吸を一つ。

目を開くと、視線の先には無数の異形。中級妖魔の姿も見受けられる。

中級妖魔が約二十。下級に至っては数えるのも面倒だ。この集団を相手取るにはあの二人では少々力不足。単独で相手に出来る者はこの学園に十人もいないだろう。

そのうえ、一際大きな存在感を放つ鬼が一体。上級妖魔だ。

左手首に右手を添え、一息に横に薙ぐ。右手に玉兎の重さを感じながら両足に魔力を込める。

一息で距離を詰め、手近な一体を左の掌底で消し飛ばす。身を翻し玉兎を一閃。迫る数体の妖魔を両断する。

一瞬の停滞もなく、圧倒的な物量で襲いかかる妖魔を薙ぎ払う。

「ほう、人の身でよくやると思っていたが、なるほど、そういうことだったか。気配が薄すぎて詳しくは分かんが、お主、混血だな？」

「それがどうした」

突然かけられた上級妖魔の声にこたえ、その巨軀を見据える。

三メートルに迫ろうかというその体軀からは、濃密な暴力の気配が漂っている。

その禍々しい空気に嫌悪を感じていると、後方に控え、指示を出すことに徹していた上級妖魔が下級妖魔の壁を割って出てきた。それに呼応するように下級妖魔たちは後ろに下がり、円陣を形成。内側に残ったのは俺と上級妖魔だけ。

「何の真似だ」

「何、大したことではない。少しばかり手合わせをしてもらいたいだけだ。人間界に来るのも久方ぶりなのでな。計画の発動前に強者と一戦交えるのもまた一興と言ったところよ」

「計画？」

こいつが今回の襲撃の首謀者か？

あわよくば情報を得ようと口にした疑問の答えは、虚空から現れた大剣の一閃だった。

「些事に拘るでない。戦場に敵対する強者が二人あらば、することは一つ。違うか？」

「一騎討ち、か」

二メートルを超える大剣を携えおぞましい笑みを浮かべる大鬼に口角が上がるのを感じる。

それを了解と取ったのか、喜びを隠そうともせず大剣を振り回す大鬼。

「それでは始めよう。我が名は茨木童子。酒&#21534・童子が第一の配下なり」

「酒&#21534・童子に茨木童子、ねえ。まさか実在していたとは……」

酒&#21534・童子。鬼の姿をまねて略奪の限りを尽くした盗賊の名だったはず。

茨木童子に至っては、御伽草子の一節『酒&#21534・童子』に登場する鬼だ。

どちらも空想上の妖魔だと思っていたが、少なくともこちらの世界では実在したらしい。歴史等に関しては、元の世界の知識は役に立たないようだ。

とにかく言えることはただ一つ。

「厄介な奴が出てきたもんだ」

下級、中級妖魔はともかく、上級妖魔は一種の概念存在だ。概念存在はその性質上、存在に対する信仰や恐怖が強いほど強大な力を持つ。

元の世界ではそれほど知名度は高くないが、こうして目も前に存在している以上、この世界ではそれなりに知られているのだろう。

そして、先程の名乗りに酒&#21534・童子の名が出た以上、茨木童子の後には酒&#21534・童子が控えているとみた方がいい。

茨木童子でさえそこの妖魔とは一線を画す力を持っているのだ。それを従える酒&#21534・童子の力とは一体どれほどのものなのだろうか、想像もつかない。

「考えるだけ無駄か」

「どうした、怖気付いたか？」

「まさか。むしろ楽しみなくらいだ」

俺に出来ることは誰かの為に障害を排除することのみ。考えるのは専門外だ。

右手に携えた玉兎を茨木童子に突き付け、名乗りを上げる。

「俺は鷹司統也。霧生学園中等部の新任指導教員だ」

自分でもどうかと思う名乗りだったが、意外にも茨木童子は気に入ったらしい。驚きをあらわにした後、天を仰いで豪快に笑いだした。

「がはははは、お主、なかなか面白いではないか。まさか名乗り返してくるとは。やはり人間界に出てきて正解だったようだ、お主のような愉快な女子に会えるとは」

「……貴様、今何と言った？」

聞き捨てならない言葉を聞いた気がするが、俺の勘違いかもしれない。

「愉快的な女子、と聞こえた気がするが、俺の気のせいかな？」

「それがどうかしたか？お主ほど愉快的な女子は初めてだ」

「どうやら聞き間違いではなかったようだ。」

今にも飛び出しそうになる足をぎりぎりのところで踏み止まらせ、玉兎を握る右手に力を込める。

「ん？どうした、何を怒っている？」

いや、俺は怒ってなどいない、とても冷静だ。そもそも怒る理由など無いだろう。

「まあいい。お主、我が勝ったら我が妻とならんか？何、損はさせんぞ？」

「……っざけんなあああああ！俺は、男だあああああ！」

認めよう。俺は今怒っている。非常に頭にきている。

一息で茨木童子の間合いの内側に飛び込み、最速の拳打を打ち付ける。

鉄の塊を殴ったような衝撃を左手に感じながらその場で一回転。右手の玉兎をその首筋へと滑らせる。

「なにっ！」

頭上からの驚愕の声を聞きながら、仰け反って一閃を回避したことでがら空きとなった胴へ槍の刺突のとき蹴りを叩き込む。

「ぐおっ！」

踏ん張ることも出来ず後方へ浮き飛ばされる茨木童子に、痺れたままの左手を向け、無詠唱魔弾の射手で追撃。その余波に巻き込まれたのか、数体の妖魔の断末魔の叫びがあがった。

「おお、いてえ。なかなかやるようだな」

「まったくの無傷でよく言うよ、うれしくも何ともねえって……」

土煙の中から現れた茨木童子の言葉に肩を落とす。

装束こそところどころ焼けているものの、その体は無傷。

先程の魔弾の射手は、無詠唱とはいえ中級妖魔相手なら十分すぎる威力があつたはず。それを受けて無傷ということは、対魔法防御力もかなりのものだ。並の魔法師では、手傷どころか傷一つ付けられないだろう。

体をほぐすように大剣を振る茨木童子の頑丈さに呆れていると、次はこちらの番だと言わんばかりに雷鳴のような咆哮と共に突進してきた。

上段から振り下ろされる大剣を間一髪のところ回避。桁違いの脅力で叩き付けられた大剣は大地を穿ち、砕けた大地が無数の弾丸となって周囲を蹂躪する。

「ちいつ、何つー馬鹿力だよ」

受けに回らなくて正解だった。あんなものをまともに受け止めたら俺の体は玉兎もろとも粉碎されていただろう。

あれだけの大剣だ、大地に突き刺さればそう簡単には抜けないだろうと踏んでいたが、周囲の大地が砕けるほどの馬鹿力のせいでそれも望み薄。さらにその馬鹿力による剣速の速さも相まって、正面から打ち合うのは自殺行為だ。

そんな思考に耽っていたのがまずかったのか、距離を取ろうと後ろに跳んだ時には、目の前に人の頭ほどもある巨大な拳が迫っていた。トラックに撥ねられた方がまだましではないかと思えるほどの途轍もない衝撃に、声を上げることすら出来ずに吹き飛ばされる。

「かはっ……」

三十メートルは飛ばされただろうか。

霞む視界にこちらへと歩いて来る茨木童子の姿が映る。

幸いにも玉兎を放すことはなかったようだ。

「ぐっ……」

安堵の息を吐きながら体を起こそうとしたところで全身に激痛が走った。

あばらが数本折れているようだし、咄嗟に胸をかばった左腕は感覚すらない。まだ付いていることは見て分かるが、おそらく完全に粉砕されているだろう。ぴくりとも動かない。

それでも気力を振り絞って立ち上がると、大剣を肩に担いで近付いてきた茨木童子が足を止めるのが見えた。

「ほう、我が一撃を受けてまだ立ち上がるか。さすが混血、脆い人間とは違ふようだな」

「う、うるせえよ」

ち、目が霞みやがる。

切れた額から流れる血をいくら拭いても、とめどなく流れる血は容赦なく視界を奪う。

立ち上がったまではいいが、折れたあばらが痛むは左腕の感覚が戻

つてきてやつぱり痛むはでとても戦える状況ではない。

こうしている間にも激痛と出血で刻一刻と体力、集中力が奪われていく。

魔力で代謝を活性化させてはいるものの、そんなものは気休めに過ぎない。

こんなことなら治癒魔法もまじめにやっておけばよかった。と思うが、今更後悔したところで何が変わるわけでもない。

あれをやるしかないのか？

だが、左手がこのざまじゃそれも出来ない。

どうする……。

「何を考えているのか知らんが、ここまでだ。さあ、我と共に来てもらっぞ」

「……この野郎、俺は男だっつてんだろーが」

そう呟いてみるものの、もはや抵抗する力はない。

伸ばされる腕を見遣りながら諦めにも似た感情が湧き上がるのを感じた。

それを押し殺し、必死に打開策を模索する。

ここは奴に従って、左腕が動くようになるのを待つ。そうすれば何とかなるだろう。

しかし、その場合奴の言っていた計画とやらが発動するまでに間に合うかどうか。

この時期にここへ来るということは、目的は霧生の霊脈だろう。そうである以上、奴らの計画が発動した場合、少なくともこの霧生市は壊滅。ここに暮らす多くの命も失われることになるだろう。

それだけは阻止しなければならない。これ以上救える命を失うわけにはいかないのだから。

「はは……、悩む必要なかどこにもないじゃないか」

やる事など既に決まっているのだから。

激痛を堪えて左手を右手首のレザーバンドに翳す。

「リリース・アクセル・イグズイウス」

父さん、ごめん。約束、また破っちまう。許して……くれるかな？

「オーヴァー・ド……っ!？」

爆発、閃光、轟音。

突然の出来事に受け身をとることも出来ず、無様に吹き飛ばされる俺の耳にこちらに来てから聞き慣れてしまった声が聞こえた。

「契約の下、我に応じよ氷の女王」

ディアナ……？

「来たれ、永久の暗闇、終焉の序曲。奪い尽くせ」
『凍てつく世界』
「!」

これは、広範囲殲滅呪文？ディアナの奴、本気だな。当たり前か、いくらディアナといえど、手を抜いて勝てる相手じゃない。

ディアナの詠唱に応じるように巨大な氷柱が出現し、それを起点に大地が、大気が凍りつく。

「終わりだ、ゼロ・インパクト!」

神の意に従い、凍りついた世界が砕け散った。

俺のすぐそばに降り立ったディアナは、油断なく崩壊の中心地を注

視している。

「ぐう、お主は『ダイク・ブリュンヒルド常闇の吸血姫』か。なるほど、流石最古の吸血鬼、
と言ったところか」

「なっ！」

「ふん、貴様こそ、流石大鬼神。この程度では消せんか」

あいつは化け物か？あれだけの大魔法を受けてまだ生きてやがる！

「いやいや、さしもの我も直撃を受けていれば危なかった。ほれ、
この通り、左腕を持っていかれた」

「当たり前だ。一撃で消し飛ばすつもりで打ち込んだのだ。それで
無傷などと、そんなことがあってたまるか」

肩口からなくなった左腕を示しながら笑う茨木童子に、不機嫌さを
隠そうともせず憚然と言い放つ。

「それで？続きをやるのか？やるというなら、望み通り消し去って
やるぞ？」

「いや、ここは退かせてもらおう、いささか興が削がれたのでな。
黒き娘よ、お主は必ず我がものとする。それまで待っておれ」

そう言い残し、茨木童子はその姿を消した。

あの野郎、最後までそれかよ。

「ん？黒き娘？一体何のことだ？」

首をかしげながらそう問いかけるディアナ苦笑で答える。正直体を動かすのも億劫だ。

「おい統也、どうした……っ！おい統也っ、しっかりしろっ」

それに気付いたのか、駆け寄ってくるディアナに心の中で謝りながら、出来る限りの笑みを見せる。

「……………！！」

ディアナが何か叫んでいるが、よく聞こえない。霞む視界に移ったディアナは顔をくしゃくしゃにして、頬には一筋の涙。

ディアナにそんな顔をさせてしまったことが悲しくて、こんな俺の為に涙を流してくれていることが嬉しくて。

俺の顔を覗き込むディアナの頬を撫でる。

ディアナ、ごめん。それから、ありがとう……。

ちゃんと言葉になっていただろうか。

そんなことも分からないまま、俺の意識は闇に落ちた

第十五話

「ごめん。それから、ありがとう……か。まったく、そんなことより自分の心配をしると言うのに。このバカ者が」

あのあと、謝罪と感謝の言葉を残して意識を失った統也を抱えて本部に戻ってから六時間。すでに日付は変わり、一年の最後の日が始まっている。非戦闘要員によって治癒の魔法が施され、治療が済んだものの、統也は一向に目を覚まさない。

それにしても、と思う。

あの上級妖魔、一体何者だ？

あの場では知ったようなことを言ったものの、その正体がさっぱりわからない。

統也があそこまで追い込まれたことや私の最大級の一撃を受けてなお平然としていることから考えて、かなりの大物、それも伝説級の妖魔だろう。それはいい。

それよりも問題なのは、私が割って入る寸前に感じた強大な魔力。おそらく全開の私よりも強いだろうそれからは、妖魔の魔力のような邪なものは感じられなかった。

どちらかと言えば人の物に近い魔力。それが意味するものは一体なんだ……？

「う、うう……」

呻き声に視線を下げると、うつすらと目をあけた統也が間抜けな顔で天井を見上げていた。

「目が覚めたか？」

私の声にこちらを見た統也は、数回瞬きした後飛び起きた。

「ディアナっ、あいつはっ、あいつはどうしたっ」

私の肩を両手で掴み、これでもかと顔を近づける統也に、思わず顔が熱くなる。

直後、計っていたとしか思えないタイミングでドアが開き、菊川の小娘と小僧、その後ろから健吾が顔を覗かせた。

数秒の沈黙。最初に動いたのは私だった。

ドアを、正確にはそこに立つ三人を見て呆然とする統也をベッドに突き飛ばし、平静を装って口を開く。実際のところは心臓がうるさいくらいに早鐘を打っているのだが。

「と、統也、落ち着け。ここは本部の医務室、あの大鬼は退いた」

わずかに声が上がってしまったが、問題はないだろう。

にやつく健吾が余計な事を言い出さないうちに菊川のガキどもを医務室に入れる。そのあとについて入ってきた健吾の腹に一撃入れるのも忘れない。

腹を押さえてもがく健吾を不思議そうに見る二人を備え付けの椅子に座らせ、自身も腰を下ろす。

「統也さん、大丈夫なのかい？」

躊躇いがちに口を開いたのは小娘。確か、氷雨と言ったか。その隣では小僧が俯いている。

ああ、そうか。統也があの大鬼と戦った場所の担当者は、此処にいる二人だったはずだ。それで責任を感じているのだろう。

「ああ、大丈夫みたいだ。体の方は問題ない」

「そうか。……よかった」

統也の言葉にあからさまに安堵の表情を見せる二人。
それを見て微笑む統也になぜか無性に腹が立つ。

「まったく、あの程度の鬼にやられるとは。情けないぞ」

「う、……すまん」

私の辛辣な物言いにガキどもからの視線が険しくなったのを感じるが、そんな物に怖気付くほど落ちぶれてはいない。一睨みで黙らせると、統也にあの鬼について尋ねた。

「それで、あの大鬼は何者だ？何も知らんとは言わせんぞ？」

「ああ、それなら多少は情報を掴んだ。あいつの名は茨木童子。本人が名乗ったんだから間違いないだろう」

「い、茨木童子！？」

声を上げたのは涼と氷雨。退魔の出身であるこいつらが驚くのも無理はない。

茨木童子と言えば今なお語り継がれる大鬼神。退魔の一族にとって最も忌むべき存在の一つなのだから。
どうやら、私の読みは当たったようだ。

「なるほど、それならあの力も納得がいく。それにしても厄介だな……。あいつだけなら大したことはないが、あいつが出てきたということはまず間違いなく酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 ・童子もいるは

ずだ」

「そつだろつな。たぶん、今回の首謀者は酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4・童子だと思う。戦う前に茨木童子が言つてたんだ、計画の発動がどうとかつて。……ディアナ、結界の揺らぎが一番大きくなる時間はずだ？」

「そつだな……」

「それなら、明日の午後八時から十二時までの四時間。その中でも、午後十一時半頃だろう。最新の計測結果からの推測だから、誤差はほとんどないと思うよ」

いつの間に立ち直つたのか、平然と立つ健吾が口を挟む。

もう一撃くれてやろうかと思つたが、おもむろに口を開いた統也に止められた。

「午後九時半からの二時間。向こうも同じ情報を持つているとすれば、この間に大攻勢をかけてくると思う。たぶん、いや、間違いない連中の目的は霧生の霊脈。何をするつもりかは分からないけど、その二時間『大樹』を守り切れればいいはずだ」

「どうしてそう言い切れるんですか？」

涼が首をかしげながら尋ねる。氷雨も同感のようで興味深そうにしている。

統也を見ればじつとこちらを見ていた。私に説明しろと言いたいようだ。

仕方なく軽く咳払いをしてから口を開く。無論、視界の端でにやにやと笑う健悟に制裁を加えることを心に刻んでからだ。

「確かに奴らの物量は圧倒的だが、それも無限というわけではない。本来妖魔というものは自分の意思で人間界に出てくることは出来ない。今のよう大気にマナが満ちているような状況でもなければ、それも上級妖魔に限った話であり、中級以下の妖魔には出来んことだ。おそらく連中の大半は酒&#21534；童子が大気中のマナを使って無理やり呼び出したものだろう。妖魔の性質上、より力のある者に従う。それが召喚者ならなおさらな。つまり連中は酒&#21534；童子の指示で動いているということだ。そうである以上、むやみに攻めてくることは考えにくい。来ないなら来ない、来るなら……総力戦だ」

わかったか？と二人に視線を向けると、涼は得心がいったように頷き、氷雨は首をひねっている。

「なるほど、そういうことが……」

「……涼、今ので分かったのかい？」

「うん、大体はね。……姉さん、分からなかったの？」

「ま、まさか、簡単じゃないか。うん、はははは……」

涼の疑わしげな眼に冷や汗を流しながら乾いた笑い声を上げる氷雨を見て確信する。

絶対分かってない。

統也もその様子に苦笑している。健吾も同様だ。

「それにしても……。健吾、今までにこんなことがあったか？私の知る限りではこれほど組織的な襲撃はなかったはずだが……」

「そうだね、僕も初めてだよ。……っと、悪い」

私の疑問に頷いた健吾は、携帯の呼び出しに医務室から出て行く。しばらくして戻ってくると、私に学園長室へ行くように言い、三人には今日は休むように伝えて去って行った。

わずかに焦りを見せるその後ろ姿に違和感を覚え、早々に医務室を出て学園長室に向かう。

「ディアナ、もういいのか？」

「ふん、あれだけ焦りを見せておいて良く言う」

困ったな、と頬を掻きながら苦笑する健吾を促して学園長室へと足を向ける。

健吾は魔法協会の幹部クラスの中では最年少だが、それでも周囲にいらぬ動揺を与えぬよう本心を隠す術には長けている。その健吾をして周囲に焦燥を悟らせるような振る舞いをさせる出来事とはどれほどのものなのか。

不穏なものを感じながら足を踏み入れた学園長室で私たちを待っていたのは爺一人。

たった三人？

健吾を動揺させるほどの出来事を話すのにたった三人だと？

怪訝に思いながらも手近なソファに身を沈める。

「統也君の様子はどうかの？」

「身体、精神ともに問題はありません。今頃は氷雨君たちと話しているでしょう」

「そうか、それは良かった」

「爺、さっさと本題に入ったらどうだ？」

痺れを切らしてそう切り出すと、爺は楽しそうに笑う。

「おお、これはすまんだな。では、本題に入るとしよう。ディアナも統也君のところへ行きたいじゃろうからの」

「う、うるさいっ！」

叫んでから後悔する。これでは爺の言ったことを肯定しているようではないか。

「ほっほっほ、まあ落ち着け。……それで、本題というのはじゃな、六時間ほど前、B 27エリアにて確認された魔力についてじゃ」

B 27エリアの魔力。間違いない、あの時のものだ。

たったそれだけの言葉で、先程までのふざけた空気が霧散した。

健吾が体を強張らせていることに気が付いたが、今はそれどころではない。

「計測された魔力のパターンを照合した結果、その魔力を発した人物が特定できた」

魔力を発した人物？

そんなものは決まっているだろう。あの場には統也と茨木童子しかいなかった……！？

ま、まさか、そんなはずはっ！

「その人物の名は……」

やめろ、その先は……！

「鷹司統也じゃ」

「バカなっ！そんなはずはないっ、統也にあれほどの魔力はないんだぞ！？」

「じゃが、事実じゃ。計測された魔力と統也君の魔力。二つの魔力パターンが完全に一致したんじゃ、疑う余地などありません」

そんな……、あいつが、統也があれほどの魔力を……？

「ディアナ、お主に鷹司統也の監視を命ずる」

「学園長、それはっ……」

「何、することは今までと変わらん。じゃが、もし不審な動きを見せた時は……」

学園長室での爺の言葉が耳から離れない。頭の中をぐるぐる回って木霊する。

『もし不審な動きを見せた時は……処分せよ』

『見せた時は……処分せよ』

処分。その言葉の示す意味はただ一つ。

それは嫌というほどわかりきっている。この霧生において、その手の仕事を最も多くこなしてきたのは、ほかならぬ自分なのだから。判断としては間違っていない、いや、むしろ、正しい。

あれほどの魔力だ、それを解放した統也の存在は、ただそれだけで脅威だ。処分できるのは私以外には存在しない。それは分かっているのだ。

それでも、出来ない。出来る訳がない。

統也は私を家族だと言ってくれた。最古の吸血鬼として忌み嫌われた私を、無条件に受け入れてくれた。一人にしないと約束してくれた。

その統也をこの手で処分することなど、私には出来ない。

私は弱くなった。鷹司統也という一人の男とであったことで、どうしようもなく弱くなってしまったのだ。

足を止める。見上げた先には医務室のプレート。

室内に感じられる気配は一つ。まずまずの魔力を内包したそれは間違いなく統也のもの。

あの時は気付かなかったが、確かにあの強大な魔力は統也の魔力とまったくの同一。少なくとも、知覚出来る範囲での違いはない。

軽く頭を振って思考を切り替え、ドアノブに手を伸ばす。

そこで異変に気が付いた。

これは、人払いの結果？

気付かれないように注意しながら結界に干渉し、室内の様子を覗く。明かりはついておらず、室内は闇に沈んでいる。目を凝らすと、中央に置かれたベッドの上に蹲る人影を見つけた。統也？

耳を澄ませば、聞こえてきたのはくぐもった苦悶の声。

それに気付いた時には、結界を相殺し室内に飛び込んでいた。

「おいっ、どうした……っ！」

その背中に触れてぞっとした。

熱い。

こちらへ来てすぐのころに『楽園』内で倒れた時同様、信じられないほどの熱を持っている。

馬鹿な、魔力は十分にある。こんなことになるはずがない。いったい何が起こっているっ！？

「ちっ、うろたえている場合かつ」

とにかく、なんとかして体温を下げなければならない。

原因は分らないがこれだけの高熱だ、放っておけばまずいことになる。

視線を巡らせれば、部屋の隅に小さな冷蔵庫が備え付けられていた。あの中には氷か何か、体を冷やせるものが入っているはずだ。そう考え立ち上がるうとしたところで腕を掴まれた。

「統也、少し待っている。体温が下がれば少しは楽になるはずだ」

そう言って手を放させようとするが、外れない。

決して強く掴まれているわけではないのだが、どれほど力を入れても指の一本すら外すことが出来ない。

「だ、大丈夫……だから。しばらく……すれば……収まる……」

息も絶え絶え、と言った様子で、けれど強い意志を込めて言う統也に、仕方なく椅子に腰を下ろす。

統也の口振りから察するに、この手の症状が出たのは初めてではないのだろう。実際、この部屋に入った時に比べて、僅かではあるが落ち着いてきているように見える。もっとも、統也がそれを演じていなければ、ということ为前提としての話ではあるのだが。

それにしても、といまだに荒い呼吸を繰り返す統也を眺めながら思

う。

こいつに関しては分からないことが多すぎる。

あの時観測された膨大な魔力然り、今のこの状況然り。

落ち着いたら一度問い詰めてみる必要があるだろう。元よりそのつもりでここへ来たのだ。

そのことに思い当って頭を抱えなくなった。

いくら突然の出来事だったとはいえ、一時でも本来の目的を忘れていたことが、それほどまでに動揺してしまったことが情けない。

この男が目の前に現れてからというもの、調子を狂わされてばかりだ。

らしくない。かつて、闇の眷族『ダーク・ブリュンヒルド常闇の吸血姫』として怖れられた、現存する最古の吸血鬼たる、このディアナ・K・ブリュンヒルデともあるう者が。本当にらしくない。

しかし、同時に思う。こんな生活も悪くはないと。

統也がこの世界に現れてから二週間。たった二週間だ。それでも統也とヴァルと自分、この二人と一体での生活は、そう思わせるのに十分過ぎるものだった。ともすれば、この十数年間よりも遙かに濃密だったと思えるほどに。

口元が緩むのを感じながら目を閉じれば、瞼の裏にこの二週間で目にした様々な光景が甦る。

すべての始まりとなった夜の森での邂逅（出会い）。そこで見せた桁外れの戦闘力。一転して困ったように笑いながらヴァルと戯れる姿。料理を口にする私を見つめる不安そうな顔。まあまあだと言ってやれば無邪気な笑顔。そして、時折見せる穏やかな微笑。

思い出して、かぁと顔が熱くなるのを感じた。あわてて記憶の反芻をやめ、目を開く。

視界いっぱいに映ったのは、俯き加減の私の顔を覗き込む何とも奇妙な表情を浮かべた統也の顔。

「……何やってんだ？」

見られたっ！？

何とか誤魔化そうと口を開くが、こんな時に限って言葉が見つからない。

中途半端に口を開いたまま、ただ時間だけが過ぎていく。

その気まずい沈黙を破ったのは統也の方だった。

「ま、いいや。で……どうしてここに？学園長に呼ばれたんじゃないのか？」

話題を変えてくれた統也に、胸中でひそかに感謝。

「そ、それはもう終わった。……ここに来たのは、聞きたいことがあるからだ」

若干の間をとり、意識を魔法師『ダーク・ブリコンヒルド常闇の吸血姫』としてのそれに改変する。

それによつて『こちら側』の問題だと気付いたのだらう、統也も表情を引き締めた。

「単刀直入に聞く。お前は一体何者だ？」

「……」

その問いに対する答えは沈黙。一見無反応のようにも見えるが、ほんの一瞬、表情が強張ったのに気付いた。

やはり、こいつは何かを隠している。

「今から六時間前、いや、もう七時間前か、お前が酒&#21534；童子と対峙したエリアにおいて、莫大な魔力が観測さ

れた。その総量はおよそ五万」

ここまで語ってもなお、すべての感情を排したかのような無表情に変化はない。否、努めてそうしている、と言った方が正しいか。しかしそれも無駄なこと。眼光にそれまで以上の力を込めて統也を見据える。

そして、ジョーカーを切った。

「観測された魔力とお前の魔力、その魔力パターンが一致した。…あれをやったのはお前だな、統也」

問いかけではなく確認。

私とてにわかには信じられなかったが、これは事実。確定事項だ。覆ることは、無い。

統也もその考えに至ったのだろう。ふっと表情を和らげると、困ったように苦笑した。

「はあ、こっちの魔的技術を甘く見てたな、まさかあの一瞬でそこまで分かるなんて。……ああ、そうだ。あれをやったのは俺だよ、ディアナ」

「何故黙っていた」

「聞かれなかったから」

「質問を変えよう、なぜあれほどの魔力を隠していた。お前の目的はなんだ」

「……」

固く口を閉ざしたまま、統也は答えようとしない。

その態度に業を煮やし実力行使に出ようかと考え始めた頃、ようやく統也が口を開いた。

「俺は、純血の人間じゃない」

その言葉に耳を疑った。しかし、同時に納得している自分がいる。

「俺は、人外と人の間に生まれた混血だ」

統也の言うことが事実だとすれば、あの時観測された魔力にも説明がつく。

人間という種は本来脆弱な存在だ。

私たち吸血鬼のような超越種や妖魔と言った人外の存在は、個体差こそあれ、もともとその体にある程度の魔力を秘めている。もちろんそれは人間も同じだが、一般的な人間の魔力は下級妖魔にさえ大きく劣る。だからこそ、人の身でありながら大きな魔力を宿す者が魔法師などと呼ばれるのだ。

それでも、人間と人外の間には越えられない壁がある。

どれだけ魔力量が多い人間であっても、その上限はせいぜい三万程度。

それに対して、あの時統也が発した魔力から算出された潜在魔力量はおよそ五万。どう考えても人間の範疇を越えている。

統也が人間であるという前提のもとで考えれば異常な数値でも、人外との混血だとすれば充分有り得る話だ。もちろん、驚嘆に値するものではあるのだが……。

だが、そこで疑問が生じる。

統也が混血だとするなら、今まで私が気付けなかったことがおかしいのだ。

魔力探査はあまり得意ではないが、それでも人間と比較すればその

制度は遙かに高い。詳しい種族の特定は出来なくとも、混血であるということくらいは分かる。そのはずなのだ。

にもかかわらず、私は統也が生粋の人間であると信じて疑わなかった。

そこであることを思い出す。

いつだったか、夜の森で菊川の小僧が言った言葉。

『鷹司統也からは人外の臭いがする』

いや、あれをあの場合で言ったのは小娘の方だったか。まあ、そんなことはどうでもいい。

一つだけはつきりしていることは、統也が現れて間もないころにはすでに材料は与えられていたということ。

あまりに無様。あまりに滑稽。

己の不甲斐無さを自覚し頭を抱える。

「ディアナも知ってるだろうけど、人間という存在は、妖魔や超越種に比べてその概念が遙かに軽い」

そんな私に気付くことなく統也は続ける。

「本来ならそうそう起こることじゃないけど、俺の場合、人外である父親の存在が持つ概念が重すぎたんだ。それを放っておけば、鷹司統也という個人を形成する概念のうち、人外としての概念が人間としての概念を押し潰してしまう。そうなったら最後、究極の一たる万物の根源『アカシック・レコード』に記録された『鷹司統也は混血である』という記録と、そこに存在する『鷹司統也』との間に矛盾が生じる。その結果として、混血として生きてきた『俺』という人格に世界の修正力が働き、俺の自我は崩壊。理性という鎖を失った『鷹司統也』は、本能のままに破壊と殺戮の化身と化す。それ

を防ぐための拘束具が、この腕輪なんだ」

右手首にはめられた革の腕輪を左手で握りながら言う統也の横顔は、穏やかな微笑。

「これには父さんの魔力が込められてる。その力によって俺の中に潜む人外の血を封印し、浸食を防いでるんだ。つまり今の俺は、ちよつと魔力の多いだけのただの人間、つてことだな。あの時はかなり追いつめられてたからさ、仕方なく封印を解除しようとしたんだ。観測されたのは、たぶんその時に溢れ出した魔力だと思う」

なるほど、人外の血を封印していたのならば、私が気付けなかったのも無理はない。

血の薄まった統也でさえあれほどの魔力を秘めているのだ、その父親となればそれこそ桁外れの魔力を持っていたのだろう。

そんな、文字通り次元の違う魔法師、いや、魔術師の施した封印だ。本人から聞かされなければ誰も気付けないだろう。

そこでもう一つの疑問が浮かぶ。

「もう一つ聞いていいか？」

「さっきのこと、だろ？」

間髪入れず帰ってきた確認の声に頷く。

「あれは、何て言うか……魔力の暴走、かな」

「魔力の暴走だと？……なるほど、そういうことか。封印を施した状態のお前はあくまで普通の人間。そこに開放しかけた莫大な魔力が取り残されたために、行き場を失った魔力が体内で暴走した、と

いうわけか……」

「まあ、そんな感じだな」

その言葉を聞き、思考に埋没した私は気付かなかった。それに続くかすかな眩きに。

それを聞いていれば、もしかしたら気が付いたかもしれない。

苦痛に苛まれながら統也が発した言葉の本当の意味に。

統也の危うさの正体に…。

第十六話

明けて翌十二月三十一日。

人々が目前に迫った新年に思いを馳せる中、重々しい空気に包まれた集団が居た。

霧生防衛戦において魔法師側の主力とも言える各方面の責任者たちだ。

日本魔法協会本部の一室に集まった彼らの表情は一様に暗い。

幾多の戦いを潜り抜けてきた歴戦の猛者である彼らをこれほどまでに恐れさせる存在。

伝説級の大鬼神、酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子。

その腹心、茨木童子。

彼ら脳裏に浮かぶのは、斬られ、砕かれ、蹂躪される己の姿。何度試みても二柱の大鬼神と相対した自身を待つのは『死』という事実のみ。

最後に立っているのは朱に染まった大地を闊歩する異形だった。

そしてそれは、こうして彼らの表層意識を覗き見ている自分も同じこと。

一対一なら勝つ自信はある。しかし、二柱が連携して挑んできたら？ 負ける気はしないが、勝てる気もしない。時間を稼ぐのが精一杯だろう。

隣に座る統也を見遣る。

昨日の戦闘による負傷は完治しており、十分な休養のおかげもあってか、調子は良さそうだ。

目を閉じ、まるで瞑想でもしているかのような横顔から連想するのは、磨き上げられた鏡の如き水面。しかし、水面下では闘志の炎が燃え盛っているような静かな気迫が漲っている。

おそらく脳内では、今まさに二柱の大鬼神を相手取り戦っているだろう。

その場に私はいるのだろうか？
ふと、そんな考えがよぎる。

「報告は以上です」

健吾の声に思考を止める。

腰を下ろした健吾と入れ替わるように爺が立ち上がった。

「聞いての通り、今回の防衛戦は例年になく厳しいものになるじゃろう。じゃが、わしらは負けるわけにはいかん。今日一日、なんとしても守り切るのじゃ、明日という日を迎えるために」

その言葉に全員の士気が上がるのを感じた。

この場に集まった者は皆、理解しているのだ。

霧生の霊脈、その起点となる『大樹』が妖魔の手に渡った時、世界にどれほどの被害をもたらすのかを。そして、霊脈の上に広がるこの霧生の街が真っ先にその被害を受けることを。

例外もあるだろうが、防衛戦に参加する者の大半はこの街に愛着を持っている。そして、そこには守りたい人達がいる。

だから負けられない。負けるわけにはいかない。

こうして、史上最悪の防衛戦が本当の意味で幕を上げた。

「そろそろだな」

室内に設置された時計を見ながら呟くディアナに、ああ、とだけ返事を返す。

時刻は午後九時を少し回ったあたり。俺の予想が正しければあと三十分足らずで大攻勢が始まるはずだ。

もつとも、ここまでの推移から考えればほぼ確実だろうが。

立ち上がり、傍らに置いていた外套を纏う。

それだけ、たったそれだけの動作でこの身は万物切り裂く刃となる。

「いくのか？」

「ああ、まだ時間はあるけど、一応な」

見上げてくるディアナにそう答えると、ディアナもまた立ち上がった。

視線を合わせ、頷きをかわす。

酒&#21534：童子と茨木童子。伝説級の大鬼神。

二体の大鬼を相手にして勝てるかどうかは分らない。

今のままでは無理だろう。もしかしたら、この身に秘められた力を解放しても勝てないかもしれない。

しかし、そんなことは関係ない。

俺は誓ったのだ。

守ると。ディアナや氷雨、涼。その身に宿された力のせいで『こちら側』に関わらざるを得なかった子供たちが、平穏に暮らせるようにするのだと。

ならばすべきことはただ一つ。

この手が血に塗れても。この命が燃え尽きようとも。『俺』という存在が消え去ろうとも。

奴らはこの手で倒す。

それが『鷹司統也』という存在に許された、ただ一つの存在理由なのだから。

「姉さん、そろそろみたいだよ」

涼の声に無駄か、と思いながらも周囲の魔力を探る。

そしてやめておけばよかったと少し後悔した。

魔力探查の苦手な私でもわかる。微弱な、けれど膨大な数の魔力が近付いて来るのが。

正確な距離こそわからないが、その数が今までに相手にしたどんな集団よりも多いことは明白だ。

「こいつを持ってきて正解だったね」

左手を腰の後ろに回すと、滑らかな木の手触り。あの日、燃え盛る里から持ち出せた唯一の品。今は亡き父が、この世を去る数日前にくれた小太刀だ。

医務室で統也さんの話を聞いた後に自室のクローゼットから引っ張り出したこれは、一族に伝わる霊剣のうちの一つ。

霊刀『白光』。

涼の持つ霊刀『白夜』と並び一族の有力者が持つべきであるはずのこれを、なぜ私に持たせたのか。父の真意のほどはわからない。しかし、一つだけ確かなことがある。

今この場において、弟と並んで最も頼りになるのがこれだということ。

右手にデザートイーグル、左手に白光を携え前方を見据える。

見れば、隣に立つ涼も白夜を正眼に構えている。

木々の隙間から無数の妖魔が見え始めたころ、白光に魔力を流し込む。

それに呼応して、その名が示す通りの輝きを発する白光を一薙ぎ。

白銀の斬撃が妖魔の先頭集団を蹴散らすのを確認して打って出る。

駆け出した私のすぐそばを白夜から白光と同様に繰り出された斬撃が駆け抜け、数十体の妖魔を消し飛ばした。

耳につけたイヤホンからは、各地で戦闘が始まったという報告が聞こえる。

戦闘の一体を白光で斬り伏せ、その後続をデザートイーグルで穿つ。昨日の二の舞にならないよう、可能な限り弾を温存しながら迫りく

る妖魔の大群を屠る。

正面の鬼を一閃し、上空から襲いかかってきた鳥族を撃つ。

手近な妖魔を片付け、次のターゲットを探そうと視線を巡らせる。

そこで悪寒を感じた。

辺りに蠢く妖魔たちとは比べ物にならない、濃密な魔力の気配。

涼の様子を窺えば、同様に手を止め、険しい表情で周囲を警戒していた。

周囲を取り囲んでいた妖魔たちも、一様に距離を取っている

「あの黒き娘や『ダイク・ブリュンヒルト常闇の吸血姫』の他にも、これほどの使い手が居たとは。やはり人間界は面白い。これもあの御方のおかげか……。
感謝せねばならんな」

愉悦を隠しきれない低い声が響く。

木々がざわめき、風が啼く。

姿を現したのは、三メートルを超える大鬼。

「お初にお目にかかる。我が名は酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子。
突然で悪いが、手合わせ願う」

名乗りと共に吹き荒れる爆発的な魔力に肌が粟立つ。

「な、なんだよ、こいつ……」

一歩、視界の端に映る涼が後退る。

すぐさま一歩踏み出したものの、目の前の鬼に気圧されていることは明らかだ。

かく言う私自身、膝は震え少しでも気を抜けば二度と立ち上がることは出来ないだろう。

左手の白光がかちゃかちゃとうるさいくらいに音を立て、体の震え

を如実に示している。

退魔師としては落ちこぼれである私ですらこれなのだ、遙かに感覚の鋭い涼が感じている恐怖はこれの比ではないだろう。

「これが、伝説級の大鬼神の力が……。まいったね、圧倒的だよ……」

私程度では足止めにすらならないだろう。それでも諦めるわけにはいかない。

統也さんかブリュンヒルデさんが来ればなんとかなるはずだ。

その時間が稼げればそれでいい。

見た限り、酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 ・童子というのは伝承とは違い生粋の武人らしい。ならばやりようはある。

「涼、本部に連絡を。統也さんかブリュンヒルデさん、森崎先生あたりに来てもらえるようにするんだ」

「わ、わかった」

携帯を取り出す涼を庇うように、前に出る。

不思議と震えは止まっていた。

目を閉じ、深く息を吸い、細く吐き出す。

耳障りなノイズが消え去り、集中力が極限まで高まったのを確認して目を開く。

蒼く染まった視界に映る酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 ・童子。その顔に驚きの色が浮かぶ。

「ほう……実に面白い、これほどの魔眼は久しく見ておらん。これは楽しめそうだ」

魔眼？何のことだろうか。

「姉さん、統也さんとブリュンヒルデが来てくれるらしい」

「それじゃ、それまでの時間を稼ぐことにしようか」

気になるが、今はそれどころではない。

魔力切れでただの業物と化した百光を鞘に戻し、もう一丁のデザートイーグルを手にする。

デザートイーグルの装弾数は七発。現在の持ち弾は右に三、左に七、予備のマガジンが五本の計四十五。退魔術式を施した五十口径弾とはいえ、大したダメージは与えられないだろう。出来ることと言えば、着弾の衝撃で牽制することくらいか。

いや、それすらあやしい。何せ相手は三メートルを超える巨体。そのうえ、この地球上に存在するどんな生命体よりも頑強な肉体を誇っているのだ。自動式拳銃としては最強クラスの威力を持つデザートイーグルも結局は対人用の銃器に過ぎない。化け物と呼ぶに相応しいこの大鬼神にどこまで通用するか。

魔力量の少ないこの身が恨めしい。せめて一般の魔法師程度の魔力があれば、白光が使えるのだが……。

とめどない思考を打ち切り、正面を見据える。

その先に威風堂々と立つ酒& amp; #21534・童子は攻撃に移る気配を見せない。

こちらの様子を窺っているのか、あるいは……。

「そんな必要もないのか……」

口に出してみても何も変わらない。

白夜を構え前に出る涼に前衛を任せ、後退。直撃を確信し、引き金を絞った。

「どけっ！」

目の前の妖魔を純粹な魔力の塊で吹き飛ばし、開いた道を駆け抜ける。

今は一秒の時間も惜しい。

つい先程出現した巨大な魔力。昨日対峙した茨木童子をも遙かに上回る魔力は、疑うまでもなく、妖魔の首領、大鬼神酒吞；童子のそれだ。

そしてその傍にある二つの魔力。氷雨と涼、あのエリアを担当する二人だ。

「くっ」

自分の浅はかな行動に腹が立つ。

二人の実力は確かだが、いかんせん経験が足りない。経験さえあれば、倒すことは出来なくとも時間を稼ぐ方法はいくらでもある。だからこそ、俺は二人の担当エリアの近くに配置されていたのだ。

本来ならば、すでに二人の援護に入れていたはず。にもかかわらず俺は今、こうして走っている。それはなぜか？

予想を上回る中級妖魔の出現により、各エリアが苦戦。そのために俺やディアナを含めた遊撃隊は支援に追われたのだ。

つまりは陽動。

一部の防衛線の崩壊が即、敗北に繋がる俺たちに対して、これ以上無く効果的な戦術だ。事実、主力と言える者は皆、件のエリアから引き離されてしまっている。

酒吞；童子の知略を侮っていたがゆえの失態。茨木童子の存在が確認されていないことも気になる。万が一、二体の合流を許してしまえば目も当てられない。数人がかりで挑めば倒せないわけではないが、そうなれば各エリアの機能が低下、結果的

に防衛線は崩壊するだろう。

それを防ぐためにも、一刻も早く酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 ・童子を倒さなければならぬ。それが二人を救うことにもつながる。走る俺を迎撃しようと腕を振り上げる鬼をすれ違いざまに両断。足止めのつもりか、行く手を遮る妖魔の壁を強引にこじ開ける。それによって出来た僅かな隙間が閉ざされるより早く瞬動を発動。一息に駆け抜けた。

第十七話

重い銃声。鈍い破砕音。そして荒い呼吸の音。それだけがこの空間を支配していた。

もつとも、息が上がっているのは私と涼だけ。負わされたダメージも相まって、こちらの動きはかなり鈍ってきている。

対する酒 & # 2 1 5 3 4 : 童子は無傷。呼吸も乱れておらず、その動きも一切鈍っていない。

「くう、これは……まずいね」

眩き、齒噛みする。

最初こそは、劣勢ながらも何とか戦えていたのだ。

涼がかく乱し、体制が崩れたところを私が撃つ。それによって作られた隙を狙って涼が斬り込む。これ繰り返して、ダメージを与えることは出来なくても、こちらにもダメージを受けることなく済んでいた。しかし、疲労が蓄積し動きが鈍ったところを衝かれた。そこからは一方的だ。

辛くも致命傷は避けているが、涼も私も満身創痍。

このままでは押し切られる。

これまでに感じたことのない死の恐怖が、じわりじわりと忍び寄っていた。

だからだろうか。

淡い月光に照らされた森を染め上げた紅蓮の炎が、とても神聖なものに見えたのは。

「悪い、遅くなった」

私たちと酒 & # 2 1 5 3 4 : 童子の間に降り立った黒衣の

青年。

燃え盛る炎の輝きを受けて煌く日本刀を携え、渦巻く熱風に長い黒髪を靡かせるその姿は、天界より降り立った天使のようで。対峙する大鬼神の威圧感とは明らかに異なる、けれど、決して劣らぬ静謐な存在感に満ちていた。

「ほお、汝が茨木童子の言っていた黒き娘か。なるほど、これは確かに面白い」

「うるせえ、こっちは面白くも何ともねえんだよ。それから、茨木童子に伝えとけ、俺は女じゃねえ」

炎の渦の中から姿を現した酒&#21534・童子の言葉に、統也さんは不機嫌そうに答える。

いや、不機嫌なんてものじゃない。明らかに怒っている。それも、かなり本気で。

確かに、知らなければ女の人にも見えるか。

などとその状況にそぐわない思考を始めた自分に苦笑する。

現金なものだ。つい先程まで死の恐怖に怯えていたというのに、統也さんが現れた途端にこれほどの余裕が生まれているのだから。ふと見れば、涼の表情からも焦りの色は消えている。

「氷雨、涼、まだ動けるか？」

「なんとかね。矢面に立つのは遠慮したいけど」

いつの間にかすぐ隣まで後退していた統也さんの声に驚きながらも、なんとかそれを隠して正直に答える。

上等だ、と笑う統也さんに消耗度合いを伝えたと、統也さんは何を思ったか私の左手を取った。突然のことに固まっていると、統也さ

んは大地に突き立てた日本刀の柄に近い部分で右手の親指を切り、その地で私の左手甲に何かを書き始める。

「簡易的なラインを繋いだ。これで、その小太刀も使えるはずだ」

その言葉に左手甲をよく見ると、小さな魔法陣のようなものが描かれている。それと同時に魔力がどこから流れ込んでくるのを感じた。確かにこれなら白光も使えるだろう。

「俺が前に出る。涼、お前もだ。氷雨は後方から援護。俺が隙を作るから、二人はそこに全力の一撃を叩き込め。いくらあいつが伝説級の大鬼神だって言っても、まともに食らえばただじゃ済まないはずだ」

「でも、それじゃあ……」

抗議の声を上げる涼を制し、頷く。それを見た涼も渋々頷いた。涼の言いたいことも分かる。

確かに統也さんは強い。私たちとは比較にならないほどに。それでも、伝説級の大鬼神という化け物正面切って戦えば、最悪死に至ることもあり得る。むしろその可能性の方が高いだろう。にもかかわらず、統也さんは選んだ。

自分が生き残ることよりも、酒&#21534；童子を倒すことを最優先とした行動を。

ならば、私たちに出来ることはただ一つ。

「涼、最初の一撃で決めるよ」

酒&#21534；童子に歩み寄っていく統也さんの背中を見ながら、傍らに立つ涼に言う。

「初めからそのつもりだよ」

力強く頷き白夜を構える涼に倣い、右のデザートイーグルに最後の予備弾倉を装着し、初弾を装填。左手に握った白光に黒天使から送られた魔力を込め始めた。

「待たせたな」

「何、汝と戦えると思えば、この程度待ったうちに入らぬ」

「そいつはどうも。……それじゃ、始めますか」

「応。我が名は酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 ; 童子。黒き娘よ、いざ」
爆発的に巨大化した魔力と共に振るわれる剛腕をかわしざま、そのわき腹に魔力を上乗せした掌底を叩き込む。

「俺は女じゃねえって、言ってるだろうがっ」

「ぬう！」

わずかに揺らいだ上体を立て直す暇を与えることなく追撃。懷に潜り込み、がら空きの胸にもう一発叩き込む。その衝撃が鋼のような表皮を抜け、体内で暴れまわるの確かな手応えとして感じた。体がくの字に折れ、間合いに飛び込んできた顎を渾身の力で蹴り上げる。

「がはっ」

仰け反った酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子に追い打ちをかけようとして中断。直後、すさまじい衝撃に吹き飛ばされた。

「ぐっ」

途轍もない怪力。咄嗟に交差させた両腕が悲鳴を上げている。自ら後方に跳んだからこの程度で済んだものの、一瞬でも反応が遅れていればそれで終わっていただろう。とはいえ防いだことに変わりない。そして、それが数少ない好機を生み出したことも。

「今だ、叩き込めえっ！」

空中で体勢を整えながら叫ぶ。

仰け反りながら俺を殴り飛ばした酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子は、その体勢を完全に崩している。

抗いようのない、致命的な隙。

大氣中に漂うマナのざわめきを感じながら着地すると、二つの斬撃が放たれたのは同時だった。

閃光、爆音、衝撃。

巻き上げられた土煙が晴れた時、爆発の中心にあったのは、膝をつき大小無数の裂傷を負った酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子の姿だった。

「ぐう……。流石に、やるな……。しかし、我らの勝ちだ……」

その顔の浮かぶのは、驚愕でも悔恨でもなく不敵な笑み。

「黒き娘たちよ、世界樹の袂にて待つ。止められるなら止めてみよ」

酒&#21534・童子はそう言い残すと、問い詰める間もなく周囲の妖魔共々その姿を消した。

「倒した、のかい？」

戸惑うように言う氷雨に、それはないだろうと返す。

「確かにかなりの深手は負わせたみたいだけど、倒しきるまでには至ってないはずだ。それに、最後の言葉も気になる……」

「世界樹の袂にて待つ……ですか？」

涼の言葉に頷き、本部に連絡しようと携帯を取り出したところで、タイミングよく着信が入った。森崎さんだ。

「もしもし。ちょうどよかった、今」

『統也君、報告は後で聞くよ。ちょっとまずいことになってね』

「まずいこと、ですか？」

『ああ。……単刀直入に言う、『大樹』が茨木童子に占拠された』

「なっ!？」

『どうやら酒&#21534・童子も陽動だったようだ。現に、酒&#21534・童子が茨木童子と合流したという報告もある。周辺に展開していた妖魔も一緒だ。君たちもすぐに向かってくれ』

「分かりましたっ」

二重の陽動とは、やってくれる。

まさか古の兵法家、孫子の教えを身をもって知ることになるとは。

「どうしたんだい？」

「説明はあとだ、『大樹』に急ぐぞ。『大樹』が奴らに占拠された」

そこはまさに異界だった。

大気に満ちる醜悪な気配。無数に蠢く妖魔の群れ。霧生の象徴たる『大樹』はもはや、妖魔たちに蹂躪される場所となっていた。

いたるところで妖魔と人の戦闘が展開され、神代の戦争を彷彿とさせる。

「まったく、きりがないね」

「そうばやくなって」

眼前の妖魔を斬り伏せ、後続の一体に銃弾を叩き込みながら言う氷雨をたしなめつつ、数体の妖魔をまとめて薙ぎ払う。

「だけど、これじゃ進めませんよ」

野太刀を巧みに操り、群がる妖魔を斬り捨てる涼の言葉に声には出さず同意する。

現在の時刻は午後十一時過ぎ。揺らぎが最も大きくなるまであと三十分程しかない。

たった三十分の間に『大樹』へとたどり着き、今まさに行われてい

る儀式を阻止しなければならぬのだ。
こうしている間にも徐々に高まっていく『大樹』の魔力が焦燥を煽る。

「俺が道を開く。一気に抜けるぞ」

そう言って詠唱を始めようとした時、我先にと殺到していた妖魔たちの動きが変わった。

津波の前の小波のように、周囲の妖魔が一斉に後退。僅かに遅れて『大樹』方向の妖魔の壁が、さながらモーセの渡った葦の海のごとく左右に割れた。

「その必要はなかったみたいだね」

「みたいだね」

「……二人とも、何でそんなに落ち着いてられるんだよ……」

「何で、ってこじ開ける必要がなくなったんだからいいんじゃないか？」

「それはそうですね……。畏だったらどうするんですか」

「その時は……」

「その時に考えよう」

姉の言葉が追い打ちになったのか、がっくりと肩を落とす涼。

「それに、儀式を止めれば俺達の勝ちなんだ。時間も人手も足りない、魔力だって無限じゃない。迷う必要なんかないだろ。俺たちに

は、他に選択肢がないんだ。向こうが通してくれるって言うなら、有り難く通してもらおう」

「分かった、分かりましたよ。確かに統也さんの言うとおりですから」

仕方ありませんね、と肩をすくめる涼に苦笑い。

「それじゃ、行こうか」

氷雨の言葉に頷き、目の前に続く道へと駆け出した。

第十八話

「やはりお前達もか、統也」

妖魔たちによつて作られた道の先、開けた場所に出たところでその声をかけられた。

「ディアナ、お前もいたのか」

見ると、向かつて右手、五メートルほど離れたところに、腕を組み不機嫌そうに佇むディアナが居た。

「それにしても、一体何のつもりなんだか」

「そんなこと私が知るか。ただ一つ言えることは、私たちが『呼ばれた』ということだ。なにしろ連中と直接戦つたのはここにいる四人だけだからな」

「そんな馬鹿なこと……」

言いかけて、涼は言葉を切った。

そう、決してあり得ない考えではないのだ。

酒& a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子が姿を消す直前の一言。

「『世界樹』の袂で待つ。あいつはそう言った。『世界樹』と『大樹』が繋がらなかったからあの時は分からなかったけど、確かに『世界樹』って呼び方も分からなくはない」

目の前にそびえる『大樹』を見上げながら言う。

「酒& a m p ; # 2 1 5 3 4 ; 童子がそう言ったのか？ならば間違いないだろうな。今でこそ『大樹』と呼ばれているが、昔は『世界樹』と呼ばれていた時期もあったはずだ」

つまり、俺達は酒& a m p ; # 2 1 5 3 4 ; 当時と茨木童子、二柱の大鬼神の意思によつてここに招かれた、ということだ。

「よく来たな、常闇、黒き娘、若き退魔の子らよ」

「勝負の続きを、いざ」

『大樹』の手前、俺達から二十メートルほど離れた空間が歪み、そこから滲みだすように姿を見せた酒& a m p ; # 2 1 5 3 4 ; 童子と茨木童子。

理不尽なことに、以前与えた傷は跡形もなく消えていた。ディアナが消し飛ばした茨木童子の左腕も、しっかりとそこに存在している。

「よく来たも何もないだろう」

「まったくだ、お前らが呼んだんだろ。それに何度も言ってるが、俺は女じゃねえ」

今すぐにでも戦わんとする茨木童子には言葉を返さず、玉兎を呼び出すことで答えとする。ディアナは相変わらず腕を組んでいるが、魔力が活性化しているのが分かる。

「氷雨、涼、お前らは下がってろ」

「巻き添えを食らっても知らんぞ」

視線は正面に向けたまま、背後に控える二人にそう声をかける。口調こそぶつきらばうだが、ディアナも同様にまだ若い二人を気遣っている。

「茨木童子、常闇は任せたぞ。我は黒き娘をやる」

「相分かった。しかし、殺さんでくれよ？あの娘は我が妻とするのだからな」

「承知しておる」

あいつら、相変わらず人の話聞いてねえな。

「ディアナ、手は抜くなよ」

「ふん、言われるまでもない。お前こそぬかるなよ？」

笑みを交わし、拳を打ち合わせる。

「さあ、やろうか酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 ・ 童子。俺は鷹司統也、混血の忌子だ」

「行くぞ茨木童子、準備はいいか？」

不敵に笑う二人と二柱。四つの声が重なった。

パーティー
宴の始まりだ

直後、俺達は同時に地を蹴った。

ディアナと茨木童子は右へ、俺と酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子は左へ。

着地の瞬間に空中で瞬動を発動、酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子の着地を狙う。

全体重をかけた渾身の正拳は交差された両腕に防がれた。そのまま振り払われた腕に逆らわず後方へ跳び距離をとる。

遅れることなく追従し、お返しとばかりに振るわれた右腕を交わし、わき腹を狙う。

これもし不発。素早く引き戻された肘に止められた。

連続して放たれた、すくい上げるような左のアップパーを右肘を支点にして跳び上がることで回避。そのまま側頭部を蹴りつけさらに上へ。落下速度を上乗せした最速の斬撃を叩き込む。

響く甲高い金属音。

必殺を期して放った一撃もまた、どこからともなく現れた槍の柄に阻まれた。

槍を力任せに振り抜かれ、吹き飛ばされる。

「ちい、何かあるだろうとは思ってたけど、よりによって槍かよ」

五メートル近い長さの柄の先に、さらに一メートルほどの穂先。

本来刺突用の武器である槍だが、この長さになると斬撃もかなりの脅威となる。さらに、魔力を纏っていた様子がなかったにもかかわらず、その柄には全く傷が見られない。あれで殴打されるだけでも人間にとっては致命傷となるだろう。

「危ういところだった。やはり混血だけのことはある、脆弱な人間とは比べ物にならないわ」

「お褒めにあずかり光栄だが、残念ながら今の俺は普通の人間と変

わらないさ。人外の血は封じてるんでな。もつとも、あまり時間がないんでな、解放させてもらう」

できることなら使いたくはなかった。だが、酒&#21534；童子に隠し玉があつた以上、今のままでは勝つことなど到底不可能。

もちろん、最悪の場合俺の精神はこの身に潜む人外の本能に飲み込まれてしまつたろう。

それでもやるしかない。このままここで時間を無駄にしているのは、多くの人命が失われることになるのだ。

玉兎を前方に突き出し、伸ばした右手の手首に左手を添える。

「リリース・アクセル・イグズイウス」

解放の瞬間に飲み込まれてしまわないよう、『此处にある自分』を強くイメージする。

「オーヴァー・ドライブ」

そして解放の言葉を口にした。

「すごい……」

伝説級の大鬼神に対して、一步も引くことなく戦いを挑む統也さんの姿に、隣でそれを見ていた涼が感嘆の声を漏らす。

私もそれに同感だ。有効なダメージこそないものの、こうしてみている限り統也さんの方が優勢だ。

しかし、一つ引つかかることもある。配下である茨木童子が大剣を振るっているのに対して酒&#21534；童子は徒手空拳。確かにそれでも強いのだが、上級妖魔ともあろう大鬼が得物を

持たないなどということがあるのだろうか。

そして、その疑問はすぐに解消されることになった。

酒吞童子が虚空から取り出した長大な槍。その瞬間、統也さんの表情が変わった。距離をとり、酒吞童子と何か言葉を交わすその横顔は、何かに耐えるような沈痛なものだ。

日本刀を一振りした後、正面に立つ酒吞童子に向かって右腕の肩から切っ先まで、一直線に突き出す。左手は右手首に添えられた。

軽く目を閉じ、朗々と言葉を紡ぐ。

「リリース・アクセル・イグズイウス」

聞いたことのない詠唱。しかしそこからは途方もない力を感じる。

「オーヴァー・ドライヴ」

その言葉は、そこかしこから聞こえる轟音の中でもかき消されることなく響き渡った。

突如巨大化した統也の魔力に思わず振り返る。

「なっ、これは、まさか……」

「ほお、これは見事だ。我らの妖力が路傍の小石に思えるわ」

そう、まさに圧倒的。昨夜感じた魔力が霞むほどの魔力の奔流。その静謐でありながら力強さを併せ持った流水の様な魔力に驚嘆すると同時に、それを解放した統也に不安とそれ以上の苛立ちを感じ

る。

昨夜ですら相当の苦しみを伴ったというのに、これほどの魔力を解放してはどうなるか分かったものではない。

それだけならばまだいい。要は精神力の問題なのだから。幾多の苦しみをその身に受けてきた統也の精神力ならば、その苦痛にも打ち克てる可能性は高いだろう。

問題はそのあとだ。昨夜の統也の言葉から察するに、これが統也の全開なのだろう。つまり今、統也の体内では、普段は封じられている人外の血が活性化しているはず。

これが意味するところは一つ。

こうしている間にも、統也の体はその血によって浸食されているということだ。

「バカ者がっ……」

解放などせずとも、私がこいつを倒した後、二人で戦えば済む話ではないか。むしろ、私はそうしてしかるべきだと思っていた。

それでは間に合わないと思ったのだろうか。

私は統也にそう思われるほど信用されていないのだろうか。

そう考えると腹が立ってきた。その怒りをぶつけるべく、目の前の茨木童子を睨みつける。

「おお、お主もやる気になったようだな」

「ふん、そんなことはどうでもいい。私は今機嫌が悪いんだ、さっさと終わらせるぞ」

そう言って、返事も待たずに跳び出した。

何とかうまく行ったか。

目を開いた後、最初に浮かんだのはそんな安堵だった。

体には異常はない。意識も、今のところはつきりしている。

体内をめぐる魔力の流れも正常。

懸念していたことが杞憂に終わったことに安堵しながら、目の前に立ち、動きを止めている酒&#21534・童子を見据える。

「それが、汝の力か……」

目を見開き、驚愕をあらわにする酒&#21534・童子は、しばらくの間をおいて心底楽しそうに笑い出した。

「ふ、ふふふ、ふはははははっ。これはいい、いいぞ、最高だ。我の目に狂いはなかった。この身生まれ降りて数百年、これほど心躍ったことはない」

天を仰ぎ、愉悦に体を震わせる酒&#21534・童子を冷やかに見つめる。

「お楽しみのところ悪いが、さっさと始めないか。さっきも言ったが、こつちにはあまり時間がないんだ。それで勝ちと出来るほどあんたは小物じゃないだろ」

「無論だ。では、改めて始めよう」

「ああ、第二幕の開演だ」

最終話

しばらく言葉を発することが出来なかった。

初めて聞く詠唱によってもたらされたものは、それほどの衝撃を持つて私たちの目に焼き付いた。

爆発的な魔力の奔流が収まった後、なおも吹き荒れるマナの嵐の中から姿を見せたのは、月光を浴びて煌く銀髪を靡かせる蒼い左目と紅い右目を持った青年。

「あれが、統也さん……なのかい？」

ようやく口にした言葉は、そんな気の抜けたものだった。

しかし、言葉を口に出せただけでも驚きだ。

今までに感じたことのない圧倒的な魔力のせい、足が震えているのだから。

先に動いたのは酒& amp; #21534；童子だった。

両手で構えた槍を突進と共に突き出し、その場で反転しながら薙ぎ払う。

その顔が驚愕に歪んだ理由は単純。

渾身と力を込めたであろう薙ぎ払い、左手一本で止められてしまったのだ。しかも統也さんはその場から全く動いていない。ただ、

『左手を添えただけ』。

そこからは一方的だった。

刹那の間で懐に入り込んだ統也さんの掌底でなすすべもなく打ち上げられた酒& amp; #21534；童子を待っていたのは、上空で左の拳を振り被る統也さん。撃ち落とされた酒& amp; #21534；童子に追いつき、墜落の寸前に蹴り飛ばす。

その先には妖魔の壁。数十の妖魔を巻き込みながら吹き飛ばされた酒& amp; #21534；童子に向け、統也さんは左手を突き出す。そこから迸った紅蓮の炎弾は、容赦なく酒& amp; #215

34：童子に体を焼き、周辺に居た多数の妖魔を消し飛ばした。

「ここまで出鱈目だといっそ清々しいな」

その声の方に視線を向けると、台詞とは裏腹に不機嫌さを隠そうともしないブリュンヒルデさんが居た。

「茨木童子は、どうしたんだい？」

「ふん、あんな小物、とうの昔に消し飛ばしてやったわ」

「だっ、だったら、統也さんの援護につ……」

どうでもいいことのように言うブリュンヒルデさんに、涼が言う。しかし、ブリュンヒルデさんに睨みつけられ、最後まで言い切ることは出来なかった。

「あの中に割って入れだど？ 菊川涼、貴様は私に死ねと言うつもりか？」

その言葉に絶句したのは私も涼も同じだった。

よく見れば、僅かとはいえ、ブリュンヒルデさんの体が震えていた。

「悔しいことこの上ないが、今の統也の力は圧倒的だ。下手に近付けば死ぬのはこちらだ。私たちには、此处で黙って見ていることしか出来ん」

口惜しげに顔を歪めるブリュンヒルデさんは、酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4：童子と戦う統也さんの姿をほんの一瞬でも見逃すまいと凝視している。

その視線を辿って統也さんの姿を目にしたとき、大気のざわめきを感じた。

天に掲げられた左手の上、上空三メートルほどのところに莫大な魔力が集まっていく。

その魔力量は一人の上級魔法師の総魔力量に匹敵する。

「な、なんて魔力だ……」

「あれは……まさか、禁呪!？」

禁呪。それは、あまりの破壊力ゆえに禁忌の呪文と化したいくつかの魔法をさす。

その破壊力は上級魔法をも凌駕する。

その考えを否定したのはブリュンヒルデさんだった。

「いや、違うな。あれは魔法というのもおこがましい、そういう代物だ」

「どういうことだい？」

「本来魔法というものは、詠唱によって世界に呼び掛け、その力を借りて奇跡を成す。それに対して、あれは全く別物だ。自身の内面から現象を世界に呼び出し、無理矢理世界を上書きする。現実改変、とも呼ぶか」

「現実、改変……」

その魔力量に危機感を覚えたのか、満身創痕の酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子が駆け出す。

その剛腕が統也さんを捉える前に、直径一メートルほどの大きさに

なった、高密度の魔力を内包した球体が打ち出される。

瞬間、世界が変容した。

天を衝く巨大な光の柱が酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4・童子を中心に、半径十メートルほどの空間を消し去る。

その柱から、全周囲に広がった光輪に触れた妖魔が次々に消滅する。後に残ったのは、いまだに空間を漂う燐光と、妖魔の大軍と乱戦を演じていた魔法師達のみ。

数百体の妖魔を一瞬のうちに無に帰した統也さんは、何の感慨も見せることなく『大樹』へと向かう。

術式は完成し、あとはその時を待つのみとなっていた『大樹』に手を触れ、何かを口ずさむ統也さんを見つめるのは、いまだに事情を呑み込めていない魔法師達。

『大樹』から手を放した統也さんは、見えない何かを振り払うように一閃する。

それと同時に、ガラスの割れるような音を伴って何かが砕け散った。『大樹』の周辺に満ちていた光が徐々に収まっていくのと共に、そこに渦巻いていた魔力が大気中へと霧散していく。

「奇跡だ……」

誰かが呟いた。おそらくそれは、此処にいるすべての魔法師達の総意だろう。

「勝ったんだ、俺達は勝ったんだ……」

『うおおおおおーっ！』

囁きがざわめきとなり、最後には歓声に変わる。

それを聞きながら、私たちは示し合わせたように同時に走り出した。『大樹』の袂に立ち、歓声を上げる人々を穏やかな微笑で見つめる

銀髪の青年のもとへ。

「なんとかなっ たな」

視線の先で、抱き合い肩を叩き合う人々を眺めながら呟く。

「シール・アップ」

再度封印を施しながら、酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子の最後の言葉を思い出す。

『くつくつく、我等を止めたか、流石あやつの子よ。だが、これで終わりと思うなよ。すべては、あの御方の御心にままに』

森で戦った時にも酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子の話にも出た、あの御方という存在。そして、あやつの子という言葉。

あの御方とは誰なのか。なぜ異世界の鬼である酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子が俺の親を知っているのか。

答えは出ない。

しかし、この襲撃の裏に何者かの意思が存在していること。その何者かは、酒 & a m p ; # 2 1 5 3 4 : 童子よりも高位の存在だということ。

それだけは確かだ。

「統也！」

聞き慣れた声に視線を上げると、こちらに駆け寄ってくる三人の少年少女。

怒ったような表情のディアナ。安心した様子の氷雨。嬉しそうに笑

う涼。

三人を苦笑で迎えると、氷雨と涼は足を止める。
しかし、速度を緩めることなく突っ込んできたディアナには体当たりされた。

「げえ……」

予想外の行動にまともに食らったものの、何とか踏みとどまること
が出来た。

「おいディアナ、何する……」

見下ろしたディアナの様子に、上げかけた抗議の声を呑み込んだ。

「ディアナ……？」

胸に埋めていた顔が上がると、その両目には大粒の涙。

「何故お前はそこまでするんだ。自分の身を削ってまで守る価値が
この世界にあるのか？どうして、お前は……」

それだけ言って、再び顔を胸に埋めるディアナの頭を撫でる。

「この世界にはお前たちがいる。理由なんて、それで充分だろ。
…けど、一応謝っとく。約束、したもんな」

「謝るくらいなら最初からやるな」

「分かった、次からは気を付ける」

「本当だな？約束だぞ？」

「ああ、約束だ」

仕方ない許してやる、と一歩下がりがら言うディアナに笑いかけると、ディアナは顔を赤くして顔をそむけてしまった。

「なんでだ？と視線で涼に説明を求めると、「こいつ信じられねえ」とでも言いたそうな顔で睨まれた。視線を氷雨に移すと、こちらは顔を真っ赤にしてやつぱり睨んでいた。

氷雨さん、あなたに睨まれると、とても怖いです。

何ともおかしい空気になってしまったことに内心首をかしげながら、それでも何とかしなければ、と殊更明るい調子で切り出した。

「そう言えば、お前ら腹減ってないか？さつさと帰って年越し蕎麦でも食おうぜ」

「統也、お前の手作りだろうな？」

「ああ、勿論だ。麺から出汁まで、完全自家製だ」

「統也さんが作ったのかいつ」

「それは食べてみたいですね」

「なっ、貴様らも食う気かつ」

「「もちろん」」

「ふ、ふざけるなああつ！」

「おいおい、落ち着けよディアナ。もともとそのつもりだったんだ。

とても二人で食える量じゃない」

一転して騒がしくなった三人にほっと一息。

顔を真つ赤にして叫ぶディアナ。それをのらりくらりとかわす氷雨。そんな二人を苦笑いを浮かべて眺める涼。

こいつらがこんなに楽しそうなんだ。

「おい、早く行くぞー。遅れた奴には食わせないぞー」

気になることはあるが、とりあえず今は新年を祝おう。

その言葉に、前を歩いていた俺を追い抜いて行く三人を眺めながらそう思う。

見上げた空には淡く輝く満月。その明かりは俺たちを見守っているように思えた。

だから俺は笑おう。出来る限りの笑顔で精一杯に生きよう。

視線を下げると、二十メートルほど先で立ち止まり俺を呼ぶディアナたちがいる。

俺は急いで追いつき、三人に笑いかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2678g/>

そして彼は月夜に笑う

2011年1月26日01時45分発行